
モグラ叩き（三） ～ 課題提出編 ～

じょーもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モグラ叩き（三） ～課題提出編～

【Nコード】

N6044K

【作者名】

じょーもん

【あらすじ】

極東アジア軍日本県支部 統合幕僚本部 情報本部所属
月国境線管理チーム出向中の斉藤歩が、解決すべき課題。

【その1】 何者かに拉致された初恋の人で実父の愛人、秋篠瑠璃子と、おそらく自分と間違われて巻き添えを食った霧島飛竜を救出する。

【その2】 微細重力フィールド恐怖症を患う霧島飛竜が、ルナ・

マスドライバースystem・レディーサヤコのメンテナンス作業を乗り切る方法、もしくはしなくてもいい方法を考案する。

【その3】 母親を殺し、自分を暴行した連中の黒幕をあぶり出す。

【その4】 月の現状を「しかたない」と納得するしかない現状に表立って「異」を唱える。

【その5】 八割以上の達成率で十二時間のマラソン『モグラ叩き』を遂行する。

ルビ多めにつきIEor縦書きPDF推奨です。

Vol.1 『ザ・ライダー・プール』

Vol.2 『たまごどんぶり』（ノベルゲーム@まぜのべ）

Vol.3 『トラブル・バーゲン』（未公開、ノベルゲーム@まぜのべ）

Vol.4 『モグラ叩き』課題提示編、暗中模索編、課題提出編（本作）

物足りないリクエストがありましたので、加筆増量の予定です。

序みたいなもの——もしくは夢？（前書き）

本作『モグラ叩き』は、課題提示編、暗中模索編をこー読の上お楽しみいただけたらと思います。

もちろん、ちよつとばかり先の話『ザ・ライダー・プール』と、そもそも話、ノベルゲーム『たまごどんぶり』もついでに食べていただいた方が美味しいかと存じます。

ではでは、気分的にはノンストップ、斉藤歩暴走編スタートっ！

序みたいなもの——もしくは夢？

このまま、ゆっくりと微睡まどろんでいたかった。

とても心地よい抱擁。女の人の胸は気持ちがいい。

目が覚めると、赤い地獄。

だから、この白い闇の中で、いつまでも抱いていてもらいたかった。

朝が来なければいいのに。

現実が痛みしかもたらさないのであれば、

現実など要らない。

未来なんかも要らない。

瑠璃子さんの、胸の中でずっと眠っていたかった……。

* * *

——サイトーアユミって女の子だと思ってたのにな。

あれ？ タ力？

——まあ、野郎でもいいや。よろしく。

顔だけでなくて、まだ身体も可愛らしさを残したサイズだった、少年の日のタ力が、人懐っこい笑顔で手を差し出してくる。握手？ その手を恐る恐るとると、大きな手がしっかりと握り返されてきた。

——執行猶予ってやつ？ よかったな、お互い。

少年の微笑みが、満面の笑顔になった。力強くて迷いのない悦び含有度99%以上の笑顔。ああ、こんなふうな笑顔を人間という生き物ができるのだ。

そうだ、ここは、定員が良いところ、三十といった人員搬送用としてはごく小型なものになるライトフライヤーの中だ。フライヤーは、極東アジア国領の植民衛星都市、ネオシャングンに向つていた。

軍を志したにもかかわらず、星間航宙専用船や、地球の大気圏へ突っ込むシャトルシップの操船や、さまざまな微細重力下作業に精通すべく、民間の専門学校に送られることになった少年や少女たちが乗っていた。

徴兵制のない日本県だから、適性試験の結果も重視されるが、基本的にある程度は本人の意向も尊重される。兵士に憧れた軍事オタクではなく、諸所の事情で軍という手つとり早く広き門のお世話になったものの、前線で凶器を振り回す立場になることを望まなかった者たちは、こうやって戦闘以外でのスペシャリストを目指すのだ。

少なくとも、軍に所属して給料付で訓練期間を過ごしたならば、五年の兵役義務は伴うが、それを無事にこなせば、少額退職金・微細年金付きで引退できる。食いつなぐために軽犯罪を起こして刑務所のお世話になる者も世の中には多い。貧困から抜けるための進路としてなら、同じ安直な道でも随分人間としてマトモな選択肢だろう。

訓練期間と兵役期間の十年余。だけど、それで学歴と職歴で履歴書の十代の欄をうめられるなら、犯罪歴を記入されるより魅力的な道なのだ。生まれつきのラックに恵まれていない人たちがいるということを知らなかった。

このとき自分は、あのタカの弾けるような笑顔の本当の意味に、まるで無知だった。

ただ、こんなふうに笑えるということが、羨ましかった。

笑い方というのは、生まれ持って人間の本性に宿っている能力のはずなのだけれど、どうやったらいいのか、あのときは分かっていた。なかった。そんな自分という皮が嫌だった。

* * *

——いい？ 乗船クルーはタワーを信じてるのよ。

八方塞がり。どこにも逃げ道はない。どうすべきか何も思いつか

ない。何ができる？

——できないなんて言葉を聞くぐらいなら……

できないってものは、だれにだってできない。そう弱音を吐くことを、君は許してくれないの？ 春花^{シュンカ}……。

——ド下手くそな歌を聞く方がマシよ。

……うた？

——できないなんてゴタクきくより、ずうっと……。

春花、君はどうしてそう容赦がないんだ？

だけど、僕はマイクに手をのばす。ヘッドセットについたマイクは歌を響かせるためのものでは絶対じゃないと思う。それに、音痴ではないと思うけど、ここ何年も僕は歌なんか忘れていた。舌に馴染んだ音楽は皆無。

それでも、マイクを口元まで引きずり下ろす。

ね、タカ、駆け出しのFD^{フライト・ディレクター}の歌なんか、誰も聞きたくないだろうけれど、それでも『できない、ゆるしてくれ』なんて言葉よりベターかな？

クリスマスはとくに過ぎて、新年明けましておめでとの挨拶も間抜けになった一月末の総合実習船訓練のとき。モニターから繰り出されるデータの波と、それをかみ砕こうとする管制官ブースという防波堤の戦い。それを俯瞰できる、第一管の最後尾にあるCF

Dシート。

壁一杯のモニターに映し出される状況は、一刻も早くなんとかしろとせつつく。

だけど、何も思いつかない。

ごめん、何もできない……。

——あのさあ。できたらいいなと思うことでも、今できないんだったら、それについて考えてる時間、思いっきりムダじゃん。

タカ、お前なんで、そこでそんな笑顔で、キツイ言葉をはける？

——どんなアホみたいに思えることでも、できることがあるなら、そいつをやるのがベターだ。ベストなんかそうそう見つからない。ベストを捜すなんてアホだ。お前に今できることをやる。ほら、ベターだろ？

生物学者のルイス・トーマスは言った。「大抵の物事は放っておけば、おのずとよい方向に向う」「助力せよ、少なくとも害をなすな」。

——おまえねえ、家燃えてるとき逃げ出さなきゃ、燃えるだろうがあ。そんなとき何する気だよ。ぼーっと待機か？ 貴重品のリストアップか？

諸君。今日からはシンガーと呼んでくれたまえ。

あのととき、僕は歌った。

なぜって、できないって言葉より、歌の方がマシだって春花が言
ったから。

……LaLaLaって、ハルカと歌ったことがあったのを思い出
したから。

すべてが片づいたあとで、スター^{ときた}鵜田にどやされた。

——1月末のクリスマスソングたあ、どというセンスだ。

* * *

Deck the halls with boughs of
holly, Fa la la la la la,
la la la...

「それ何って歌だっけ……。前ンときも聞いたよな……」

なんだっけ、ひいらぎ……。かざろっ……。だったかな。

This the season to be jolly, Fa
la la la la la, la la la la...

* * *

——こわいの。

でかくて、ごつくて、羨ましいぐらい見るからに男という感じの飛竜が、珍しく酒に飲まれて泣き言をいう。可愛らしいと思ったなんて言ったら、怒るかな？

そう、俺は飛竜に言った。

怖いという気持ちは、どうにもならないと。

だけど、どうにもならないと、しつぽを巻くのも、どうにも、こうにも我慢ならないとしたら、どうだ？ 怖いぐらいじゃ人間、死んだりしない。

タカの決めゼリフ。生きてる間は最悪じゃない。

酔っぱらうとどこか一本抜ける飛竜は、おしぼりでテーブルをぴかぴかに磨いてから、中身を食い食い、脱け殻になった枝豆のさやを並べる。大昔、地球上にしか人がいなかったころ、ずっと以前から大陸だったと思うけど「新」大陸と呼ばれたところに線路が敷かれていくように、枕木みたいな顔をした道が、じりじりとのびていく。ガタイに似ない、妙にちまちました変なクセ。

なんとか道を捜して落ち込んだり愚痴ったりする飛竜を、みつともないと、斉藤歩、おまえは嗤うか？

手を貸したいと、思うだろう。

道を捜して、なりふりかまわず、つつぱしれば、背中に手を添えてくれる仲間がおまえにはいるんじゃないか？ だったら……道がなくても走る。枝豆のさやの道だろうが、モグラのトンネルだろうが。

道ができるといえば……、

僕の前に道はない

僕の後には道はできる

——これってモグラのことを歌ったんだと思うんだよな。

ずっと以前、高村光太郎の『道程』をそうやって引用して茶化している小説を読んだことがある。なるほど。ああホントだ、と思って可笑しかった。

ませたガキでドーターって響きの方に気を取られてたときだったから、なんだか、不意打ちをくらったような感覚だった。不意打ちそう、攻撃は正面からよりサイドから。

——意表を突くことができりゃ、飛竜……なんとかなるか？

モグラってさ、土の竜って書くだろ？ 土の竜ってそもそもミミズのことだったんだよ。ミミズって知ってる？ あの土壌再生の救世主の、ぱっと見た目が哺乳類の消化管みたいなやつ。あれのことで、土の中にいるってだけで混同された。ミミズは農作物の貴重な友達だけど、モグラは農業的には害獣って位置づけだからね、本来混同のしようもないと思うんだけど。本当、色々とおもしろいよね。

——竜って字だけで、ミミズとモグラが一緒くたなら、飛んでる竜

もそのうち一緒にされちまうかな？

ん？ そりゃあ、ジャンルが違うから無理だろ。

——タカ、てめえ、何か俺に含むところでもあるか？

タカが飛竜をからかって交ぜっ返したのを気が付かなくて、危うく真面目に悩むところだった。飛竜とタカがごっちゃごちゃとレスリングを始めてから初めて、タカが言った飛んでる竜というのが、伝説に出てくるドラゴンじゃなくて飛竜のことだと気が付いた。

重量級で肉体労働派の友人達は、子供のようにじゃれあっているだけのつもりかもしれないけれど、傍^{はた}で見ると分には迫力満点なファイトに見えなくもない。よくやるよ、という感心半分。疎外感半分。

* * *

「起きろよ……データマン」

耳の穴の中に、もしかもしかと生えて、自分に相応^{ふさわ}しい音が入ってくるのを待ち構えている有毛細胞が、実際の音に反応してふるふると震えでもしたのだろうか。記憶に響く声とは明らかに感触が違、う、本当の声が耳に聞こえて——ああ、自分は眠っていたのだ——と斉藤歩は思った。

意識がふいに覚醒を知覚する。

「時間のロス追加、どの位？」

飛ぶことだけが大好きで、そのために生きてると断言するような名前がまさに体を表しちまった感のある霧島飛竜。ここんところずっと、苦手な宇宙で、らしくもなく、くさくさしていた。やつが大好きな空に、もう一度返してやらなきゃ、殺されたって成仏できないよな、飛竜。

「大丈夫、30分までは行つてない。どう……気分は？」

精神的なダメージでつぶれかかっていた斉藤を、肉体的なダメージを与えて叩きのめした覚えが有るタカが、一応、責任感を感じつつ体調を案じたけれど、斉藤はそれに取りあわず、話を進めた。

「……春花は？」

「連絡あつたよ。だから、松ねえ捕まえておくように伝言ちゃんと伝えたから」

ふっと、斉藤歩が微笑んだ。その笑顔にタカの心臓はちょっと踊りそうになった。野郎にときめくシユミはないのだけれど、いい笑顔だ。何か一皮剥けたような、茹でたての卵みたいに、ほかほかつやつやしている。

「春花にもう一度連絡して、プラムに連絡取れって伝えて」

「……プラムってなんだっけ」

「EXK放送の女子アナ」

ああ、そんなのも世の中にいたっけ。一瞬、タカはきよとなつた。

プラムはEXK放送の人気アナウンサーだ。その美貌と天然一本抜けたボケぶりで芸の一つもないアイドルなど、爪の先にも引っかけられないほどに売れている。

もちろん、美貌とスタイルとセンスのよさといった、ダントツの

セクシャルアピール度で、世の男どもに強固なファン層を持つていうことでも有名だ。

ついでにシンガーやクリエイターと称する連中としょっちゅう浮名を流しては、報道するほうじゃなくて、される方になっていたりする。ファッション誌で特集を組まれるときは、もちろん『あのステキな○○さんの、美しさの秘訣』みたいなノリになる。

『軽薄なカンチガイ女』みたいな形で定期的にバツシングのターゲットにされているかと思いきや、バラエティ番組なんかをみると、別に女性から嫌われているというわけでもないらしい。むしろ、女の武器を振りかざすのは、女性にウケないのではないかと考えるタカには、いま一つ謎な存在だ。

どちらにしろ、今の状況で出てくる名前としては、非常に馴染まない。

「……………どうして？」

タカの素朴な疑問に、斉藤が短く答える。

「彼女の本名は霧島梅香^{バイカ}。……………飛竜のお姉さんだ」

あのプラムが、あの飛竜のお姉さん？ タカは驚く。飛竜の姉といえば、霧島の現社長、中年で貫禄十分な松姫のイメージだけがやたらと強い。他にもあと二人もお姉さんとやらが居るのは聞いたことがあったけれど、どうせそういう方向の実業家やつてるような、どすこいタイプのお姉さんだと思っていた。

「それはちょっと知らなかったぞ。マジで？」

言いかけて思う。だけどその美貌にだけは、だれも文句をつけることができない男殺しのあのプラムと、水も滴るいい男系でどちらかというと女にだらしない飛竜が姉弟という方が、あの霧島松姫と姉弟というよりしっくりくる気もする。

「タカ、無駄話は後で飛竜も入れてにしよう。俺が寝てる間に、徳永さん『お迎え』にきてくれてる？」

「お迎えって冥土からかよ。……で、徳永さんって、誰……？」

徳永のことを話したことがあるのは、そういや、同僚のカレステイラ・デイエゴにだったつけ。だれにどこまでのことを話したのか、正直記憶が曖昧だ。

「昔、俺が悪さしたときに、逮捕しにきたお巡りさん」

「逮捕お？」

「俺は、ガキんときに警察のホストに突っ込みかけて捕まったの。で、税金泥棒として生きるとお偉いさんに言われた。黄金の三択問題だな。つまり刑務所か、警察か、軍を選べって裁判で決まった。あんときはいろいろあつた直後で、警察不信大きかったからね、気分的消去法で一番マシなんを選んだ」

タカの顔が険しくなる。

「聞いてない」

「前に聞かれたとき、選択肢がなかったって言った段階で、おまえ聞くのやめたじゃん」

タカが、あ……、というような顔になる。

「ここに……」

斉藤は自分の延髄辺りに手をやる。

「国家の安全を蹴たぐる種類の犯罪から、俺が足を洗わなかった場合に、呼吸中枢にちよっかいかけられる装置が入ってる。だから……選択肢はなかった。昔話はこれぐらいいいか？ タカ」

斉藤は、呆然としているタカをそのままにして立ち上がった。それから、タカが自分のジャケットを持っているのに気付き、それを奪う体で取り返して羽織った。淡い灰色のジャケットには、血のシ

ミと分かる汚れが目立ってついていていた。どうにも見栄えが悪いけれど、スターモードに自分を追い立てるとき、肩に馴染んだ重さがないと、有体ありていに言って気合が入らない。

「よこれちゃったね。それ、クリーニングで落ちるかな？」

「……ん？ 血は時間たつと落ちないかもね」

ジャケットの汚れを指摘されたところでどうよ、という気分にもなつたけれど、つい、真面目に答えてしまう。

「落ちなかつたら、処分？」

「ああ、多分な。……タカ、おまえ変だぞ。ジャケットなんか気にしてる場合……おいっ」

タカは、医師の机上にあったペン立てに突き刺さっていた極太のフェルトペン——何に使うのかは不明のそれを手にとる。と、ぐいと手を伸ばして、斉藤の胸ポケットの上に一筆書きで、黒々とした星をがつつりと書き込んだ。

……胸に星？

「やっぱり、スター斉藤には、星がなくなっちゃな……うん、似合ってるよ……」

したり顔で微笑まれても嬉しくない。全く、こいつはいつまでもつても悪ガキ根性抜けやしない……。

「縁起でもない。黒星つて、勝負の世界じゃ負マケのことだぞ……」

油を売っている場合ではないのだけれど、愛用のジャケットをクリーニングに出すまでもなく止めを刺すようなことをしたタカに、つい、斉藤は文句がでる。

タカが顔を歪めた。

「あゆみちゃんって、ホントにネクラ……」

1・第一手

「ちょっと待て、三上、何だって？」

携帯端末だから声を荒らげる程度で済んでいるが、そうでなかったら完全に掴みかかりそうな勢いで、徳永は問いただした。

——老人性難聴なら現場から引かせろってチクってやるぞ。徳ちゃん、何度も言わせないでほしいんだが斉藤歩を任同（任意同行）して、ウチにご招待申し上げてくれ。地域課の助っ人に入ってるくせに出しゃばって、斉藤の事情聴取しにいつてるんだろ、裏は取れる。

でしゃばって、とは親しき中にもなんとやらを潔く捨て去った言いぐさだ。徳永は憮然としながらも、いぶかった。三上はどちらかというと制服でないときでも言葉づかいは堅い方だ。余程のことがなければ、心の中でド阿呆扱いをしている人間にも、ちゃんとした言葉で話すタイプだ。今回の徳永は昔得意だった暴走ではなく、ちゃんと指令があって被害者の身内への聴き取りに来ているだけだ。徳永が抗議する隙を与えず、三上が続ける。

——というか、徳ちゃんとは本当に外さないよな。そこにいてくれて助かった。斉藤歩が森本茂の倅^{せがれ}って段階で、喜んでひっぱりにつてくれる人間は、まあいないし、第一、樺崎もそこだって？ そりゃ、地域課の連中じゃ尻込みするよな。さすがマル機（機動隊員のこと）の徳ってことか？

それで、この饒舌^{じょうぜつ}だ。まったく三上らしくない。徳永が現役バリバリの——今も現職警察官ではあるけれど——機動隊、銃器対策レ

ンジャー部隊員だったころ、丁度、青山・百合根のドンパチ華やりし頃で、軍人なんだか警察官なんだかいま一つ判断に苦しむような現場によく出張ったものだ。もちろん下部組織の組長は張っていたが、青山会クラスでは、まだ若頭ですらなかったころの樺崎としよつちゅう煮え湯を飲んだり、飲まされたりした仲だ。

マルBの警察官と暴力団は裏でつるんでいることも多いが、マル機はその勤務形態と職掌範囲から、そういう意味で馴れ合うことはなかったと断言できる。

が、樺崎はそのころからあらゆる意味で目立つ男だった。長く角突き合わせた結果、徳永は樺崎に対して自然と一目置くようになっていった。それは、樺崎にしても多分そうなのだろう。

前のドンパチで大怪我をしてから、歩行に困難はないものの、時々腰の鈍痛に悩まされるようになってしまった徳永は、現在、方面機動隊員だ。和田のような若い者もいるので、徳永自身はその呼称はどうかとと思っているが、『中年部隊』と陰口を叩かれる部署だ。万年巡査長だの巡査部長だの、給料はそこそこ悪くないけれど、命令系統として上がりようがないヒラのドン突きだ。まあ、初等高等部卒の地方採用公務員で、ドンパチに夢中になりすぎて昇進試験でドベリ続けた徳永でも、一応、階級としての巡査部長という肩書ぐらいはもらえる年齢なのだから、方面勤務も妥当といったところだ。

方面というのはぶつちやけ、パートタイマー機動隊員だ。月自治区は穏やかな風なぎの後には、当たり前のようにキナ臭くなる。平常時は警察署員として、有事は機動隊員として即戦力になる方面の人数を多く確保してあるということだろう。まあ、希望しようがしまいが、和田のような健康な若手は半強制的に方面にされて、定期訓練に励まされることになる。機動隊ほど好き嫌いが別れる職種はないだろう。立派な体をしている和田はぱつと見、マル機に相應しいけ

れど、本人はどうもあの軍隊式といていい、むちゃくちゃな上下関係が絶対の、体育会系の体質が好きになれない様子だ。まあ、それでさっさと抜けようと昇進試験勉強に気合が入るなら、それはそれで機動隊の一つの効能だろう。

翻って、ペーパー仕事だの、画面に力チャカチャ文字を打ち込む事務方の仕事など、今更するのは勘弁してほしい徳永にとつては、第二機動隊員として、地域課の応援というか頭数合せに、パトロール業務をしているふりで定年までお茶を濁していいというのは、まあ妥当な辞令というべきだろう。

地球時代からの遺産としてある銃器対策レンジャー部隊のシンボルマークの「若獅子」を襟えりにつけられなくなったのは寂しくもあるけれど、まあ、今の総務課でも刑事課でも地域課でもない立ち位置は、気に入っている。大分しょぼくはしたけれど、徳永の襟から『ライオン』が去つていっても、機動隊員であることを誇る『桜』はまだ咲いている。

「容疑は？」

徳永は短く聞いた。

——任同で、被疑者に容疑内容を説明する必要があるか？

おいおい、常識的にはいるだろう、実用上、必須とは言わないけれど——と、徳永はため息をわざとらしくついた。まったく、今日の三上はどうかしている。

三上も三上なりに、システムを洗いまくって何者か（この場合、斉藤に決まっているが）に関与されたという確証は持ったということだろう。けれど、任同しろというなら逮捕状が請求できるほどに証拠を固めてないということだ。半日前に三上がそういったら、徳

永は喜んで斉藤歩の勤務先に出掛けただろう。警察のシステムにハッキングした事実について「勤務先で」問いただされるのは斉藤の実生活にとって非常に不利になる。だから、職質（シヨクシツ職務質問）ではなく任同を選ぶのは、こちらの好意と思ってもらっていいと、ニコリ笑顔で言えるだろう。斉藤もそこでジタバタするようなマヌケとは違うという確信がある。

「三上、室長のテメエがそれを言っちゃおしまいだと思わねえか？ 悪いけど、俺は気が変わった。斉藤がフダ（逮捕状）を出されるようなへまやらかさねえうちは、動く気はねえ」

——いいか？ 徳ちゃん。これは俺、サイ対三上からの依頼じゃない。金筋（キンスジ警察組織の幹部のこと）からのごり押しだ。俺だって、斉藤なんかに任同かけるのは不本意だ。

「……お前だって十分に金筋だろうが」
徳永が厭そうに言う。

——もっと上だ。

徳永に輪をかけて厭そうな三上の声がする。

けれど、それでようやく納得した。三上はそのどっかからのごり押しを断れる立場でなく、それに対して腹の底の底から怒っているのだ。自分のようにごみ箱を蹴飛ばしたり、近場の若手隊員に根性入れて憂さを晴らせないと、職掌と立場と性分が自分と違うとはいえ気の毒に……、徳永がくすりと笑った。

「月のサイバー犯罪で、三上より上からモノいえるやつなんかそう居ないだろうが。で、後学のために聞いとくが、そのスジつつのは、どういうスジだ？」

——新京だ。

新京というのは、極東アジア国の政府主要機関や民間の経済中枢があつまっている衛星都市の一つだ。その戦略上の重要拠点であるという性質から、政治機関が集中している街区については、高度なセキュリティ管理を敷かれてあり普通の一般人が気軽に立ち入れる場所ではない。そして一般街区は有名企業が本社機能をこぞって置いてある華やかな区画だ。けれど、三上がいうなら政府機関の方で間違いない。

「まさか、サツチヨウ（警察庁のこと）か？ このヤマで出てくる名前じゃねえぞ。冗談にしちゃシヨボいぜ、笑えねえよ」

ありえないと思いつつ徳永が口にする。ルナ自治区の租界でこそ、青山会だの百合根会だの、浅いだの深いだのと避けて通れない大問題だけれど、新京の連中にそのどれが問題だというのだ。新京にとって大切なのは、新しい建造物に充填するための大気の素材としてのレゴリス（砂）が、ちゃんとルナ・マストライバーシステム・サヤコで出荷されるかどうかぐらいだ。そいつを掘り返してる業者が青山の息掛かりだろうが、百合根の連中だろうが、構わないはずだ。ましてや連中がその所有権を巡っている深層階の連中が、どんなにかやっつてようが、おててつないでじゃんけんで決めてようが、気にしているはずもない。

月自治区のレゴリス採掘輸出企業として、一番大きな勢力を持つのが三ツ星グループ。それから、海渡物産（かいと）、スターシャイン辺りではほぼ独占されている。採掘自体は提携している下請け企業が行っている。基本的に、宇宙時代開始以前からの掘削技術のノウハウを持つていた土建業や、地下資源発掘業者の流れを汲む中程度の企業で

占められている。三ツ星がおおつぴらに青山会とつながっているわけではないけれど、データを読めば三ツ星の採掘域を確保している戦争屋が青山会であることは間違いない。

また、掘削後に残る膨大な空洞は、かつての地球であればただ落盤の恐怖と戦いながら、更なる奥へ進むための坑道となるのが精々だが、ここでは違う。その後があるのだ。

だいたい、人造物であるコロニーではなく、天然由来の大地に根ざして住みたいという希望者は後を絶たない。そんな時世がら、月においては採掘跡地に出現する大空洞を都市化^{タウン}し、居住地と居住権をセットで販売すれば、それが巨万の富を生んでくれるという二匹目のどじょうがちゃんと生息している。土木と土建とそれから不動産販売。ヤクザな連中のつけ入りやすい伝統的培養素地があるというところか。

月で浅層と位置付けられるのは現在はいたいが上から数えて三層目辺りまでだ。月の低重力は今までのところ、この地下都市群において、上の層の床が下の層に落ち込んで押しつぶしてしまうような大災害とは無縁でいる。やがて、第四層目が都市としての機能を完備すれば、大々的に販売促進運動が展開され、月の人口はまたもや一挙に膨らむだろう。そして、掘削と抗争と暴力が支配する層は更に地下に潜っていく。

月において、一つの層自体の高さというか幅は一定していない。早い段階で開発された浅い層ほど空間部分は薄く、逆に深いほど技術が練れてきている為なのか高く、厚くなる。そしてテラフォーム化（緑化）の技術も進む。どうやら、後十年以内には一般向けに販売が開始される見通しがたとえられる第四層は、緑化技術の進化により、森林と呼べるべきものまで出現し、高さはついにキロに届く勢いらしい。大気を守られていない月において、宇宙からの飛来

物による被害は、深層にいけばいくほどリスクが減っていく。ましてや月には地殻運動はない。ということは、高層ビルも建設可能ということだ。

徳永のいささか出来の悪い頭で考えても、コロニーでは成り立たないスケールの都市になるだろうことは簡単に予測が付く。とすると、月はそう遠くない未来、またしても激変期に入ろうとしているのだろうか。

繁華街でチンピラのお六（死体のこと）が二つ転がって、その筋の大立者の情婦^{イロ}と、彼の息子と誤認された一般人と二人が連れ去られた。

それは、徳永のような月管区の地域課のパトロールを助っ人してよような方面のマル機には大事件だ。これからドンパチが本格化して通常勤務中の連中が招集されて特別機動隊が始動するのか、このまま何事もなく収まってくれるのかは大きな関心の対象で当たり前だ。けれど、揺れるか揺れないかも定まっていないう、どうして新京からのごり押しが入るのだ。

秋篠瑠璃子が死体で転がった日には、青山会はメンツをかけて報復戦をしかけるだろう。それで探掘が妨害され、レディ・サヤコに積むべき砂^{レコリス}が搬出されなくなれば、新京が出張してくることもないわけではないだろう。だけど、百歩譲って新京がそれだけ月^{ムツ}を大事にしているとだ、どうしてサイ対の三上^{つら}の面を潰す？

「警察庁^{サッチョウ}じゃない」

「じゃあ、どこだよ」

「……トウバクの情報」

「江戸時代末期か？ ひよつ、なんでまた」

「……徳ちゃん、今、そのテの冗談でわらえる気分じゃないんだけどな」

トウバクといえば、統合幕僚本部のことだ。かつて機動力がない

と悪評たつぷりだった日本の情報機関の欠点を補うべく、外務省、軍、警察庁がそのスジの専門家を出し合って作った数ある情報機関の元締めといえる機関というのがオモテ向きの情報。その実はやはり各機関の情報部のトップが流してもいいと判断した情報を、そこに出向になつてゐる窓口に流しているというところが実情に違いない。なぜなら、情報の全てを統括するには、少人数すぎるのだ。

三上の敬愛する（あのオタクな犯罪者とばつと見で見分けが付かないような、雪だるまの方がスリムといって過言でない男を、どうして三上が尊敬するのか疑問なのだけれど）シャコとかいうコードネームの男が出向している先だ。

「それってキンスジなんてえご大層なもんじゃなくてよ、厭よ厭よが言えない、惚れた男からの無理難題つてやつか？」

——徳永巡查部長。これは命令だ、即刻行動するように。

びしりと三上の声が言い捨てるように響いて、通話が一方的に切られた。徳永は覚えている限り、こまいガキのころから変わったことが一度もないツーツーという、相手はもうオンラインでないことを示す電子音を聞きながら、どうしたもんかと肩をすくめた。

そのとき、診察室の扉が開いて、中からくだんの斉藤歩と、先刻入つて行つた童顔の青年が連れ立って出てきた。

「徳永さん、いらしてたんですね。よかった」

開口一番、斉藤歩に苗字で呼ばれて、徳永は眉をしかめた。どうしてこいつが自分を個別認識してるのか。和田が身の置き場がないというような表情になつてゐる。こいつが頼りになるころは、自分は絶対に退官してらあと徳永はうそぶいてから、斉藤をまじまじと

観察する。

額に大きく絆創膏みたいなものを貼り付けているせいで、どうにも哀れな印象があるけれど、その瞳はまるでヒネたところも歪んだところもない。濃いグレーのジャケットに徳永には見慣れた種類の色をしたシミが付いているけれど、マジックで不格好に描かれた星マークと一緒にすると、血のシミというよりガキがチョコでもこぼした跡みたいに見える。

「……よかった……のか？」

徳永が聞きとがめる。

「ええ、時間をかなりロスしてしまいましたので、ここからはちょっと飛ばします」

につこりともせずに言うその無表情は、可愛くないには間違いないが、何か独特の雰囲気がある。頼りにしていいというか、なんとなくのか、こいつはオヤジの森本みたいな悪い奴でない。理由も特別ないが、敢えていえば直感で徳永は思った。彼はどちらかというと自分の直感を信じている方だ。だから、今回もそれを否定するつもりはなかった。

「悪ガキが……。三上怒らせて、ただで済むと思ってるのか？」

「……三上室長には、本当に申し訳ないと思ってます」

その言い方が、どこにもトゲがなくて、徳永はチツと舌打ちした。これでは得意な厭味の一つや二つが飛ばせやしない。

「月自治区警の徳永です。斉藤歩さん、事情聴取のため、本官と任意同行願えますか？」

徳永がバリバリのオフィシャルモードになって言った。

「……あれ？ 逮捕じゃないんですか？」

「逮捕状は出ておりません。飽くまでも、お願いするのは任意同行

です」

とたんに、斉藤がちょっとくしゃつという感じの表情になった。いかにも泣く直前のガキといった風情で、徳永はぐっとつまりそうになる。ガキの頃、女の子をからかっただけのつもりが泣かれてしまったときのような、そんな気分がしてくる。

「データーマン」

連れの青年が、ひと言厳しく言った。斉藤はちょっとびっくりした表情をして、その青年を見つめ、それからおもむろに顔を引き締めた。戦闘態勢に入ったといった感じで、なかなか男らしい顔だった。その変化がなかなか興味深い。

徳永に向き直って斉藤が、ふと微笑んでから、軍隊式のかっちり決まった礼をした。官で食ってるものは、敬意を表されるのになれている。その形を見れば、上辺だけか、気が入ったそれか、ぐらいの区別は付く。掛け値なしの感謝。

その笑顔を予期していなかった徳永は、一瞬何かで胸を突かれたような気分になった。

* * *

サイバー犯罪対策室長執務室。その物々しい名前が示すように、そこはまるで斉藤の肌に馴染んだ管制室のような雰囲気の一部屋だった。壁一面を埋めつくすモニター。そして最新鋭の情報機器は剥き出しにその部屋にあるわけでないが、本体に直接つながっている操作盤を扱うためのブース場になった席が五つほど行儀よく並んでいる。

時間が時間だけに、ここには三上しかないようだけれど、このブース席に座っているものは、多分、情報部の面々ほどの実力者揃いに違いない。

斉藤が今使っている国連の国境線公正管理チームにある器材より随分新鋭であるのに、スペシャリストを配置する席が少ないのは、ここの運用のされ方を如実に物語っているように斉藤には思えた。サイバー犯罪といっても、すでになされた犯罪に対する検挙にあたるのは刑事班であるし、啓発活動に従事する生活安全班や、情報機器のプロフェッショナルが集う技術支援班など七つのチーム百人近くで構成されるそこその所帯規模だ。全部の人員を突っ込んで管理しきれるものではない。

つまり軍艦におけるCIC——コンバットCombat インフォーマInformation センターCenter、つまり戦闘指揮所に相当する場所ということになるだろう。ここを使わせるといのは、まさしく、聖域に土足でカチコミ（殴り込み）をかけているも同然だ。三上は立腹する権利があるし、自分は下手に出て当然だ。

背後で扉が閉ざされたのが分かってから、斉藤は改めて顔だけは知っている三上を捜した。三上が座っていて然るべきと思しき席は空だったけれど、一つのブースにあった一つの影は見誤りようもない。

「斉藤歩です。このたびは無理なお願いを申し上げまして……」
いいかけたところで、目を閉じて、踏ん反り返って、腕組みをしていた男が目を開けた。その視線は迫力満点で、流石警察で相応の地位にある男という雰囲気十二分にかもしだしていた。

「あいさつはいい。ただ、ここを使いたいという理由だけ、教えてくれ。納得できない」

(……使いたい?)

三上の言い方に徳永は引つ掛かった。斉藤がもう一度政府機関のシステムをどうにかしようとした事実が発覚すれば、斉藤は更生不可能な再犯者として刑務所直行便だ。斉藤のお悪戯イタを察知した直接の上ウエが、三上が逮捕することのないように横やりを入れて確保させたんだろうという推理は、ものの見事に外れたってことだろうか――徳永は連行してきた役得とばかりに、聞き耳を突っ立てた。

少しだけ、斉藤は何かを考えているふうになった。多分、考えを整理しているのだろう。逆に目を開けた三上が、その顔を見て訝いぶかしげになった。

「秋篠瑠璃子さんと、ご友人の救出には、我々の捜査課が緊急対応して全力を尽くす。この件に関しては、君は被害者の身内であって捜査に嘴くちばしを挟んでくるのは僭越せんえつだと思わないか？ 捜査の現場も混乱する。おとなしく刑事課に場所替えして、事情を説明して捜査に協力すべきだとは思わないか？」

斉藤はふつと息を吐いて気持ちを整えた。

「自分に出来ることをしたいだけです。警察の捜査の妨害をするつもりは毛頭ありません」

「だったら、自分のテリトリーで物事を納めたまえ。君が幾ら自分に自信をもってるかしらないけれど、何の訓練もなくここの器材を使いこなせるとも言うのか？」

斉藤は穏やかに首を振った。

「私はここなら、器材を使いこなせる方がいらつしやることを知っています。だから、協力をお願いしたいと思っています」

ふと三上の力りきみが抜けたのが徳永には分かった。

「君がここを采配するつもりでいるのだと思った」

「私にそこまでの自惚れはありません。一人で出来ることなど、本当にほとんどありません。それに私はこの機器をぶつつけで使いこなせるなどと考えるほど、素人ではありません。けれど、ここで三上さんのお力をお借りできれば、勝算はまだあると考えています」

「……勝算？」

「私は、今回は本当は自分が狙われたのだと思っています」

「……まあ、そうだろうな」

三上が落ち着いた口調で同意する。

「誰が、ということを見るとどうにもうまくいきそうにないので、どうしてあそこであのタイミングで、犯人がそうできたか、ということを考えました」

「犯人は百合根のバッヂを付けていたという目撃情報があるのは、知らないか？」

多分これは三上の揺さぶりだろう。捜査上の情報を関係者であつたとしても斉藤に言う必要はないなどという理由ではなく、単純にサイ対の三上の管轄になるような事件でないから、捜査上の情報が三上に入することはまず考えられない。

三上ははったりをかけている——徳永は思う。

「百合根のバッヂぐらい、私にだって偽造できます。むしろ百合根と青山がぶつかった方が面白いと考えている誰かがいる、程度に思うべきで、それは情報として瑣末さまつです」

「じゃあ、今回の情報の幹は何だ？」

「だから、タイミングです。なぜ、青山会のシマでない場所で、樺崎が秋篠の警護を抜かったのは、店から出る時間がそこだと把握できていなかったからです。なぜなら、秋篠は森本からの連絡で、樺崎力ナタより一足先に帰ることになったからです」

もう一呼吸おいてから、斉藤は続けた。

「単純に発想すれば秋篠と森本の会話が、今回の実行犯に聞こえていたと考えるのが妥当でしょう」

「森本の通話が盗聴されてる……ということか？」

「このタイミングをそれ以外の理由で説明する方が難しいでしょう」
「方法は？」

「森本が普段利用する部屋にある総合端末そのものか、森本茂の携帯端末に盗聴器が仕掛けられていると考えていいと思います」

「そんな大胆なことができるか？ 仮にも森本茂だ。君は彼を恐れてなどいないが、他の普通の人間は、そういうわけにはいかない」

斉藤がふと目を伏せた。

「時間がもつたいないので、とりあえずここについては第一段階の手を打ってからにさせていただきます。他に可能性があるなら検討します。で、今回、私の希望はもちろん、うちの秋篠と、友人を無事に取り返すことです。それで、これも憶測ですが、狙われたのが私だと考えます。森本の動向を探っている人間が、秋篠と私を拉致するなら、目的は森本への牽制、あるいは森本との取引の材料になると踏んだからというのが、一番妥当な線ではないでしょうか。そうすると、秋篠は取りあえず時局が拘^{こじ}れるまで生命の危険はないと判断していいと思います。ですが、飛竜……友人は違います。私でないことが判明した時点で消される可能性は五割超過でしょう。ですが、幸いなことに……」

斉藤がそこでふっと息継ぎをした。

「友人は霧島飛竜といって、あの霧島運輸の会長の長男で、現社長の弟です」

「……なんだって？」

三上の声が一段低くなる。そいつはエライこつちやと、徳永も身を乗り出す。霧島は企業規模はそこそこだけれど、砂^{レコウス}の輸出で得た金が、収入の大きな部分を占める月自治区の経済においては、重要な構成要素の一つに違いないからだ。ましてや、レディ・サヤコがコンテナを打ち上げても、キャッチャーが捕まえたところで、ポー

トから搬送する業者が断固輸送を拒めば、一大事だ。もちろん、軍なり他の輸送業者なりが代わりに輸送することは可能だろうけれど、輸送船を確保するまでの空白は存在してしまうし、それによって起る損害も大きいことは明白だ。

「そのの……どこが、『幸いなことに』なんだ？」

三上の声がさらに低くなった。

「青山と百合根を突ついて、月に波風を立てようとしている人たちに、ここはひとつ、金目当てに霧島飛竜を狙った、チンケな誘拐犯ということになってもらおうと思います」

斉藤の言葉に、もう一度、徳永は己が耳を疑った。金目当てのチンケな誘拐犯に、

——なってもらう——だと？

2・餅の絵を描く

サイ対室長室の執務席や、行儀よく並んだシステム操作用ブース席と向かい合った壁一面を占めるモニターは、設定した分の画面の数を映し出すことが出来る。画面は四つ。そして並んだ顔も四つ。

斉藤がこのシステムを直接弄るつもりがないのを知って、三上は殆ど二十四時間必ず誰かが詰めている技術支援室から、一人応援に来させた。やってきた金田という男は、三十がらみ、まあ、青年以上中年未満といったふうだった。彼はやってくるなり、最近三上のところによく居すわっていることで、なにやら噂のタネになっていたマル機の徳永と、まったくの部外者という感じの青年二人——その片割れは鼻っ柱に大きく絆創膏を貼っているし、血だらけのスイツの胸にマジックで手描きされた星印という、怪しんでくれと言わんばかり。

その連中と共に、呼び出した当人なのだから、彼が在室しているのは当たり前なのだが、大事件が進行中のさなかならともかく、（多分）平時の夜中にも関わらず、三上室長の官服の着こなしは、きっちりとしていて乱れがない。金田は、厭な予感に回れ右をして帰りたくなった。

GM（グリニッジ天文時）PM11時過ぎというのは、一般的に真夜中とっていい。この時間に、ここで、この面々というのは、非常に何か『ただごとでない』という看板を掲げている。

金田はたった今まで作業をしていた、新しいウィルスの解析作業に戻りたかったし、そもそも、もう少しでネタに行き着きそうな感触が来ている最中だったとはいえ、さっさと定退していなかった自

分を呪いそうだった。

「彼は金田警部」

三上が手つとり早く金田を斉藤に紹介した。

「彼はこのシステムに精通している。君が希望するアクションが出来るか出来ないかは、君の説明さえ明確なら即答してくれるはずだ。それをしていいか悪いかは、私が判断して金田警部に指示する。それでいいか？」

斉藤が軽く頷く。三上も、よろしいというように頷いてから金田に向き直った。

「金田、彼が斉藤歩さんだ。名前ぐらいは知っているな？」

「斉藤歩って……青山会の……あれですか？」

一瞬、金田の目が厳しくなった。

「夜が明けたら、ニュースにもなるだろうが、二時間ほど前に、ロード8で発砲があつて、青山会のスジもんが二つお六になった。その現場で、あの秋篠瑠璃子と、霧島飛竜という民間人が人目があつたにも関わらず拉致されている」

金田の目が驚いたように見開かれ、それから斉藤を見て、そしてチラッと徳永を見てから三上に戻る。

「室長、だったら、この斉藤さんは、捜査課に設置される対策班の事情聴取に呼び出されていて然るべきなんじゃないですか？」

「本来はな。しかし斉藤さんは、トウバクにいる沖さんの同僚でね、我々のインフラを使つてしたいことがあると、そうおっしゃっている」

三上の敬語に、金田はチツと舌打ちしたような勢いで斉藤を睨^{にら}んだ。トウバクの沖というのは、色々な意味で警察組織で情報を扱う者にとっては有名すぎる名前なのだ。彼の横槍で三上が屈するのは、金田にとっても屈辱以外の何者でもない。

「誘拐事件にしろ、拉致事件にしろ、青山会が絡んだ時点でウチの仕事じゃないでしょう。室長」

如何にも不満が言葉に出た金田に、三上は頷いた。頷かれることで、逆に金田はそれ以上重ねて反論しようとしていた言葉を口から出すことができなくなった。

「それは分かっている。けれど、秋篠瑠璃子を無事に確保できなければ、嵐は避けられない。我々警察の任務は、起こってしまった事件の犯人検挙も確かに大きい一つの柱だが、未然防止、拡大防止もまた紛れもない任務の一つだ。金田、民間から協力の申し出があれば、それが可能か、有効かを判断するのは我々の義務だ。斉藤さんが何をするつもりなのか、聞くくらいは仕事ということで、何とかスジを曲げて協力してくれ」

徳永はくつと笑いたいのを堪えた。三上自身から「曲げて」るのだと、先に告白されてしまったようなもんだ。反則ストレスプレイで、金田にはたまったもんじやないだろう。金田が三上と一緒に曲がるのが相当の不本意だろうとも、逃げ道は塞がれちまっている。

「分かりました。斉藤さん、指示どうぞ」

異常に言葉が少ないのは、金田の不本意の表明だろう。

「ありがとうございます。えっと、早速ですけど、四本、取りあえず二日分、ハイパーウェーブ通信を確保してください」

「よ……四本を、二日あつ？」

金田が素っ頓狂な声を上げる。ハイパーウェーブ通信とは、ゼネラル社という会社が一手独占している通信業界のトップブランドだ。軍の技術をもつてして未だ真似できていない、音というものがもつ運命である、通話距離が開けば開くほど発生するタイムラグを無効にしてくれる通信手段である。一説には、亜空間を通すスペース・

ジャンプ航法技術を音波に応用したものだと言われているが、とにかくタイムラグなしの高音質。盗聴対策としても、そこはもちろん端末に仕掛けられてしまえば手足はもがれたも同然となるしかないが、ハイパー通信自体はその技術の根幹がゼネラルの独占だ。故に流れている間での盗聴の恐れはゼロに限りなく近い。

問題は一つ。回線を確保するのが難しいことと、値段がバカ高いこと。一回線一日、二十四時間もぶっ続けで確保したら、金田の安月給が一月分は軽く飛ぶ。

「ちよつと待つてくれ、斉藤」

三上が『さん』付けを忘れて呼び止めた。

「その金はどこが負担するんだ？」

斉藤がちよつと考えて、ジャケツトの内ポケットから携帯端末を取り出した。

「私のクレジットで……」

「……步ちゃん……お前の限度額つて、一体幾らだよ」

突っ込みを入れたのは、いい体格をした童顔の——斉藤歩は彼をタカと呼ぶ——高柳優美という青年だった。

高柳は最初、当然の権利とでもいうように同行したいと申し入れてきたが、行き先が三上部屋ゆえに徳永は断った。断られて帰るとおもいきや、移動中のパトカーの後を、彼はオートカーで追いかけてきたのだった。

それでいて、警察署の建物に突入しようとせず、外階段で背負っていたリュックから圧縮されていた寝袋を取り出して広げようとしたのだ。

帰れといったら今度は公道まで素直に後退はしたものの、そこで又してもしぶとく寝る準備を再開したので、仕方なしに徳永は、和

田にどつかの開いている会議室に閉じ込めておくように命令しておいた。

童顔に長身という取り合わせだけでも目立つ青年だ。それが、面白いこともないはずの今も、普通に笑顔でいるから、不思議とのほほんとした雰囲気纏う。彼に徳永はどうして、今のような切羽詰まった局面で寝られるのか、たまらずに聞いた。

「俺、斉藤がスターのときは、手足だから。頭が使いたいとき、ベストコンディションで傍にいないとね、そりゃ、不味いでしょ。寝るのもお仕事」

と、飄々としたものだった。斉藤がこの青年を手足と言ったなら、徳永は虫酸^{むしず}が走ったに違いないのだけれど、言ったのはこの青年の方だ。そして、その口調には、紛れもない誇りのようなものが隠れようもなくにじみ出していた。だから、

——ふん。

とばかりに、捨ておいたのだが、三上が斉藤の全能力値に数倍の法螺^{ほり}を掛け合わせたような自信タツプリの態度に当てられて軟化すると、斉藤が一番最初に徳永に頼んだのは、彼を連れて来てほしいということだった。あの青年が自分の近くにいることを、露ほども疑っていない。

「奴^{やつ}さん……、あんたの手足だって？」

徳永がからかうと、斉藤は一瞬とまどってから、くしゃっと笑って首を振った。

「あんな使いにくい手足なんて要りませんよ。奴はマジシャンだから……」

「魔術^{マジシャン}使い？」

斉藤は頷いた。

「私は平凡な発想しかできないんです。非常時は、あいつのワールドなんですよ。彼のような大胆なというか、非常識な発想をする人間のマネは、私には出来ませんから」

徳永は呆れた。斉藤歩は、ついさつき秋篠瑠璃子とオマケの一般人を月の事情で拉致した人間に、金目的で霧島飛竜をさらった事実をでっちあげるといってもない発言で、三上をケムにまいたばかりなのだ。その直後に自分で平凡な発想しかできないとは、どの口がよく言うもんだというところだ。

それからおもむろに思った。この斉藤をして『非常識』呼ばわりされるというのは、高柳という青年は、一体どういう種類の人間なのだろう。

「クレジットの限度額を設定してないの、一つ持ってる」
何事もないというようなスカした口調で斉藤がいう。

それを聞いて、ぶーっつと奇妙な声を捻り出しながら、派手にタカが仰け反った。

「駆け出しのペーパー税泥ゼイドロの、薄給仲間じゃなかったのかよ」

厭そうに——本当に厭そうに斉藤が頷いた。

「悪徳業者の筆頭、ブルマン・クレジットだけだね」

今度は徳永が噴き出した。『お借り入れはどうぞ計画的に、ブルマン』』』という決まり文句の宣伝は、月で放映されているテレビを見てれば日に数度は目にするほどメジャーなものだ。にこやかに笑ってるのは、シーズンごとに顔は変われど、女優、モデルなど、今一番ブレイクしている売れっ子で、ポスターは盗まれるために印刷していると噂があるほどなのだ。

そのクレジット会社ブルーマウンテン、商標ブルマンは、もちろんひねりもそつけないが、その文字通り、数ある青山会のオモテのシノギの一つだ。青山会は指定暴力団ではあるけれど、ブルマン自体は堅気のシノギで、限度いっぱいとはいえ、法廷金利をチラともはみ出さない健全営業。實際手の出しようがない。まあ、ここで返済不能になると、闇金融へ御案内という筋書きになっているらしいけれど、マルBへの貢ぎ物が余程なのか、青山を叩いているふりすることが大好きなはずのマルBは、ブルマンにだけは手をつけない。

「了解、金持ちというのは、いいもんだな」

金田が厭味を言ってから端末の操作を始める。斉藤は自分の携帯端末を、総合端末機能も当然併せ持っているらしい操作ブースにある非接触型データ読取機の上に置かれているのをちよつと見てから肩をすくめ、高柳をみる。

「タカ……春花呼んで」

* * *

サイバー対策室壁面大モニター。その四分割されたぐらいでは、まだ一つ一つが十分に大きいサイズになる四画面の中の三つに映っているのは、まったく雰囲気異なる三人の女の顔だった。

一人は、中年に差しかかるかという年配の、如何にも重厚な執務室に在室しているという雰囲気の女性。それから、徳永や金田でも知っているあのカンチガイ女、プラムなどという芸名で活動しているタレントもどきの女子アナ。それから、斉藤たちと同年配と見

られる、徳永にとっては娘ぐらいの年頃で、可愛い女の子といっても差し支えない。

もう一つは何に使うつもりか、それとも贅沢にも予備ということなのか、まだ回線はつながっていない無地の画面だが、ハイパーウエーブ通信用一回線確保していることを示して、画面右下端では、カウンターがせわしなく動いている。

三上サイバー対策室長執務室には、斉藤と高柳、三上、金田、徳永、それから高柳を連れてきたまま退出していいものかどうか考えていて取り残されたといった雰囲気和田。

と、ふっと灰色の画面が揺れて、そこに、ピンクのＴシャツの胸に大きく『月はトモダチ』となぐり書きの文字を胸に踊らせた、デブの中年男の顔が映った。

「シャコさん、遅いです。こんばんは。じゃあ、始めます。全員を私から簡単に紹介しますね」

そのタイミングを待ちかねてたといった雰囲気、有無を言わずにしゃべりだした斉藤歩の声は、ほどよく通るいい声だった。マイクを通した声を聞いたことがなかったものは全員、一瞬間きほれる。ちよつと低めに抑えて聞き取りやすくを心がけているのだろう。もしかしたら管制官というものは、そういう発声方法を訓練するのかもしれない。

「まず、霧島松姫さん。霧島運輸の現社長です。顔は知らなくてもお名前は御存じの方が多いと思います。彼女は、今回拉致された霧島飛竜の一番上のお姉さんに当たります」

聞きたいことは沢山あるだろうに、取りあえず、画面の向うの霧島松姫は黙って会釈をした。多分斉藤は、順番も無意識に選んでいるのだろうと、タカは思う。おしゃべり一番の春花から始めたらみんながしゃべりだすだろうけれど、松姫がそうやって黙ってしまえば、皆、取りあえず言いたいことは保留することを選択するだろう。

「彼女がプラムという芸名で皆さん御存じの、霧島梅香^{バイカ}さんです。彼女も霧島飛竜のお姉さんです。もう二方ご兄弟がいらっしやいますけど、今回は霧島飛竜の安全確保するために私が取ろうと思っているアクションとは無関係ですので、お呼びしていません。ですので、ご連絡は松姫さんをお願いできますか？」

——分かりました。

もう一度松姫に振ったのは故意だろうか。タカは疑う。これではプラムは持ち前のトークを発する機会そのものを与えられていない。

「もう一人の女性は崔春花^{さいしゅんか}さん。日本語風の発音でお許しいただきます。彼女は、長いこと私が何か計画をしたときに、それを検証してくれていたので、今回も曲げて応援を頼みました。よろしく願います」

春花に対してさえ、斉藤は頷くことしか許さないような話し方になっている。

「それから、警察の方には御紹介の必要はありませんが、日本県の統合幕僚本部情報本部の電波諜報^{シギント} S I G I N T の統括をしてらっしゃる沖さんです」

言い終わるが早いか、息継ぎすらせず、室内のメンツの紹介に斉藤は入る。シャコは挨拶すらできずに目をドングリ状に見開いた。それがどこか滑稽でタカは笑いをこらえた。

「それから、こちらはルナ自治区警察署のサイバー犯罪対策室長の三上警視正です。今回は本当に御迷惑をおかけします。よろしくお願います。それから、同じくサイ対の金田警部補。ここシステム自体に精通してらっしゃいます。では、時間の関係で、手早く現状と、取りあえず打つべきだと思っている私の計画をお話しますので、

皆さんに御協力をお願いします」

オレ以下は、まあ話し合いのメンツですらないのね……タ力は、となりに陣取っている徳永を見る。徳永もそう思ったらしくタ力を見て——目が合った二人は同時に苦笑する。

斉藤はちよつとだけ、言葉を切って少しだけ考えるふうになった。「詳しくは第一手を打ってからにしますが、ざっと粗筋と私の考えだけ。最後になりましたが、私は日本県の統合幕僚本部の情報部に所属している斉藤といいます。月の国連^{ルナ}国境線公正管理チームに向ってきています。今回の計画が裏目に出たときは問題になってしまふことは避けられないと思いますが、今は日本県の軍人としても、国連の職員としてでもなく、霧島飛竜の友人という立場だと解釈してください。私にとつて、一番大切なのはその一点だけです。後の生涯を刑務所で過ごすような犯罪と等質の行動であっても、それが必要と判断すれば、そうします」

言い切りやがった。そう徳永はどこか痛快に感じていた。サツカンのシマで、犯罪であってもすると断言するとは、大した度胸だ。

「それから今回、もう一人一緒に拉致されている女性がいます、彼女、秋篠というのは……」

どう表現するのか迷ったのか、そこで斉藤はちよつと呼吸をおいてから続けた。

「私の父の内縁の妻といえは聞こえはいいんですけど、端的にいえば情婦です」

ぶつと、隣の徳永が噴き出したのが、タ力に聞こえた。

「警察の方には明白なことなんですが、問題点を明確にするために申し上げます、私の父は森本茂といって、ここで指定暴力団の筆頭に名前が上がる青山会の会頭をしています。まあ、身も蓋もなくいえばヤクザというか暴力団なんですけど……」

くくくつと又しても徳永が笑っている。三上が徳永をちらつと見たのだが、どうやら徳永は笑いをこらえるのに忙しく、それに気が付かなかった様子だ。

「松姫さんと春花には話が見えないだろうから、ちよつとだけ説明します。必要なことだと思うので、御存じの方ご容赦ください。今回の拉致事件なんですけど、多分というか間違いなく、というレベルで、青山会への牽制材料になると踏んだ何者かが、この『ナニモノ』の部分はまだ明確ではありませんが、情婦の秋篠と森本茂の遺伝子的息子である私を拉致する目的の犯行だと思われます」

——何よそれ、霧島の飛竜を狙ったんじゃないの？ あのとときみにい。

たまらず、といった雰囲気で女の子が口をはさんでくる。『あのととき』という以上は、前にも霧島飛竜は、身代金目的に誘拐されたことがあるということなのか？ そこに徳永は引つ掛かる。ということは、なるほど霧島運輸という看板があれば、霧島飛竜という男が野郎にも関わらず、それだけで強請のネタになるのか。

「ここは月なので、霧島飛竜が身代金目的に誘拐されることは、まったく不自然なことではありませんから……、私はこの事件が、霧島飛竜を狙った身代金目的ということでオープンにしようと思つてます」

「ちよつと待て。オープンについてどう言うこつちや。誘拐犯を刺激しちゃ不味いだろ」

徳永がたまらずに声を上げた。

「霧島飛竜が身代金目的で攫われたというのがホンスジで、犯人から警察にタレ込むなというオドシが来た場合はタブーです。でも、

今回は違うでしょう？ 犯人は、秋篠と私を材料に、交渉しようとしているのは青山会。これがありえるパターンの筆頭。ほかにも幾つか考えられますが、もう一つありそうなのが、最近馴れ合っている青山会と、ここの指定暴力団としては青山会と並ぶ百合根会がぶつかることを望んでいる何者かがいるというパターンです。でも、ここは取りあえず飛竜の安全を確保してから探りにかかります。このパターンの場合、もう手遅れの可能性もありますが、霧島飛竜が私、斉藤歩でないと犯人が認知した段階で、単なる一般人のザコキヤラである青年その一として、消されるかもしれないというのが、今の私が一番心配していることです。犯人は、複数の可能性が高いですけど、飛竜と秋篠を拉致する現場で、秋篠の迎え兼護衛だった男二人を……殺しています。残念なことに、人殺しというものに禁忌を持つていないと考えるべきです」

『殺して』と表現したところで、斉藤が僅かに震えたのが徳永に分かった。母親を殺された現場に無理矢理置かれたことで、負った心の傷を、無理に押さえつけているのだろう。月の重力では、撃ち抜かれたときに飛び散る人の血は、まるで花が咲くようにゆつたりと丸く広がる。その現場で過呼吸になつてぶつ倒れたことを知っている徳永はあきれる。この短時間でそんなものを持ち越えることなど人間には出来るものではない。見かけに寄らない鉄の自制心というべきだろう。

「私は……それが……怖い」

やっとという形で絞り出してから、斉藤はきっぱりと首を振った。「それで、考えました。青山会を牽制したがつているにしろ、戦争をおこしたがつているにしろ、それがどんな種類の目的なのかということをです。やっぱり分かり易いのは、金でしょう。もう一つが詳しくは今話ませんが、犯行が行われたタイミングで、これは恐らく青山会の森本茂の行動を盗聴できている人間でないと不可能

だと思われます。森本の居宅もしくは事務所の総合端末か、彼自身の携帯端末に細工されているとします。ということは、ここで森本の懷までいくことができる人間ということが限定されます。あそののセキュリティのレベルは……その、尋常じゃありませんので……」

まあ、そうだろうな、と三上は斉藤の弁舌に飲まれているのを苦々しく感じながら思った。

「それで……、はつきり言います。オモテにしろウラにしろ、大規模で経済活動を行ってる連中が関わってるということです。それ以外では、その幹部クラスの間人間が裏切ったかどちらかの可能性しか思い浮かばないんですが、連中ってドライなんですよ。うまみがあるから、森本に付いている。義理だ人情だ、任侠だつつたって、そこが絶対ある。森本の息が掛かっている方が美味しいことができるから付いてるんです。だから……、今、側近の中で森本を裏切って得する人間というのを考えると……思いつかない。すみません、身びいきも入ってると思うんですけど、まあ、私自身がそういう環境で育って根がどうしても浪花節なにわぶしなんで……」

いつもの調子で『浪花節って何さ』とやりたかったタカも流石にここはこらえる。隣でまたしても徳永がひくひくと笑いをこらえたのが分かった。

斉藤はちよつとばつが悪そうに微笑んで、それから続けた。

「月つきで一面でも正当なシノギを持つてる人間にとつて、絶対に重要で関わってないということがなさそうなのが……砂レゴリスの輸出業だと思っ
うんですけど、ね、萩原さん」

斉藤が徳永が認知してなかった名前を呼んだ。ピンクのＴシャツ男の後ろから、画面ににゅっと、知的と知的と知的で出来ているといった雰囲気の内テリジェンスあふれた女の顔が取って代わった。

——斉藤、久しぶりね。でも、私が待機してるって、どうして、分かったの？

「シャコさんが繋がるのが遅すぎたから、誰か呼び出したんだろうなど。月ならアゲイツさん……しかない……でしょう？」

——斉藤には負けるわ。そうね、そこで大きく稼いでいる人間なら、^{レゴリス}砂のお世話になってない可能性は低いよ。

「……なのでレゴリスの輸出業務を人質……この場合は人じゃないですけど、まあ、人質にとるのは、砂のうま味を知ってる人に対してなら、その……オドシとして有効でしょうか？」

胸の前で腕を抱き抱えるように深く組んで、顔の下半分を手で抑えて、萩原と斉藤が呼んで女がしばらく考える。

——砂の輸出が1日止まれば、損害は幾らになると思う？

「だからオドシになりま……すよね」

——斉藤、犯罪者になる気？

斉藤は首を振った。

「あの……犯人を身代金目的の犯人にさせようと思って。霧島飛竜を攫^{さら}ったということを表明して、金をよこせつてことで。キシマが飛竜が無事に戻るまでレディ・サヤコを運行しないし、霧飛竜の命に何かあった場合はレディ・サヤコを壊すって徹底抗戦を表明すれば……」

——それは無理。キシマがレディを壊すってオドシをかけるなんて、あなたのとこみたいなヤクザじゃなくて、社会常識があつて然るべき民間一企業なんだから、現実として有り得ないでしょう。レ

デイ・サヤコをキシマが壊れてもいいお荷物だと思ってるとしてもね。

萩原が断言した。

「斉藤が何を考えてるのか、分かっちゃった。飛竜を持つてる人間が砂の輸出に関わってるってことを、希望的観測に基づく飽くまでも前提として、何でも知らんけど飛竜を殺したらサヤコを使えなくするってキシマが脅してるってことを宣伝すればいいわけだ。レゴリスは植民地維持には必須だから、日本から買った業者も他国産のレゴリスに乗り換えてしまう。そうするとレディを大車輪で修理しても出荷量が元にもどる可能性低い。だから、飛竜を持つてる奴が砂の輸出でうまみを吸ってるなら、キシマが飛竜の命の力タにレディ・サヤコを人質にすれば、身動きできなくなるってことか」

斉藤が頷く。

——だから斉藤、一日レディを止めることで発生する損失を、ここに吸収させるつもり？

冷静な萩原の声がする。

「えっと、実際止める必要はないんです。止まってるって、錯覚してもらえば」

斉藤が言いかけると、今度は春花がポンつと手を打った。

——ああそれで、プラムさんなのね。納得納得。やっぱり斉藤は普通じゃないこと考えるね。多少理論に無茶があっても、事実でなくとも、マスコミがキシマがレディを封鎖してるって事実を報道するなら、それはとりあえずそういう事実として流布するってことね。

「うん。どう？ 基本的に無茶だと分かっているけど、プランとして

成立不可能なぐらいの酷い無理はあるかな」

斉藤がそのまま流す。徳永は頭の回転が付いていかない。なんでこのガキどもは、斉藤のあれだけの説明でそこまで深読みできるのだ。

――荷主か、採掘業者か、輸出業者か分からないけど、そこに飛竜を攫った犯人がいるとしたら、誘拐犯に対するフェイクだってことを、荷主さんにバラすのってまずくない？

春花が言うと斉藤はかぶりを振った。

「犯人が実際に攫おうとしたのは、秋篠瑠璃子と斉藤歩だろう？一番のありがたい希望としては犯人が少なくとも荷主でなくて、これが霧島のフェイクでないと気付くのが遅れて、飛竜を傷つけたら、本当にサヤコにダメージがあると錯覚してくれること。二番目にいいのが、犯人が、自分たちが斉藤歩と霧島飛竜を間違ったことを目ざとく察知したナニモノかが、便乗して犯行声明を出していると解釈して、混乱してくれること。少なくとも、自分が攫ったのが、通行人Aじゃなくて、霧島飛竜だということを知らせるだけで、飛竜に手出しさせないための第一段階としては十分じゃないか？ もう一度聞きますけど、萩原さん、春花、とてつもなくデカイ穴ある？」

同じ空間にいたら、名指しされた二人の女は顔を見合わしたりするのだからけれど、二人とも自分の頭の中に相談するような顔つきになってしばらく沈黙していた。それから萩原がおもむろに保証した。

「デカイ穴だらけだけど……、解決策というのじゃなくて、とりあえず犯人にアンタがさらったのは霧島飛竜なんだって知らせることを、到達すべきとりあえずの第一段階の目標として据えるなら、全く打つ手がないよりはマシかな」

斉藤が頷いた。

「じゃあ、第一段階の手を打ちたいと思います。まず、シャコさん」

——僕が一番なの？

予想外だという口調で話しながら、沖のピンクの体が萩原の背後に立った。

「沖さんが手伝ってくれると明言してくださる前まで、私がやろうと思ってたんですけど、発信元を特定されにくいやり方で、霧島飛竜を攫ったことと、無事に返してほしければ50億ユニバほど払えって、霧島松姫さんに時間を遡って脅迫状を出してください。それから、ネットにこういう事件が発生しているって、ばらまいてください」

——はい。そのくらい、屁でもないね。

男が肩を軽くすくめて、余りに簡単な仕事を依頼されたことは心外だというような素振りになる。

「すみません、雑用で。でも、シャコさんには、後でたっぷりお仕事をお願いしますから、まずはそれを」

——了解。

「松姫さんは、脅迫状が届いた段階で、警察に即刻届け出てください。それで、今、レディ・サヤコのメンテナンスで月に詰^ミめている社員の方に、ピケ張ってレディ・サヤコへの搬入路を封鎖させてください。ああ、映像的に封鎖してあるように見えるだけでいいです。画像は多分カメラマンと編集さんがうまく撮ってくれると思います」

から。それから、記者会見でも開いて、霧島はオドシに屈しないことと、飛竜を返して寄越すまでレディ・サヤコは封鎖すると宣言してください。同時に、形としてレディーをオドシの材料にしたらだけで、輸送業務に滞りは絶対に発生しないことを直接伝える。大丈夫ですか？」

——斉藤君、今のあなたからの情報は私の秘書チームは既に共有しているわ。問題なしと、請け合うわ。

「あ、松姫さん」

斉藤が呼び止めた。

「今回は私のために、飛竜に迷惑をかけて、松姫さんたちご家族に、本当にご心痛おかけします。すみません……」

斉藤が頭を下げると、ふつと難しい顔をしていた松姫が微笑んだ。

——前のときも、あの子の命はあなたに助けていただいたわ。グレイ・スター・斉藤さん。あなたが弟の友人であったことは、あの子の幸運だと、私は確信してますよ。

——斉藤君。私は何をしたらいいの？

プラムが松姫にだけ頭を下げた斉藤に突っかかるように言う。

「霧島飛竜が誘拐されたときの状況と、それで霧島が脅されていることをニュースでもニュース・ショーでもどっちでもいいので、放送してもらえように人を動かせますか？ あと、ネットのテレビ局が開設してるニュースページの速報欄にもです」

——フェイクって情報付きで？

「ここはフェイクと流れたら困ります。いいですか、霧島飛竜が攫

われて50億でも500億でも、向うがそれで納得するならどーでもいいんですけど、身代金の要求があつて、霧島松姫は徹底抗戦の構えでいるってことだけでいいんです」

——50億と、500億じゃ、全然違うじゃない。

春花が異なる数字が出ている矛盾を指摘したが、斉藤は取りあわなかった。

「数字というのは、まあ一つの記号、大金ならそれでいいんだよ。50億ぐらいでもふっかけ過ぎだとは思いますが、大切なのはキリシマがその気になれば払える金額ということ。それを松姫さんが記者会見をすれば、警察にも記者会見するようにマスコミは当然求めます。そのときに、番記者には、キリシマがレディ・サヤコを人質みたいにして、犯人に逆にプレッシャーをかけているというのは、あくまでも犯人に人質を害させないためのフェイクであつて、警察としては、霧島飛竜の身内である、霧島松姫の案に賛成して協力しているということをリークしてもらいます。その上で、警察には人命尊重と、月経済への混乱を防止する観点からの板挟みに苦しんで『判断は慎重を期したいと思う』とでも発言してもらってください」

「記者会見って……まさか、私が？」

三上が言つたのに、斉藤はきつぱりと首を振つた。

「まさか。ここでサイ対の三上さんが出てきたら、怪しすぎるでしょう。記者会見は刑事課を主体にしてもらわないと。だけど三上さんには、表向き、刑事課に霧島飛竜の誘拐及び身代金請求事件と、巻き込まれた一般人の女性一名の安全を確保することが目的のチームを立ち上げてもらつてうのはもちろんとして、その中身が飽くまでもチームの捜査員には、霧島飛竜誘拐事件はないと言つことを説明しておいてもらわないといけませんね。霧島がサヤコを人質にとることが、なんで霧島飛竜の生存確保になるのかの説明を……無理

なく三上さん経由で……できますか？」

徳永は斉藤に笑うしかない。一番難しいところを振りやがる。三上は、斉藤のプランに同意しなければ協力させないと金田に明言していたことなど、うっかり失念しているに違いない。腕組みをしてうなっている三上には気の毒だけれど、徳永としては、リマインダーを入れてそれを思い出させてやるつもりはなかった。

——私が。

霧島松姫が口をはさんだ。

——ごり押しでしょうか。一応、逆にサヤコを人質にオドシをかける一件は、霧島の発案ということにしてもかまいませんよ。大きい声を立てられるのは新京に向かってなのですけど、それでよければ。そうすれば、多分斉藤君の、その次の一手の方に三上さんはフリーでコミットできるのではないかしら。

斉藤がもう一度、きょんと考えてるふうになった。

「三上さんがフリーコミット？」

——違うの？　うちが飛竜が拉致されたことで見境なくなつて、わけのわからん暴走をしてるってマスコミで宣伝しつつ、その裏ではお父様にハッキングかけている人間を、追うつもりなのでしょう？

だから……それは三上さんの得意分野でしょう？

松姫がニツコリと笑う。その笑顔に釣られて、悪戯を見咎められみとがたような表情になった斉藤が頷いた。

——ところでさ、三上さん。斉藤君を何で逮捕にしなかったの。つかまえてとっちめてって頼んだのに。

だいたい話は済んだらしいと判断したのか、暢気な口調でシャコが口をはさんだ。

「……沖さん、斉藤君のことを、あなたはずっと気にかけてきた。沖さんにとって、彼はスペシャルじゃないですか。だけど、彼にここを使わせろって無茶といい……。思ってたんですけどね、沖さんは随分警察人としてのイロハを忘れちゃってませんか？ 斉藤君国家治安維持法を犯した前科者ですよ。現在も監視下にあるのに、ここでフダ（逮捕状）取っちゃったら、速攻で身柄拘束後、拘置所送りでしょう。留置させることもできませんよ」

——あ、それも、そうか。
三上の説明に、まるで暢気^{のんき}に、モニターの中にいるシャコが頭を掻く。

「百歩譲って、斉藤君が初犯だったとしてもですよ、フダ取ったら48（ヨンパチ）があるでしょう」

——へ？ 48って……、あ、あちゃあ、そうだったよねえ。

48というのは四十八時間のことで、被疑者を逮捕してから、検察に押送完了するまでの制限時間のことだ。

「沖さん、明治維新の次期エースか何か知らないが、斉藤君がこのヤマそれだけの時間で片づけられるって、そこまで舐めて掛かってたわけじゃないですよね？」

あははっ和白々しく声に出して、シャコが笑った。

（……やっぱり、忘れてただけか。沖さんは、随分サツカンの常識を捨ててるな）

と、思いかけて、三上は首を振った。沖にないのは、サツカンのを付けるまでもなく、常識そのものだということを思い出したから

だ。

しばしの間があつて、いきなりケタケタという妙な具合の笑い声が聞こえた。三上はその場違いな笑い方に些かならずぎよつとして声の主の方をみる。斉藤がコンソールパネルに突つ伏している。その肩がびくつびくつと不規則に震えている。

「……………」

「気持ち悪いな、歩ちゃん。いきなり狂うなよ」

タカがまさに三上の聞きたかったように聞いてくれる。

「トウバクっ！ 明治維新つて……倒幕だ。……で、統合幕僚本部のトウバクで……ウチ。……で、徳永さんたち、警察庁のこと……サツチヨウつて呼んで、薩摩、長州が普通サツチヨウでしょ？ ……出来過ぎ……だあ……」

笑いながら切れ切れに言うところを見ると、警察だの軍だのという組織で普通に横行しがちな隠語が、斉藤の笑いのツボにエラクはまったのだろう。

「それつて、……そんなに可笑しい？」

そのとぼけた口調は、又しても当意即妙といった具合で、まさに三上が突つ込みたかった聞き方を高柳がした。

笑つてやがる。と、徳永は半ば呆れる。

——何だか面白いガキ共じゃねえか。

斉藤も高柳も、それから中国人の女の子も、年といったら、本当にガキに毛が生えた程度。二人とも相勤の和田巡査よりも若いだろう。それが揃いもそろつて、こういうとんでもない定石破りを思い

つく斉藤の嗜好回路にやすやすと反応する。単純にそれが脳味噌が若いからだとしても、普通はこんなとんでもないプランが実行できるとは考えないだろう。というか、考えついたとしても、実現不可能と、捨てるしかないだろう。

普通は人質をカタに取られたら、命を脅かすことを虞おそれて、犯人が出てくるまで息をひそめて待つのが精々だ。それは警察も同じで、拉致時にだろうが、拉致後だろうが、犯人が尾ホシつぽを見せるまで、動けなくて当たり前だ。

秋篠瑠璃子と霧島飛竜が拉致されて後、犯人は犯行声明も出してないし、その目的を匂わせることもまだしていない。普通なら犯行現場の聞き込みが出来ることの全てで、動くことなどできない。

攻撃が最大の防御という、使い古された言い回しが正しいとしたら、この段階でこいつらは既に一発かまして、霧島飛竜を守る手だてを講じたということになる。秋篠と霧島飛竜を攫った阿呆は、こういう恐ろしいガキどもを相手にしちまつてるなんてことを夢にも思っていないだろう。

せつかちな犯人が、この段階で既に霧島飛竜を処分しているということだけは無いように、徳永は神さままだのホトケさまだのに祈っておこうかと、そういう気分になった。

3・義太夫とシロウト人形遣いたち

どうしようもなく笑いこけながら、妙な具合に醒めているもう一人の斉藤自身が、己をうんざりと持て余していた。飛竜と瑠璃子を取り戻すために、思考も感情も研ぎ澄まされていなければいけないこんなときに、行動を直接に司つかさどっている自分が、無性に笑いたくなったり、泣きたくなったりと暴走ぎみの感情に振り回されている。正直、迷惑なことだ。けれど、タガが外れてしまったのだ。タガのせいで。

タガがタガをはずす——そんな文脈にふいに囚とらわれて、またぞろ、それがどことはなしに面白くて、しつこく笑っている自分がいる。冷静な方の自分があきれている。こいつに手綱を付けるのは、当分は難しそうだと判断するしかない。

沖シヤに無理を言って、碌に調べもしないで三上に逮捕してもらおうように頼んだとき、斉藤にあったのは、根拠は勘レベルでしかないが、父、森本と瑠璃子の会話を盗まなければ、あのタイミングで瑠璃子を拉致することはできないという、確信だけだった。犯人に続く道がある、それは間違いなく一筋の希望だった。

けれどそういう方面に興味が沸いたことがない斉藤には、実際にどうやったらハッキングを試みている人間に至れるのかについて、皆目手段の見当が付かなかった。自分に冠せられた、どことなくバカにされている気がする『データマン』という渾名あだなは、まったくその通りなのだ。自分は飽くまでも連中データを分析して料理する方にしか腕を揮ふるえないタイプであって、情報機器を取り扱ってデータをもぎ取ってくる方への素養は、些いさかならず心もとない。

ずっと昔、母ハルカと永訣させられたとき、彼の周りにいた大人たちは、自らも重症を負い、眼前で母を殺された可哀相な少年だった斉藤にそのことを思い出させまいとしたのか、事件について話すことは露骨に避けられていた。

もっともハルカを酷い形で失ったという事実は、体や命に傷を受けることがなかった家族の皆の心まで、多分間違はなく切り裂いたのだろう。斉藤が「ハルカ」と口にしようものなら、カナタやママはあちゃん、あの樺崎さえも、一様に硬直したようになる。それから、ようやくきちなく、幼かった斉藤を抱きしめてくれることが多かった。

体に痛みと傷が残っていないければ、事件そのものがなかったような気さえしてくるほど、あのときに触れるのは禁忌になっていた。斉藤は自然、「ハルカ」と口に出せなくなった。瑠璃子は泣きながら自分をよく抱きしめたけれど、それでも決して斉藤が何を見ていたのかを聞き出そうとはしなかった。

ふと気が付くと、斉藤はそのときの自分の記憶がたどれないことに気付いた。なにがあったのか、自分やハルカに加えられた暴力がどんなものだったか、ちらとも思い出そうとすると、映像が白で埋めつくされる。白といってもキレイな白ではない。まだらに薄汚れた白い壁紙。決まって頭痛がやってくる。

そこに赤い花が咲く。その花は咲いちやダメなんだ。絶対咲いちやダメなんだ。見たくない。そんなとき、斉藤は叫ぶほどの激しさで祈った。その花を自分の前に咲かせないでくれと。

けれど記憶の中で白い壁に世界が席捲されると、記憶は残酷なほど律儀に、赤い花が咲いてしまうとどこまで再生してからでないと停止しない。白い壁が記憶を支配して、赤い花が咲く。自分の心臓

の鼓動が、なぜか耳の奥でガンガン聞こえる。耳をふさいでもその音は聞こえてしまう。花が咲いたときに聞こえたあの音は多分、銃声なのだろう。

母の顔が霞んでいく。瑠璃子の胸に抱かれていてさえ、喪失感は埋めようもなかった。抱きしめてくれたハル力の腕がない。ハル力と言葉にして呼ぶことができない。ハル力と過ごした最後の時間が、自分から失われたことが我慢ならなかった。

幼かった斉藤の若い体は、心を嘲るかのように順調に回復していった。それとともに、文字通り体を裂かれたときに斉藤の心をついでに切り捌いた激痛は、簡単に体から抜け落ちてしまった。痛かったという文字の記憶で取り出せるのだけれど、痛みそのものは体に帰って来ることはもはやない。

白い壁の向うに届かなくなった記憶。理性は事件を覚えているのに、心が忘れてしまった。心理学をかじった今の斉藤ならその意味が分かる。心が覚えていたら、多分自分は狂うしかなかったのだろう。

愚かな行動が斉藤を家族から引き離れたから、そういう歴史は結局築けなかったけれど、ハル力から取り残されたという意味で斉藤と同じ立場であって、変わらずに斉藤を愛してくれている力ナタたち家族と一緒に、普通に日常を生きていくために、自分はハル力と過ごした最後の数日は邪魔だったのだ。だから忘れたのだ。普通にその後を生きていくために必要だったから、無意識は忘却を選んだ。結局自分がハル力を捨てた。

けれど斉藤は知りたかった。どうやっても思い出せないあのときを、あそこで何があったのかを、白い壁の向うにあった真実を、忘れることがハル力に対する裏切りのようで苦しかった。だから、幼かった自分は、無邪気に、単純に、警察になら事件の詳細があると思っただけだ。

警察のデータベースに侵入するやり方はネットの中にころがつていた。試したら、できてしまった。辿り着いた情報のジャングルの中で、斉藤はこの森には罪を犯した人たちの情報があることに気付いた。もしかしたら、犯人を探せるかもしれない。顔を見れば思い出すかもしれない。そんなふうに思いが凝り固まって行っただのはデータベースに入り込んでから後で、そもそのきっかけは、そんなところだったわけではない。

あ のとき、かつての自分が警察のデータベースの中を彷徨^{さまよ}っていたとき、警察は、正しくそうしていた自分を探り当てて逮捕したのだ。ということは、サイバー犯罪者を検挙している警察は、ハッカ―を探知するノウハウがあるということだ。盗聴に同じことができるのかは知らないけれど、きっと似たようなものだろう。

ちゃんと探せば、他にも飛竜たちを拉致した犯人へ至る手がかりはあるのかもしれない。けれど、紛れもない肉体的に明快な痛みに鈍った思考回路は、影すら見えないそんな手がかりを探すより、警察のやり方なら盗聴野郎に辿り着けるかもしれないという思い込みの方を手っとり早く選んだ。斉藤は考える。

溺れるものはワラをも掴^{つか}む。

まったくその通りだ。とにかく飛竜と瑠璃子の無事な顔を見たい。二度と、大切な人があんなふうに白い壁の向うに消えてしまうことには耐えられそうもないのだから、選択肢はないのだ。性懲りもなく警察のデータベースに侵入していたことを事由に逮捕されれば、前科者の当然の報いとして、将来を塀の中に送ることになるかもしれないが、そんなことはどうでもよかった。飛竜を、瑠璃子を失い

たくない。思いはそれだけだった。

病院の廊下を、看護師によって診察室に向け強制連行されたとき、待合室の廊下にお巡りさんの姿があった。飛竜と瑠璃子が拉致された経緯を事情聴取するために来たんだろうと思ったとき、その一つの顔を見て、斉藤は驚いた。あのときに自分を逮捕しにきたお巡りさん——徳永のものだったからだ。

沖が三上を焚きつけることに成功したとしても、逮捕状が出されるにはまだ早い。徳永は多分、今起こっている飛竜たちが拐かされた事件で来ているのに違いない。けれどもうまくいけば、治療をされている間には、三上が行動を起こすだろう。警察に悪戯しにいつていたときに見た通り、サイ対の三上と徳永にはパイプが在ることは間違いない。だから三上にしても、斉藤の無理な願いを受け入れたなら、事に当たるように命令する相手として、徳永はまさにうってつけだろう。

もう一度、自分は彼に逮捕されるのかなと思うと、偶然というものが持つ不思議に、斉藤は魅せられそうになった。

治療をおえて、少し眠って落ち着いたのだろう。鎮痛剤が効いているのか、それともタカの荒療治のお蔭なのか、斉藤は思考力が少し戻っているように実感した。

とにかく飛竜と瑠璃子の無事を確保するためには、脳味噌にちよつとばかり頑張って働いてもらわなければならないだろう。

何ができるのかを必至に考えたとき、斉藤の目の前を岸の宿題が、あの可愛くない犬をぶつ叩く、例のモグラ叩き——名称に難あり——の映像が頭を過った。

最初はまだましだったと自分でも思う。けれど、途中で爽やかな

ファンファーレ音が鳴り響いて、速度が上がってからは、自分は完壁にヘボなプレイヤーだった。だから、出たと思ってあわてて動いて、ハンマーが届いたときは、既に穴に引っ込まれた後だったりして、全くもって太刀打ちできなかった。教訓その1、敵に勢いがあるときにジタバタしても、どうにもならない。叩くのは、動きが速くなる前にする。そして、教訓その2、人ひとり程度のことなどたかがしれている。少なくとも自分に、うぞうぞと出てくるモグラ（犬？）を容赦なくぶん殴るスキルはない。

飛竜たちが引きずり込まれた穴がどこなのか分からない。けれど、10ユニバコインをぶち込んで、ゲームを始めない限り、モグラはそもそも穴から頭を出すことはない。引っ込んでいるモグラをひっぱりだすには、仕掛ける必要がある。

他の誰かがコインを投入してプレイしている台のモグラを叩くのは、そもそも不可能だ。ハンマーは盗難防止の為にその台に繋がれているのが普通だ。モグラには、自分の目の前の穴から、その頭をトクマ出させるのだ。

飛竜は、月のパワーバランスゲームの中に巻き込まれて、穴に引きずり込まれた。だけど、自分が手に持つことができるハンマーは、隣にあって見ることができたとしても、そのゲーム台まで届きはしない。

教訓その3、ゲームをしたいなら、自分の台からモグラを出させるか、ハンマーを繋いでいる鎖をぶちきるか、どちらかを選ぶしかない。どちらもしないというなら、ゲームは自分の関知しない場所で進行して、そのゲームの中にいる連中の動きだけで優劣がゆれ動いてどこかに落ちる。斉藤が目の前にあるゲーム台にコインを投入しなくても、あっちのゲームはもう動き始めている。飛竜の遺体に縋り付いて泣くことも、生還した彼を抱きしめて泣くこともできる

だろうけれど、人のゲームを見ているだけで、斉藤、お前は納得できるのか？

斉藤は自分に話しかける。彼の前にはゲーム台があつて、なぜかパンダの貯金箱いっぱい分のコインも持っている。だったら月のルールで動いているゲームを、こっちのフィールドに引きずり込む。今自分が提案したやり方が滑つても、まだ飛竜と瑠璃子を追い詰めることにならない。なぜなら、やつらはまだ、連中のゲームをしているつもりになっているからだ。

* * *

「おい、ワルガキ。いつまでアホみたいに笑つてる気だ？」

徳永が斉藤に近寄つて、頭を軽く一発小突いた。

「す……すみません」

なんで徳永に謝っているのか分からないけれど、とにかく斉藤はそう言った。

「めちゃくちゃなこと考えるな、斉藤。思いついたとして、このメソツをここに集められてるってだけで、俺は正直、あきれてるけどな」

贅沢にもハイパーウェーブ通信の接続時間をカウントし続けている四つの画面に、今大きく映ってるのは、あの中国系の女の子と、インテリ女性の二つの顔だけだ。プラムの方は取りあえずいったん回線を切ったようで、沖^{シヤコ}が出てくる前のモノトーンの画面に戻って

いた。霧島の恐らく社長室を写しているらしき画面では、秘書と思しき面々が、せわしく動き回っている。霧島松姫も何か行動を始めたのか画面に映っていない。

インテリおばさんがでんと中央を占めた画像の端には、別の端末に向っている沖のピンクの姿が見える。

――斉藤。ちょっと大丈夫？ 何か、あなた変じゃない？

画面の中で、春花が怪訝そうな顔をしていた。

――だいたい、その怪我どうしたのよ。

「これ？」

斉藤が顔に手をやると、画面の春花が頷く。

――いじめっここに泣かされただけだ。

眉間にしわを寄せて、黒目を明後日の方向に向けた春花が、何だか非常に可愛くて、斉藤の頬が、もうちょっとだけ深く緩む。

「ねー、歩あゆみちゃん」

タカが教室で発言を教師に求めるようなしぐさで言う。

「アユムだ……」

律儀に斉藤がケチをつけるのを無視してタカが続けた。

「オレ、アホだからさ、よく分かんないんだけど、ちょっとだけいい？」

「出たな、マジシャン」

ニヤツと斉藤の笑顔の種類が変わった。

実は斉藤はこういう瞬間が好きだ。自分が作り出した物語の道具立てを使った二次創作をやらかすとき、高柳タカはオリジナルをいともやすやすと凌駕する。タカに限らず、三人集まれば文殊の何とやらで、数人でちゃんと情報を共有すれば、斉藤の描いた青写真とはまったくやり方も落ち着く先も違つて行くに違いない、数多あまたの物語が、いろいろな人の口から紡ぎだされていく。

魅せられるような完璧な物語、余りにも馬鹿馬鹿しくて、だからこそ意表をつく物語。乱暴だけれど勢いのある物語。己だけで描ける世界とはまったく違うその中で、輝くものがあれば、斉藤はそれを選ぶ。自分が作り出すのはたたき台なのだ。

斉藤には不思議なのだけれど、普通の人間というのは、その辺にころがっているデータをつなぎ合せて一つの流れにする、そもそものソコが得意な人間というのが少ないらしい。だけれど、たたき台があれば、そこに本当に沢山のアイデアを膨らませられるようなのだ。だったら、取りあえずでも粗削りでも、とにかく事態を参加者が共有できる形にするのが役目なんじゃないかと思っている。

タカが知っている他のスターたちと比べて、スター斉藤の采配スタイルは、滑り出しがいつも鈍い。参加者がルールと自分たちが使える材料を知るという手続を必ず踏むからだ。皆が春花のように切れて回れば、時間口スは少ないのだと思うけれど、自分のような鈍いのも混ざっているチームで、必要最低限の情報を共有するというのは、なかなか難しい。多分、指揮者という立場に立つことになった多くの人間にとっては、単純に難しいというより、面倒臭いのだろう。そういう己のカリスマを疑わない人たちの方が、物事は無難に進む。参加している方も、気楽でいい。けれど斉藤スタイルは違う。全ての行動する人間が、全体の流れを知ることには、厭になるくらい手間を惜しまないけれど、そうやって舞台に参加者を蹴りだした後、語部ストーリーテラー斉藤テラーって奴は、全員が流れを知っていることを前提

に、その自分が物語の中で果たすべき役割を自由に演じるようにと、乱暴に丸投げするのだ。

斉藤は自分の無能を知っている。自分の狡さを知っている。一人ができることの余りに少ないことも知っている。運命というものが、人の思いなど簡単に叩きのめすことも知っている。だからこそ、斉藤は自分が完璧に作動するプランを出していると、その段階で思ってもいない。だから、固執しない。

いろいろな人間から出されるアイデアの方が使えると判断すれば、斉藤は今までに語られてしまった部分の物語との矛盾を潰しながら、新しい流れに乗り換えていくためのサイドストーリーを紡ぎ出す。スター斉藤に意見をぶつけることは、今回のようなシチュエーションでは不謹慎ではあるけれど、高柳^{タカ}には楽しい。

斉藤のスタイルは譬えるなら人形浄瑠璃に近い。斉藤という語り手が物語の筋を語ることで、ワンダーランドが動き出す。そして、演者たる人形遣いたちは、その物語の中で、その役割を自由に人形が生きているように動かす。双方が物語の担^{にな}い主^{ぬし}だけれど、それぞれが自分で自分の信じるように動きながら、結局観客にとっては、一つの大きな物語としてうねっている。

チーム斉藤スタイルでは、皆どれだけ取るに足りないと思われる意見でも、取りあえず斉藤にぶつけてくるようになる。自分がこう動くことが物語を壊さないか確認したくなるからだ。丸投げされる方が、自分のやり方の是非を聞きたくなるというのは、不思議なものだ。

斉藤がどんなふうに何をやらかすかは、舞台の幕が上がった地点では、斉藤を含めてだれにも分からない。だから、参加表明をした覚えもないのに、自分がいつの間にかデカイ人形を持たされて、舞

台に役者として（人形遣いとして？）立っていることに気付けば、誰も真剣にならざるを得ない。演者たちには、物語がどういうルートを突っ走っていくのか分からない。義太夫が本を持ってないのだから当然のことだ。けれど、ぼーっとしているだけでは舞台を台無しにしてしまう。

けれどたった一つだけ、斉藤が動かさないものがある——物語の終着点——ゴールだ。斉藤は最初に俄か仕立ての素人（しらべ）人形遣いに、そこだけは最初に必ず示す。斉藤は自身も走っているにも関わらず、遠慮会釈なくコースを変えてしまうのだから、誰もがどこをどれだけ走らされるのか見当もつかないで走るしかない。けれど、到達地点が示されているということは大きい。そこがあるから、皆自由に動いているように見えて、結局軸がぶれることがないのだ。

今回、義太夫（ぎだゆう）斉藤は、秋篠瑠璃子と斉藤歩という人形が動いていた舞台を、霧島飛竜という人形の物語として、無理くそに語ると宣言した。そしてその物語は、霧島飛竜と、秋篠瑠璃子が死なないという結末（エンディング）に向って進む。シロウトの人形遣いたちはそこだけをちゃんと分かっていればいいのだ。

画面の中にいる春花と、萩原（アケイツ）そしてサイ対の室長室で、霧島飛竜の誘拐及び身代金要求事件に対する帳場（チョウバ）（捜査本部）から、斉藤への呼出しが掛かるまで、ここにいるしかない三上と金田。

それから、完全に出て行くタイミングを逸しただけで、自分たちが斉藤浄瑠璃の人形遣いにさせられてしまっていることなど、多分、想像すらしていない徳永と和田。

彼らの視線が、授業参観中に張り切って挙手する小学生のような

タカに、否応なく集まった。

「このプランのキモはさ、瑠璃子さんプラス歩ちゃんだと思ってる犯人が、どこにいる誰かってことじゃなくて、瑠璃子さんと一緒にさらってきたはずの斉藤歩が、本人じゃなくて霧島飛竜だったんだってことを犯人に知ってもらうってことでしょ。だからって、ついでに飛竜を殺^やっちゃうのは、誠に都合が悪いと思ってもらいたいんだよね？」

「Oui^{ウイ}」

つい、タカのこのスタイルの質問の振り方で、受け答えにフランス語をよく連発した学生時代の指導教官の口調になった斉藤が答える。

「都合が悪いからしないってのをさ、もう一歩進めて、飛竜を持ってるのがすくラッキーなことで、美味しくいただかなきゃ勿体ないって思ってもらうってのは、どう？ 奴の生存確率は、そっちの方が上だろ？」

皆が注目しているからではなく、自分の語彙レベルの低いたどたどしい語りで、自分の言いたいことに斉藤の理解が付いて来ているか待つといったところで、タカはそこで言葉をいったん切った。

「Veuillez le continuer（続けて）」

おフランス人になって斉藤はタカを促す。

「お前の上の人が、松ねえの会社に、飛竜をカタに500億吹っ掛けるんだろ？ それで、キシマはその犯人が月であくどいことをしてる奴が犯人っていう思い込みで、レディ・サヤコを使えなくするってオドシをかける。それで本当に犯人がそういう奴だったら、それで有効なんだろうけど、宣伝したって気付かないってこともあるよね。今あの人たちのんきにテレビ見てくれるか分かんないし……」

「……C'est surment donc（確かに）」

——斉藤、ウインスレイ教官ごっことは、即刻止めて。ウザイ。

画面の向うから、ピシリと春花が斉藤を窘めた。斉藤がひよいと肩をすくめた。この二人は相変わらずだ。春花が突っ込んで、斉藤はそれをやんわりと受け止める。くすつとタカが笑ってから続ける。

「前にお前が言ってたじゃん。人間、それをしたらマズイっていう理由で、何かをするときはフットワークが重くなるけど、それをしたら美味しいってときは、動きやすいもんだし、動いてるときの方が足元を掬いやすいってさ。歩ちゃんは、犯人に動いてもらいたいんだろ？」

「もちろん。マジシャン・タカ、お前なら……どうする？」

「犯人って、お前のオヤジさんのとこの声、盗んでんだろ？ ってことは、そこに向って話せば、その声は聞いてくれるんじゃないの？」

はたといった感じで斉藤が一瞬固まった。

「24時間、フル態勢で、盗聴に励んでると思うか？」

「だって、犯人って、オヤジさんに何かさせたいことがあって、瑠璃子さんと歩ちゃんを攫ったんでしょ。だったら、向うとしても戦闘態勢に入ってたってことじゃん。そういう場合、オヤジさんとかへの通話への監視レベルが落ちると思う？ 今の連中が気になるのは、二人を拉致したことで、どうオヤジさんが動くか……でしょ？」

「なるほど……。それは、そうだね」

斉藤の相槌に、タカが嬉しそうな顔になる。

——タカ、さっさと話しオトシなさい。勿体付けてるような場合じゃないでしょ。

春花の雷がタカを直撃した。

「あのね、霧島飛竜を攫った犯人は霧島運輸に500億払わせるつもりでいるってことでしょ。ってことは、その場でヤツに500億の値段が付いたってことだね。あんな奴が500億だと思つと癪^{じやく}だけどさ。だけど飛竜を拉致した人間は、斉藤歩を使つてどうのこうのするプランはあるけど、500億の値段がついても飛竜をどうのこうのするプランはまだないはずだね。だいたい突発事項には人間普通は固まるからさ、そんな代替えプランをばこ出すような、歩ちゃんみたいなどつか回りすぎる人間が付いてなきや簡単には次のテなんか思いつかないよね。だいたい、歩ちゃんみたいなのが、そんなにウゾウゾ世の中に居られても困るし……」

——本当に話長いんだから。タカ、もつと端的に言つて。

「向うは、手許に居るはずの斉藤歩が、霧島飛竜と分かったとして、とつさには、どうしたらいいか分からないはずだね。第一、霧島飛竜を持つてないはずのナゾの連中Aが、霧島飛竜をカタにキリシマを脅したことに盛大に警戒するはずだね、当然」

かすかに斉藤が頷く。タカが続けた。

「飛竜をさらった犯人がどこで聞いているか、悠長に探すのは、多分ここの人たちの方がプロだろ？ そつちは任せちゃっていいと思う、この際。でさ、どこだろうと聞いている確率は非常に高いんだつたら、そこで連中が聞いていることを前提に、連中に向つての条件提示をさ、オヤジさんの電話に向つてすればいいと思わない？」

春花が大きいため息をつく。

——条件提示って、何の。

「連中が欲しいのは斉藤歩なんでしょ？ 俺たち、斉藤歩なんか、

持つてるじゃん。物々交換^うって申し出したって、いいよね。斉藤やるから、飛竜よこせって」

聞き耳を立てていた徳永が、その余りな発言に激しく脱力した。斉藤歩を欲しかったが、マヌケに人違いをしたと悟ったばかりの連中がいる。500億の価値があるらしいが持つてるだけじゃどうにもならない霧島飛竜が手許にいる。どうしよう、と、そこに棚からぼた餅のオフア^ーが入る。あくどいことをする連中の論理には、霧島飛竜を誘拐しようとしていた人間たちの前で、自分たちが彼らの獲物をかつさらってしまったのだという物語は、まるで無理なく受け入れるだろう。

ミスに気付いて、焦っている人間には、テメエよりマヌケを見ると嬉しくなるものだ。500億の男を持つてるだけでなく、捌き^{さば}先まであるなら、この失態は大きなミスじゃない。むしろ、あくどい連中であれば、斉藤歩と500億に食指が動くだろう。動けば腰の位置は高くなる。足を掬^{すく}う機会はそれだけ増える。

だとしてもだ。霧島飛竜と斉藤歩をネタに犯人を燻^{いぶ}り出そうなんて、そりゃあ、思いついちまったなら仕方ない。それで無邪気な夕力という男を責めやしないが、そんなこと思いついても普通、斉藤歩自身に向って言うか？ こいつら親友^{マフダチ}じゃねえのか？

「穴^{ドタマ}から頭を出さないモグラは叩けない」
ぼそつと斉藤が口にした。

——斉藤、それ、どういう意味？
タイミングよく春花が聞いた。

「それ、面白いね……」

（おいおいおいおいおいおい……）

幾らなんでもそれはないだろうが、斉藤歩。そう思った徳永の耳に斉藤が短くつぶやくのが聞こえた。

「やる」

（こいつらはあっ！）

まったく、とんでもないガキどもだと、徳永が舌打ちをする。勢いで三上を見ると、切れ者でならした男の癖に、あっけにとられたといったところで、完全に動きが止まっていやがる。まったく情けない。

——斉藤、タカ。あんたたち、随分気軽に言うけどさあ……。犯人に直接カマシかけるなら……

春花のような可愛いお嬢さんが『カマシ』などと言ったので、徳永がもう一度うへえとなる。

——私たちじゃ、ちょっと迫力足りないんじゃない？ 私はほら、オトメだし、斉藤は本人だし、タカは日本語崩壊してるし。少なくとも、ほら、顔が全体的にマヌケてるじゃない。第一ガキすぎるし。そういう知能が高そうできて、悪人で、キモも座ってるっていうキヤラ演じられる人なんて……、あんたたち、だれか心当たりあるの？

「肝が座ってそうで、知能が高そうで、悪い人って、歩ちゃんこのカバさんみたいなの？」

タカがさらっと口にする。

「樺崎とか、青山の連中の顔は売れまくってるだろうからNGだろうね」

斉藤がふんと腕組みをして、難しそうな口調でいった。それから、ふいに口調が変わった。

「ねえ、春花。参考意見として聞きたいんだけど……警察官って、制服と帽子脱いだらさ……人相変わると思う？」

（……制服と制帽姿の……警察官……？）

徳永が、幾らなんでもまさかなだよな、と思っているにも関わらず、斉藤の視線ときたら、話しているはずの春花が映っている画面の方ではなく、ばつちりと徳永に向って照準が絞られていた。

（……こ、このクソガキいつ……）

徳永の理性は、瞬間に、蒸発寸前まで沸騰した。

4・仕込みは手早く、運用は臨機応変に

（そっぴや、鼻骨骨折と言ったな……。また、随分派手に出血したんだな）

斉藤からジャケットを脱がせれば、茶色く変色した血のシミがかなりの量でシャツに飛び散っていた。絵の具だのインクだのではなく、ホンマものの血なのだから、なんというカリアル感は申し分ない。徳永は自分が何をしているのかつくづくあほらしく思いつつも、仕事に取りかかった。

「やるぞ」

短く声をかけて徳永は、斉藤を床にうつ伏せにさせる。と、やりやすいように馬乗り気味になりながら、飽くまでもそれらしく見えるように、見るからに無理がある角度まで両手をねじり上げてから背中であぐら。それから準備よく手近な床においておいた斉藤自身のネクタイ手にとって、さて、縛ろうというところ。

まあ、あんまり緩いと嘘臭く見えるだろうし、そんなところでボ口を出すのも何だと思い、徳永はそいつをぎりりつと締め上げた。と、幾らなんでも痛かったのだろうが、斉藤の唇から、うめき声が漏れた。とたん、徳永の心臓が跳ね上がった。

「強すぎたか？ ……おい、大丈夫か？ 息苦しいとか、心臓がバクバクするとか、めまいがするとかないか、怖いとか、ぶったおれそうだとか」

幾らルナGなら重さは関係ないとはいえ、体躯のいい男に上に乗られた状態で、そっぴやのことを聞かれてもまったく嬉しくないし、

斉藤は徳永を遮った。

「……大丈夫ですよ」

縛られつつある斉藤の方が飄然とした風で、上に乗った状態で縛っている方の徳永がどうにもこうにも厭そうに、冷や汗まで額に浮かべているといった状態は、どうみてもかなり頓珍漢だ。床に転がされた青年が、脂ぎった下着姿の中年男に縛られつつあるという風景は、確かに非常に滅多にない光景で、よくよく考えれば、かなり変態的ではあるなど、タカはにやついた。徳永の表情を見ているだけでも、まあ、楽しいといえは楽しい。

「大丈夫って言われても、今さっき現場で血イ見て、過呼吸でぶっ倒れた前科者^{マエモノ}じゃねえかよ。そんなに保証されても信じられつかよ。第一、なんで俺がこんなことやらなきゃいけない？ 電話は掛けたるから、縛り^{シバ}くれえテメエでやりやがれっ。やめやめっ」

徳永は縛りかけのままで斉藤から飛びのいた。

「無茶言わないでくださいよ、徳永さん。誰かがやってくれないと自分で自分の両手は縛れませんよ。大体、徳永さんのこの角度だと真面目に痛いんで、臨場感的には文句ないんですけど、さっさと写真撮ってほどもらいたいかなあ……なんて思いますが」

床に転がったままの斉藤が、中途半端に縛られた手をヒラヒラさせて言う。

徳永は自分でない誰かがやるべきだと室内を見回した。

「三上……、お前なんか楽しそうに見てないか？」

「……誤解だ。徳ちゃんが冷や汗かいてるとこなんか、滅多に見られんから、そういう意味で楽しいといえば、楽しんでるが」

ぷくつとモニターでその様子を見ていた崔春花が息を吹き出すのがわかった。

——それにしても、そのシャツ、酷いね。すごく出血したんじゃないの、斉藤。いじめっこって一体だれよ。

壁面モニターの中で春花が言う。

「ここに春花がいたら、縛ってくれたのに……」

斉藤は目の端でタ力を見ながら話題を逸らした。

——斉藤、どういう意味よ、それ。なんで、私があんななんかを縛らなきゃいけないのよ。そういう趣味があるって思われたらどうしてくれる。

「いや、この中途半端な状態をぶった切ってくれるかなと思って。えっと、タ力は続きできる？ 交渉するのには写真があった方がいいって言い出したのタ力だし」

斉藤が言つと、タ力はくすくすと笑った。

「オレでいいの？ うんうん、やったげる。だけど、いやがってる步ちゃんの顔を背後から掴んで、カメラに向けさせる役はやっぱり徳永さんだからね。ほら、手って割と年齢^{トシ}でるじゃん。顔は写さないにしても、ちょっとこういうディテールには拘^{こだわ}らないとね。んじや、縛るね、斉藤、覚悟っ」

タカは——しっかりと縛り上げるにはこの態勢がやはり便利なので——転がったままの斉藤に乗つてみると、遠慮という文字のかけらにもじませない思い切りの良さで締め上げた。余程痛かったのか、斉藤が今度は小さく悲鳴をあげた。

「はい、一丁上がり、徳永さんよろしく」

ついでにタカは、医療機関で貼られた保冷シートを斉藤の顔から剥がした。

「いててっ、ちつとは加減しろっ」

斉藤が文句を言うと、タカはふんと鼻先で笑った。

「こういうのは一気にやった方が痛くないんだって。恐る恐るゆるゆるやるのって、じわじわ痛いと思うよ」

斉藤がその言葉を遮った。^{さえき}

「さっさと写真撮る。これじゃ手首が壊死する」

「まさか、そんなに強くしてないでしょ。大体オレ、微細重力馴染みすぎで非力な方向に日々鍛えられて軟弱化の一途なんだしさ、そもそも飛竜みたいなバカ力ないって。いやだな、歩ちゃんってば、人聞きの悪い」

「……痛いもんは、痛い」

——さっさと写真撮ってほどこいてあげて、タカ。

春花が不機嫌そうに言う。やっぱり春花は、斉藤を心配していると怒るよな、と、タカは思ってもう一度さっきまで持っていた、携帯端末についたカメラを構えた。

「徳永さん、出番です」

（ひと言多いよな、タカは）

露骨に厭そうな徳永をちらりとみて斉藤は思う。縛られて自由を奪われるという経験は確証はないながらもあつた覚えがないので、そんなことで一日に二度目のフラッシュバックを起こす心配はないだろうと高をくくっていたとはいえ、誰が何といつても、自分は痛いには弱いのだ。このまま痛いのが続いたら、心がへたれてしまう。

「俺はガサツだから壊れもん扱うのは苦手だ。和田、お前やれ」

和田が思わぬお鉢にあからさまに飛びのいた。

「え、遠慮します。徳永さんがご指名ですし、服装的にもスタンバってますし……」

「三上……、テメエは？」

三上は首を振る。

「私はどっちかというと、斉藤君と同じで、肩も腕もラインが細いからね、迫力の点から君たち、現場でならしてる方が適任だろう」

「厭なことは全部、俺たちかよ、それ酷えだろうが」

「誰でもいいんで、さっさとお願いします」

徳永が抗議する声と、情けない斉藤の声がかぶる。

「大体、こういう人を騙くらかすつてのは、刑事課の連中なら慣れてるかもしれねえけど、マル機の畑には馴染まねえ」

「……徳永さん、本当に、痛いんで、よろし……」

「このクソガキ……」

やれやれとばかりにため息をついてから、徳永は斉藤の腕を拘束したネクタイを引っ張って上体を起こさせた。痛みレベルがもう一

段階上がったのか、斉藤が二度目の悲鳴を上げた。眉間にしわが深く寄った斉藤の顔を見て、徳永はしよつことなしに、顎を掴むと、無理に捻ってカメラを構えたタカの方に向けた。

タカはすかさずシャッターを数回切った。

画面の中で、斉藤が情けなく苦痛に歪んだ顔でいる。顔の中心は見事に腫れているし、服は乾いた血でよれているし、後ろ手に拘束されて自由が奪われているという雰囲気がある。しかも、徳永ときたら、見るものが見れば、活動服なんてものは、完全に警察官名刺も同然なので、上半身だけでも脱いだ方がいいという三上の余計な口出しで下着姿だったりする。剥き出しの徳永の腕は、如何にも如何にもという具合に太くて毛深くて、若干の古傷もあったりして、なんともいえず嗜虐者の持ち物に相応しい。

「どう、これ、春花。一発合格？」

タカが画面を春花に見せびらかすと、春花がどなった。

——そんなん、形があればどうでもいいから、さつさと斉藤の解く！

言われるまでもなく、徳永はさつさと弛め始めていたけれど、しっかりとギチギチの堅結びになっでいて、徳永の太い指では、なかなか結び目に爪が立たない。

「これ、めちやくちや固えぞ。どういふ野郎だよ、そのガキ」

これじゃあ、悲鳴を上げるはずだと、あきれて徳永がタカを見る。もちろん、斉藤が絵に描いたような悪党で、銃火器振り回して暴れているなら、トツ捕まえて縛るのに遠慮をする徳永ではないが、斉藤は、ホンマもののガキのころに、拉致されて暴行を受けた過去の傷をトラウマで抱えていることが明白なのだ。そういう意味で傷に塩を塗りたくるようなまねは、ちよつとでなく躊躇^{ためら}って然るべきだ

と思う。

あるいは、斉藤がどれほどの暴行を受けたのかを、このタ力という青年は知らないのだろうか。ちらとタ力を睨むと、彼はひよいと肩をすくめた。

「怪しいと思われたら、飛竜の危険度が上がるし、縛られてる時間は短い方が斉藤も楽じゃないかと思ったから……」

「……徳永……さん。そいつに常識つての……基本的にないですから……。説得するだけ、時間……ロス」

斉藤の受け答えが切れ切れになっている。単純に痛いのか、またしても過呼吸の発作の前兆なのか知らないけれど、これはやばいと徳永は解くのを諦めた。

「三上、カッターぐらいあるだろ。貸せ、これは切らないと無理だ」

——タ力、あんたでしょ、斉藤怪我させたの。

ぎくつとタ力の肩が震えるのがわかった。どうも、昔から女にオイルマイティーな癖に、春花はどうにもいま一つ苦手らしいのが可笑しい。そういや、キス魔のタ力は、春花の唇の味は知ってるのかな、そんなことが斉藤はふいに気になった。とたんに、又しても斉藤は笑いたくなった。春花だけは、あのタ力に唇を奪われたら、鉄拳で返しそうな気がする。自分がタ力にくらったような、容赦なく顔のど真ん中にめり込むやつを。

——常識なんて、今更あんたの辞書に書き込むのは不可能だけど、『加減』とか、『適度』とか、その辺りの単語はちゃんと載せときなさいつ。

「酷え、色が変わっちまってるぞ」

ネクタイを切って斉藤の腕を解放した徳永は、僅かな時間しか肌

に食い込んでいなかったにも関わらず、すっかり変色しかけている
斉藤の手をみると、思わず両手を伸ばして、そつと揉みほぐすよう
にやさしく摩さすった。それから左手を徐おもむろに離すと立てた親指で、つい
と春花としゃべっているタ力を指した。

「あのお兄さんは、いつもあーなのか？」

斉藤は軽く頷いて肯定すると、タ力を目の端で睨んだ。まったく
徳永の言う通り、こいつは、いつだってこうだ。

「……常日頃、いっぺんぶん殴ってみたいとは思ってるんですけど
ね……、どうにも、その慣れなくて……」

その物言いに、基本的苦虫モードに見える徳永の口元が、軽くほ
ころびた。

「ま、人を殴るにも適性つてやつがあるからな。まあ、人をぶん殴
るのになんか、無理に慣れる必要はねえぞ」

にったりという笑顔で徳永は、もう一度両手に戻り、柔らかいし
ぐさで斉藤の手首を、丁寧になぞった。

「ふん、ちと内出血してるな。冷しといた方がいいかな。ま、野郎
は見てくれなんて気にするなと言いたいけど、変態じゃあるまいし、
束縛痕なんてのは体裁悪すぎらあな。和田ア、ちつと走って、救急
箱から冷却シートかコールドスプレー取ってきてくれ」

斉藤はまじまじと徳永の顔を見た。

視線に気付いて徳永が目線を上げる。

ぱつちりと視線が合ったとき、斉藤がにこりともせずにはまじめ
な顔で言った。

「徳永さんって、何だかママみたいですね……」

部屋を出ていきかけていた和田が器用にずっこける。徳永から力

ツターナイフを取り返して、ごみになってしまったネクタイの残骸を拾いあげたところの三上がその状態で動きを止める。事態が動き出す瞬間に供え、壁面モニター画面を細かく分割して、テレビの二ユースタンネルや、インターネットの新聞社紐付きサイトなどのトップ画面を呼び出しては並べてと、忙しく動いていた金田の指が止まる。

「どついう意味だ、それ」

徳永がドスを効かせて凄む。

斉藤は大まじめな顔のまま言った。

「やさしいなあと思つて……」

署内ではスタイリストでクールということになっている三上が、部屋を支配した一瞬の沈黙を破るかのように、派手に嘖き出した。徳永のこめかみが、ヒックリと僅かに動いた。

* * *

「斉藤く〜ん」

金田がマスコミ情報収集用に小分けした画面を下部に並べ立てた所為で、些か小振りになった沖がそのピンクの巨体で登場した。

「あのさ、脅迫状書いて思ったんだけど、やっぱりキリシマ御曹司の首に50ユニバ要求するのに対抗して、キリシマがレディ封鎖するつての、無理があると思うんだ」

ちょっと前に50億から500億へと、身の代金額を一般庶民にとっては天文学的な額にまでつり上げたシャコのセリフだ。今度も、ゼロ一つとって斉藤が最初に提示した金額に落ち着けるつもりだったのかもしれないけれど、単位の億までついでに落つこととして話している。うっかりか意図的にか定かではないけれど、これでは天下のキリシマ御曹司の身代金どころか、小学生のお小遣い並みの金額だ。

続きをなおも言い募ろうとしていたシャコは、しかし、目前のモニターを占めているサイ対室長執務室の中の奇妙な雰囲気、続く言葉をきれいさっぱり失った。

上半身下着姿になった中年男——我が身と引き比べて、引き締まった腹のラインが羨ましいと思ってしまったのだが——徳永と、マジックで星が描かれたしわだらけのジャケットではなく、縫^よれたシヤツが惨め感を非常に素晴らしく醸^{かも}し出^だしている斉藤が、部屋のど真ん中で手を握り合って見つめ合っている。

「斉藤君、斉藤君。いろいろストレスがたまる年頃なのは分かるし、人間追い詰められると本性がモロ出てくるのも分かるし、人の好みにいちゃもんつけるほど無粋じゃないつもりだけど、ほら、TPOってあるじゃん。衆人環視^しつつか、キャリア連中に、アブノーマル道まっしぐらの濡れ場を見せて喜んでる場合じゃないよね？」

「シャコさん、何か非常にカンチガイしてませんか？ 徳永さんに失礼ですよ」

素っ頓狂なシャコの交ぜっ返しに、大まじめな口調のままで斉藤が応えると、もう一度三上がまったく彼には似合っていない種類の笑い方をした。

「ちょっと路線変更なんです。えつと松姫さんも、手が空いたら、もう一度ここまで来ていただけますか？」

斉藤が言ったのを、多分聞いたキリシマの社長室秘書みたいな女性、画面の端で電話をしている松姫に向ってメモを渡しているのが見えた。

「変更って？」

「これは高柳という私の友人です、シャコさん。彼からの意見なんです、ネットやニュースに流れてる脅迫状に犯人が気付かない可能性はやっぱり大きいでしょう。それで、現状として、秋篠瑠璃子と斉藤歩を攫ったはずの犯人が森本茂の通話を盗んでということ、私たちは確信しているわけですから、今は犯人がべったりと回線に張りついて盗聴を続行しているだろう可能性は高いと見て、そっちの状況の方を利用します。その方が気付いてもらえる確率、上がりますよね」

——うん、僕も普段は、テレビもネットニュースも見ないしねえ。

余程じゃないと確実とは言えないかもしれないね。

沖があっさりと同意する。斉藤は動きを止めたままの徳永の掌から手を引き抜くと、自分で手首を左右交互に摩り摩り、三上の執務机の前まで移動した。

「さっきの、犯人にそこにいるのは霧島飛竜だということを知らせるという基本プランは変更ありませんが、キリシマから金をせしめようと思ってる人物、若しくは団体^もがいて、霧島飛竜を狙っていたという前提条件に変更します。鴨葱^{カモネギ}された人間が、『斉藤歩を確保してあるので、霧島飛竜よこせ、代わりに斉藤歩は渡す』というオファーを直接流します。一か八かで、連中が気付くのを待つよりは積極策だと思いますか」

——キリシマ御曹司と青山ブルマンの斉藤を交換って、それ、危険じゃないの？ 斉藤君。

「まあ多少の危険はこの際、目を瞑つむるしかないでしょうね。まあ、キリシマを脅迫ゆする担当は、こちらの徳永巡査部長と、今はちよつと離席されてますけど和田巡査にしていたくので、リスクは最低限度に留められると、この辺はちよつとお気楽モードで考えたいと思います」

——徳永巡査部長って、その下着のおっさん？ まあ、僕におっさん扱いされるのは心外だろうけどさあ……。

ぶつと全部の成り行きを見ていた春花が可愛く嘖き出した。

沖シヤコは頭を掻き掻き——それでも、この徳永という男をどこかで見たことがあるような気がして、ついつい、まじまじと見た。

「シヤコさん」

斉藤が呼びかけて沖の注意を引き戻した。

「それで、向うに気付いてもらえるだろう目処が立ったことになるので、まあ、無理に目立つことをする必要はなくなっただけですけど、どうしてあなたはキリシマが逆にオドシをかけるのに無理があると考えたのですか？」

——だって、キリシマのトップの取引相手って、やっぱり国でしょ。そうすると、軍なんて国の威信のまあ象徴でしょ。我が国では警察と並んで大切に思われてないけどさ。

「……あ」

斉藤が短く言う。

——だからレディ・サヤコをキリシマが人質に取るのは、企業を潰しても構わないとまで思い詰めてないと無理でしょ。だから、本当にそういう意見を社長さんが提案したとしても、キリシマさんの内部でも反発が出ると思うのね。だから、それを承知で松姫社長がごり押しするというストーリーは、キリシマさんがかけるオドシの種類として無理がどうしてもあるというのが一点。それから砂の恩恵で食ってる企業は、何も出してる月の連中だけでなし、月内部では、報道規制の依頼とフェイク情報を流してもらって二段構えのマスコミ操作で、企業イメージの低下を防げるかもだけど、その経済界の人たちには、キリシマの企業常識を疑わせることになるでしょう。そういうリスクをキリシマさんに負わせるべきじゃないよね。」

語尾が伸びてマヌケている印象を裏切って、沖の言うことは至極もつともだ。言われて見ればプランの段階で、萩原がまあやるだけやってみてよいとしたことの方が不思議ですらある。色々な情報が錯綜して、珍しく彼女自身が混乱していたのかもしれない。上手の手から水がもれるというのは、こういうときに使える言葉だっただろうか。

——まあ、殆どはアゲちゃんの意見なんだけど。
やっぱりね。どうせ御座成りの第一手だからと一度はスルーしたとしても、よく考えれば上手くいさせるには無理があると考えし直したのだろう。

「すみません、私の考え足らずでした。誰かを嘘でかつぐための目眩ましなら派手な方が却って有効かなって思っただんですけど、そこまで考えてませんでした……」

腕組み状態に戻って、斉藤がちよっとせわしく考えを巡らしてい

る。画面の一つに、霧島松姫の姿がもう一度陣取った。

「松姫さん、レディ・サヤコを封鎖するという、フェイク情報を派手に流して、犯人に気付いてもらう云々の件はあれは白紙撤回です。私の考え足らずでした、すみません。今はまだ脅迫されてませんか、行動してませんか？」

——ええ。今は家族に、両親や妹とか弟に、飛竜が攫われたということだけ、事情を話してきただけです。

ほっと斉藤が安堵のため息をつく。松姫も斉藤の乱れた姿に眉を顰めたが、彼女は余計なことは口にしなかった。

——でも、そうすると、弟、飛竜の方ですけど、あの子が斉藤さんでなかったとしても、価値があるから危害を加えるのは得策でないということ、犯人たちにどうやって知らせるつもりですか？

「飛竜を持つてる人から、直接キリシマに脅迫させます」

——え？

斉藤が軽く舌を出して唇を湿らせた。

「あなたに今の飛竜の写真を送るように指示します。シャコさん、キリシマにちゃんとした脅迫状とネットとマスコミに犯行声明をぶち上げるのは、キリシマに写真が送られると同時にしてください。それでマスコミがキリシマや警察に記者会見を要求すれば、受けられないし、誘拐脅迫事件だけに、報道規制が自粛されるようであればそれはそれでよしとします。まあ、ネットで煽^{あお}つてしまえば、マスコミも動かざるを得ないでしょうけど……」

——そんなこと、できるんですか？

「多分」

斉藤は短く応えると、自分の携帯端末で電話を掛け始めた。

——じゃあ囚われのお姫様の写真が出たら、キシシマに500億払えってやるね。

完全にシャコさんは、飛竜なんかの金額をそこまでの大金にしようとしているみたいだなと、斉藤は首をかしげた。そりゃ、だいたいいシャトルだの宇宙貨物船だのって1機当たり200から300億もするものらしいから、まあキシシマにとってそこまで非現実的な数字でないのかもしれないけれど、たった一人の人間をキッドナッブして請求する金額としては、50億だってちよつと大きすぎて、実際のどのくらいの量になるのか、見当も付けられないほどの巨額だ。

「お願いします。金田さん、さっき撮った写真、アダルトサイト辺りに貼って、アドレス教えてください。春花、プラムに電話してマスコミ工作中止してもらって。取りあえず、彼女は待機……あ、もしカナタ？ うん、大丈夫、大したことで呼ばれてるわけじゃないから、やましいところはないし。心配かけてごめん。で、そこにカバさんいる？ いたら、ちよつと代わって欲しいんだけど。どうしてって、ちよつと頼みたいことがあるから。うん、サツに売ったりしてないって、やだな」

斉藤は電話をしつつ、器用にもメモ書きをしていた。

・それはキシシマヒリュウ

- ・我々は50億をキリシマに要求する
- ・キリシマヒリュウの写真をキリシマ本社に送れ
- ・当方は、サイトウアユムと交換する用意はある
- ・疑うなら————を見る

500、500と確定的に言うシャコのこととはやっぱり無視することにして、斉藤はそこそこ穏当に思える彼しれない額に落ち着かせた。

カナタが樺崎と話を始めたのだろうか、斉藤は徳永に書き上げたばかりの紙切れを差し出しながら言った。

「徳永さん、これ、カマシで伝えるべき内容です。話し方と組み立てはお任せします。この下線のところは、さっきの写真を見られる場所ですね。変にパスワード掛けたりしないで、変な写真が普通にあるところに紛れ込ませます。URLを金田さんから聞いて控えておいてください。犯人に最後まで聞いてもらうには、話の途中で森本が電話切らないように、樺崎にオヤジ対策してもらいます。準備ができたら行きますから、スタンバイよろしく」

5・ そのころ、囚われのお姫様たちは

頭の芯と表面の両方がズキズキとしつこくうずいている。酒に強い自信がある霧島飛竜は、そうである可能性は低いと思いながらも、さつき戻した理由が、殴られたショックで脳味噌に深刻系のダメージをくらったのではなく、単なるアルコール排出作用であることを、しきりに祈っていた。神様が日ごろの行いの良さを褒めてくれたのか、むかつきは随分収まっていて、膝枕をしてくれている秋篠瑠璃子の、むっちりと熟れた感触を、この際なので楽しんでいた。

けれど、学生時代に『突っ込み屋』という渾名を頂戴したぐらいの飛竜の負けん気は、女子供じゃあるまいし、不意をつかれたとはいえ、あっさり殴り倒されて拉致されたという事態そのものに、どうしようもなくムカついていた。

まあ、殴られて流血しているのが瑠璃子の方でないことは、悪党にも礼儀のかげくらいはあるかもしれないということと解釈してやってもいいが、だからって感謝する気になどなれない。

それにしても、ここのところまったくろくなことがない。月つてやつは、もしかして自分の鬼門なのだろうか。

親友だと思っていたデータマンこと斉藤歩に、まずタカとの賭に卑怯にも便乗されて、まず一番最初の飲み代を剥^むかれた。あいつが月出身なことも、金持ちの群生地の中でも更に一握りの金持ちの、しかもヤクザ屋さんの息子であることも、子供のときに自分も暴行された上でお母さんを目の前で殺されてるなんて、そんな地獄を味わってきたことだつて知らなかった。そのことが樺崎の口から聞かされたこと自体が気に入らない。何よりも奴がこれだけの付き合いの中で一切その事実に触れてくれなかったことを考えるだけでムカツ腹が立つ。一体、なんのために俺たちがいると思つてやがったん

だ、あいつは。

それから、大嫌いな微細重力下作業を強制労働させられ、無理してやろうとしたけど、やっぱりちゃんと出来なくて、大好きなおっちゃんである三雲を失望させた。本当に月に来てから面白くもないことばかりだ。

極めつけのトドメがこれだ。まあ、後にも先にも、トラブルバーゲンのときの一回きりだが、飛竜は身代金目的の犯罪のターゲットにされたことがある。自分の実家は金持ちだったんだと認識を新たにするしかなかったあの事件のときは、自分は最終段階まで怪我などしなかったから——詰め段階でプレブリーズなし、スペジャケなしの真空世界体験をして、危うくあの世行きになるところだったけど——、まあ、最終的に犯人を逮捕できて、自分も乗船クルーも命を落さず、大団円を迎えたということに、飛竜の記憶の中ではなっている。（そうでなくては、たまらんし）

自分を大切に思ってくれている人に対して心配をかけることしかできず、おとぎ話のお姫さまよろしく、王子様の助けを待っていてはいいいなんていう立場は、何かなんでも我慢はできない。ただ、ダメージを受けているのが頭部というのは、いただけない。ちよっと頭を動かしてみても、また吐くようだったら、諦めてお姫様モードでいるしかないが、動けるかどうか試してみようと、飛竜は気持ちがいい瑠璃子の膝から頭を持ち上げようとした。

敏感に飛竜の雰囲気を感じた瑠璃子はその肩を押さえつけた。

「動かないでって言ったでしょ」

しゃべるなど言われた気はするが、動くなと言われた覚えはない。ただ、そんな揚げ足取りを言ったら、この人はすっかり傷ついている頭をはたいてきかねない雰囲気をしているので、飛竜は取りあえずそのセリフを飲み込んだ。

「瑠璃子さん……、なんで、俺……というか、あなたと歩が狙われるんですか」

飛竜が聞くと、瑠璃子はちよつと考える真似だけして、それから首を振った。

「私は分かんない。ただ、茂さん、歩ちゃんのパパだけど、あの人に何かやらせるのに、効果があるってカンチガイしてるのだと思う」

「……勘違い？」

妙なところだけれど、飛竜はそこに引つ掛かった。息子と愛人を盾に取られたら、普通は誰だつて動きが鈍くなる。

「うん、勘違い。私や歩ちゃんを殺すからつていうの、あの人へのオドシなんかにはちつともなんないの」

「……そんなに、冷たい人間なんですか？ 歩のお父さん」

「……やさしい人よ」

瑠璃子が微笑んだ。

「でも、あの人にとって一番大事なのは自分の面子^{メンツ}。次が舎弟^{シャテイ}さんたちのメンツ。それから男の意地とかいうのがきて、次がお金ですよ。それで連合つていうの？、徒党を組んでるつていうんだっけ、えつと、まあ同盟を結んでいる人たちを自分が上の立場でいながら、あの人たちにもおいしいよつてエサをバラマキながら、なんか腹のさぐりあいやることでしょ。それから、次ぐらいが自分の命で、次が舎弟の命で」

飛竜はどつと脱力を覚えて、瑠璃子が指を立てて勘定していくのを遮った。

「そういうのを普通の言葉で冷たいつて言うんですよ」

「……あら、やさしいのよ。茂さん」

瑠璃子がニツコリと笑つてそう言つたけれど、まったく説得力にかける。

「やさしい人なら、瑠璃子さん、あなたを殺すって言われたら動けなくなるんじゃない」

「バカね。森本はやくざよ。そんなで腰まげたら、誰もついてこない。私が目の前できり刻まれても、脅そうとする人間の言うことなんか聞かないわね。で、男泣きに泣いて、私を切り刻んだヤツをナマスにするの」

あっけらかんと血なまぐさいことを言う瑠璃子に、飛竜は呆れた。

「……嘘でしょう？」

幾らなんでも、それは酷い。

「じゃあ、あなたや、歩はどこにいるんです？ その森本茂という人にとって」

「……そうね、下から二、三番目くらいかなあ」

信じられない。それでいてどうやったら、この瑠璃子はそんなに冷たい男を、やさしいなんて言葉で飾れるのだろうか。

「すぐく女にもろくて、子供が好きだから、そこ突つかれて折れるのは、死んでもいやなのよね、きっと。ハルカ姐さんが死んだときも、茂さん、そうじゃなくても細いのにげっそりやつれちゃって、ホント、見てて辛かったわ」

飛竜はふつとその名前に囚われた。

「歩の、お母さん？」

「……うん、私、大好きだったのよ」

瑠璃子が心からそう思っているということが飛竜にも分かった。曇りのない好きという気持ちが伝わってくる。

「どんな人だったんですか？ あいつのお母さん」

「そうね、なんかどこ見てるのか分からない人。あの人に见られると、ゾクゾクツとしたわよ。なんか、自分がどんな魂の色してるかまで、ちゃんと見えてるような感じで見るの。並の男の視線なんて、あれで見られた後はゴミみたいなもんだったよねえ」

そんな漠然とした表現をされてもさっぱりイメージが掴めない。

ただ、斉藤が何かを根暗く思い詰めているとき、どこまでも見えてるような底知れない瞳でいることがたまにある。つまりは、いつもあんな目をしている女ということなんだろうか。そう考えて飛竜の方が、一瞬で背骨がゾクゾクつときた。うへえ、クラゲにされちゃうな、きつと。

「步って、お母さん似なんですか？」

「やだ、ハルカ姐さんは、双子だもん、カナタちゃんと基本的に同じよ。だから、分かるでしょ？、全然似てないわよ。步ちゃんは、そうね、若いときの茂さんにそっくり」

飛竜は生涯、森本茂なんかに会いたくないと思った。老けた斉藤の顔をして、自分の女や子供に危害が加えられたら助けもしないで、報復するだけなんていう人非人は、許せない。だけど、斉藤の顔をしていたら、それでも嫌ったりできなさそうで、近寄らないに限るという身の振る舞いしか思いつかない。月に存在する飛竜の鬼門のプラス1という感じが、ぐいぐいする。もっとも巻き込まれてもう手遅れのような気もするけれど。

「なんで、歩のお母さんが『ねえさん』で、カナタさんが『ちゃん』なんですか？」

どうでもいいことなのだけれど、つい気になった順番で飛竜が聞いた。

「だって、ハルカ姐さんの方が、先に茂さんの女だったんだもん」

余りに予想外の説明に、飛竜は顔をしかめた。瑠璃子がほっと勝ち誇ったように笑った。

「この世界じゃ、私の方が年増だけど妹になるの。ヤクザの世界の呼称の順列って、アタマからの距離で決まるから、年齢じゃないの。カナタちゃんは、だから私よかよっぽどしっかりしてるけど、妹。例えば次に茂さんが十五歳ぐらいの女の子に手をだしちゃったとするでしょ」

どういう例だ、どういう。飛竜は内心で突っ込む。十五歳の女の子に歩の父親が手を出したら、そりゃ、どっからどうみても犯罪だろうが。

「その子で茂さんが一発抜いただけなら、別にどうってことないんだけど、茂さんが気に入って手許に置いときたいって言って、その子も茂さんの女だってこと承知したら、その子は私には妹分になる。そうなたらあの樺崎だって、そのお嬢ちゃんを姐さんって呼ばなきゃいけないの。つまり、そういう世界」

「……非常に分かりやすい説明でした」

一応の納得を得たところで、飛竜は下らない話を止めて、真剣な目つきになって瑠璃子を見た。言いたいことがあったらどうぞというように、瑠璃子が頷いた。

「体動かか試したいんだけど……」

「……動かない方がいいと思うけど、まあ、どうしてもっていうなら、やってみれば？」

瑠璃子のような言い方をされると、動けるか試すのがいいことかどうか不安になる。

「……」

黙り込んでしまっただけに動こうとしない飛竜に、瑠璃子は言った。

「厭味じゃないわよ。別に。ただ、好きにしなさいって言ってるの。あのね、今はのんびりしてるけど、抗争中センサーで御礼参りなんてあった日には、腹から腸がはみ出てようがサラシで押し込んで出掛けてくぐらいの気合がなきゃ、青山セイザンのメシなんか食べられないのよ。無茶する男なんて見慣れてるわ」

飛竜は、はみ出した腸を押し込むという状況をまったく見事に想像してしまい、別の意味で気持ち悪くなりそうだと思しながら、思いついてそろそろと、腕の力を借りながら頭の位置を起こして行っ

た。

ちよつと目の前が灰色になりかけたぐらいで、幸いなことに、めまいもなければ、急激な吐き気も襲ってこない。ほつと、安堵のため息をつく。動けるといふのは、この後、この事態がどう動くか見当もつかないけれど、少しは安心材料になる。座っている態勢にまで体を建て直すと、瑠璃子に向き合う。

「ね、ドラゴンちゃん、私も聞かせてほしいんだけど」

瑠璃子がニツコリと微笑んだ。

「え？」

「歩ちゃんって、どんなふうな学生さんしてたの？」

「……どんなって……」

「私ね、子供の頃のあの子しか知らないの。顔は基本的には変わってないし、ハルカ姐さんの歩ちゃんだっていうことで、私も変わらずに大好きなつもりではいるんだけど、それでも、大人のあの子にすごく困ってる。なんか、お酒飲んだり、あなたたちみたいな力ツコいい友達と普通に若い男みたいな顔してるのが、なんかすごい……困る。大体、何考えてるのか全然分からないし」

ぷつと飛竜は噴き出した。

「あいつが何考えてるかなんて、俺も分かりませんよ。まあ、もう一人、輪をかけてとんでもないのがいるから、まだ常識的だなと思わないでもないけど、それでもちよつといつちゃってるから」

「……いつちゃってるって、危ない人ってこと？」

「その逆……全然。頼りになるってことですよ。あの、瑠璃子さん、宇宙船航宙管制って知ってますか？」

「……知らないけど、なんかイメージは、あるような、無いような……」

「宇宙船って、パイロットが動かしてると思ってるでしょ？ まあ、それはそれで一面の真実なんですけど、本当に全てを支配してるの

は管制室を統括してるチーフフライトディレクターなんですよ。何もなければオートクルーズで基本的にどうとでもなるし、まあ、宇宙船のパイロット、正式にはコマンダーっていうんですけど、まあ、あんまり嬉しくないけど、本当のこと言っつて、人間が運転席にいらなくても飛ぶんです。あれ」

「そうなの？」

飛竜は、あの管制室のあの圧倒的な雰囲気、その最後尾で全てを俯瞰して、あときだけは全くもって神様然とした斉藤がいることを、安心感というか絶対の信頼感を、瑠璃子にどう説明したらいいか見当もつかなかった。

「学生時代、歩は管制技術科のいわゆるエースで、そのCFDだったんです。だから、瑠璃子さんのに分かりやすく言えば、管制組のアタマって感じかな。一応、俺は船に乗る方でコマンダー、あいつらから運転手さんって呼ばれてる立場だったんですけど、やつらタワーは俺たちにとっては、命綱なんですよ。神様みたいって言ってもいいかな。それで、何ていうかな、何かとんでもない事件があって、生還できないようなことになったとして……、管制室のCFDシートに歩がいるときだったら、俺は、まあ、しゃあないかって、成仏できるような気がしてるんです」

「……成仏って？」

「うん……と、他の顔が座つてるとき、ダメだったら、歩がいたらなんとかなかったんじゃないかっていう、怨念っていうか、そういうのが幽霊みたいになっちゃって残っちゃうと思う」

「で、そこに歩ちゃんがいいたら、迷わず成仏できるの？」

瑠璃子が不思議そうになる。

「奴がいてダメだったら、そこに誰がいてもダメだったろうなって、きつと思う……」

瑠璃子の目がちよつと大きく見開かれた。

「それって、もしかして、すごーく、すごーーく、最高級の信頼って奴？」

少女がそうするように、大きく両手をいっぱいに広げながらそういった瑠璃子に、飛竜はちよつと照れ臭そうに笑って頷いた。

「CFDシートにいるときだけ、ですけど……ね」

「……じゃあ、普段は？」

ちよつとだけ奇妙に間を置いてから、聞いた瑠璃子に飛竜は迷わず言った。

「閻魔様に、舌べる五枚ぐらい減らしてもらってこいって、感じかな」

* * *

突然、二人きりで放置されていた部屋の扉が開いて、いかにも、そのスジの人間ということが分かる男たちが三人入ってきた。情けないことに飛竜は一瞬心臓が踊ってしまったのだが、傍らにいる瑠璃子はそよとも揺るがない。樺崎が、前に言うに事欠いて瑠璃子を――頭の足りない分が色気にいつているような――と評したが、色気だけでなく、肝の座りも随分いいようだ。

飛竜は目立たないように薄い息づかいで深呼吸をして、己を落ち着かせようとした。

瑠璃子がチツと舌打ちをしたのが聞こえた。

「誰かと思ったら吉岡じゃないの」

ぎよつとして見ると、瑠璃子が鼻から息を吹きながら、吐き捨てるように言った。

「まあまあ、秋篠さん、そんなふうには顔を歪めたら、せつかくの別嬪が台無しだ」

吉岡と秋篠に呼ばれた男がにやにやと笑って続けた。

「……そいつが、あんたんとこの跡取りかい？ 森本なんか似てねえな、随分立派なナリの若造じゃねえか……」

「何度も言ってるでしょ、顔、性格、性根ともに不自由な癖して、耳も悪いの？ 四重苦までいってるなんて恐れ入るわよ。でもお生憎だったね。この子は、うちの斉藤のただのお友達。斉藤本人は茂さんにもつと似てるわ。それに、百歩譲って本人だったとしても、斉藤歩は堅気^{かたき}モン。極道の跡継ぎなんかじゃないよ」

顔、性格、性根が不自由な……という、非常に身も蓋もない憎まれ口に、飛竜は、あの斉藤の弁舌が鍛えられた環境をはしつと理解することができた。あの、ぽんぽんと次から次へと澀^{よむ}むことなく出てくる斉藤節、非常にひん曲^{たど}がったものの譬^{たと}えは、この瑠璃子さん仕込みで間違いなさそうだ。

「瑠璃子さん、その挑発しない方が」

飛竜がすっかり口を挟むと、それに倍する量が瑠璃子の口から溢れ出た。

「事実を並べてるだけよ。どうせ日常生活の九割を超えて吼^ほえてるしかしてないんだから、挑発なんかしたって、ションベン引っかけるほどの意味もないわね」

瑠璃子が言うように、人間構成要素の三重苦にプラスして、耳も悪くて、殆ど吠^ほえっ放しの狂犬野郎なら、拉致されているという、か弱い立場で挑発するのは勘弁してほしい。飛竜は瑠璃子の肩に手を置いて恐る恐る言った。

「話を聞くぐらいは」

「話っていうのはね、人間同士でするもんでしょうが。こんな、宇宙人とマトモに意思疎通しようと思ったら、テレパシー使える超能力者を十ダースほど連れてきたって間に合うかどうか分からないわよね」

瑠璃子が尖る。

「吉岡さん。この女、絞めちまわないとおとなしくありませんぜ」

一人の男が言うと、吉岡と呼ばれた男は手をヒラヒラ振った。

「秋篠の姐さんは、絞めたって静かになるもんか。小杉、どうだ、お前の覚えてる森本のガキってのは、こんな面だったか？」

一番最後に部屋に入ってきて、飛竜をじろじろと見ていた男が、そう言われて首を振った。飛竜がその言い方に、何となくぞわぞわする。この男は、斉藤のことを知っているのか？

「……別人だ」

短く男が言う。その短い言葉に、底知れない闇のようなものが否応なく染みついてるのが分かる。こいつは、斉藤を知っている……。

「十年もたてばガキは変わるだろう。よく見る」

小杉と言われた男はかぶりを振った。

「ガタイがでかくなって、顔だってゴツクなる。特に野郎はな。お前が知ってるガキに十年足しやあ、こうなっても不思議はないだろうが。よく見るんだ」

「あのガキなら、十年、二十年たったら余計に森本に似てるはずだ。こいつは違う。吉岡さん、あんたんとこの若いモンの失態だ」

「おい、^{かしき}榎木……本当に別人だそうだ。この失態、どう繕^{つくろ}うつつもりだ？」

低い声はぞつとするようなオドシが入ってる。

「斉藤歩じゃねえなら、用ナシ……ってことで、ちゃんと処分しますから、で、今度こそ、斉藤歩を連れてきます。それで、……それで何とか勘弁してくださいよ。吉岡さん……」

ちゃんと処分……って、オイ、冗談じゃねえ。飛竜は真面目に心臓が痛くなりそうだった。小説だとか、映画とかだと、これは画面の後ろをわきやわきやる一山幾らの雑魚キャラが、出てきたと思ったら、あっさりと血飛沫あげて消えてくってアレでしょうか。

瑠璃子が飛竜をかばうように前にふさがった。

「うちの斉藤をバカにしてる？ あんたなんか捕まるほどマヌケじゃないよ」

「じゃあ、お前さんたちは大間抜けって認めるツちゅうことだな」
吉岡の言葉に瑠璃子が大袈裟肩をすくめて見せた。

そのとき、吉岡の携帯がけたたましい音を立てた。瑠璃子たちにもちろん断りなど入れずに電話に出る。しばらく、なにやら向うの話を吉岡は聞いていた。『何イ』とか『本当か』などという合いの手だけでは、何を話しているのだからまったく見当もつかない。

「おい、そのガキ」

いきなり吉岡に言われて、飛竜は『おれ？』と聞くように自分を指さす。

「お前名前は、霧島飛竜……とかいうか？」

イエスと答えるのも、ノーと答えるのも、微妙に躊躇^{ためら}われる聞き方だ。

「ハイかイイエしかねーだろうが、この場合っ、ごらあっ」

吉岡が飛竜の目線の高さにあったテーブルをガツンと叩いたので、すっかり飛竜は頷いてしまった。呆れたというように、横目使いに瑠璃子に睨まれたけれど、こういう修羅場というものには全く慣れてないのだから、大目に見てほしい。

「榎木、総合端末起こせ」

「へ？」

「おら、さっさと起こせ。こいつを読み取らせろ」

普通の家庭でありがちな、壁面モニターが総合端末の画面にリンクしているタイプらしく、無機質な壁紙に少しノイズが走ってから見慣れたネットのブラウズ画面が立ち上がる。吉岡の携帯端末が読取機の上に置かれると、検索をしているゲージがつつつと動き、一つのサイトが立ち上がった。

「……げ」

飛竜がカエルがつぶれたような声を立てる。

（目が腐る……）

多少、見境なしの傾向はあるものの、真っ当な嗜好の持ち主であることは間違いない飛竜には、勘弁してくれな映像だ。マッチョな雰囲気がむんむんと立ち込め、汗と体液が湯気を立ててるような、自分たちのスバライシ楽しみのご報告を、映像でする場所のようだ。いわゆる男性同性愛嗜好者のパラダイスで、しかもSM系にしか見えない。

「頭痛い……」

隣で瑠璃子がふんと鼻息を荒くたてる。

「何のマネよ。あんたがそういうのスキなのは知ってるけど、オカズで興奮してからこの子に手え出そうっていうの？」

飛竜は聞くんじゃなかったと心から思った。瑠璃子がこの吉岡に

容赦がないのは、どう間違っても女の自分には害がないと確信してのことなら、なるほどとは思っけれど、そうになると、自分はそういう意味での身の危険も感じなければならぬのだろうか。

「検索ワード……『500億ユニバ』って……なんだそりゃ」

檜木とかいう自分をどうやら斉藤歩と間違えた間抜けが、検索ワードを打ち込んでクリックすると、一つの画像だけの表示がされた。

「……あ……歩？」

つい、飛竜の口から、言葉が漏れた。

「……どう……して？」

傍らの瑠璃子がつぶやく。見慣れた造作のその顔が苦痛に歪んでいる。顔が腫れ上がって、縋れたシャツに血の汚れがあるところを見れば、呵責ない暴力が斉藤の自由を奪ったことは疑いようがない。本人の意志とは関わりなく、カメラの方を向かされたのだろうか。ゴツイ手が斉藤の顎を掴んでいる。奇妙に捻じれた肩の角度を見れば、後ろ手に縛られるか何かしていることは疑えない。

「……こっちが斉藤歩だ。虫酸が走るぐれえ、森本に似てきたと思わねえか？」

小杉とかいう男が楽しそうに保証した。

「いい顔だ。ゾクツときやがる。森本にもこんな顔させてえよな……」

その声を聞いたとたん、飛竜の隣で瑠璃子の顔が、鬼のような形相になった。

「命拾いしたな、霧島の坊や。どうやら、お前さんを攫さらってギリシマから500億せしめようと考えてた奴がいるみたいだぞ。こい

つま可笑しいや。檜木の阿呆は、そいつの目の前で、お前をかつさらっちまったと、そういうことらしい……。お前を渡せば、どうやら斉藤をくれるって、またどのどいつか知らねえが、随分きつちり調べたもんだな。ふん、美味すぎて冗談みたいな話だ」

飛竜は今度こそ、かあつと頭に血が上っていくのを体感した。握りしめた拳がふるふると怒りで震えてくる。そう、もちろん自分は怒っていいはずだ。飛竜は思う。

自分には、徹底的に怒る資格がある。人違いだって説明してるのに、頭ぶん殴られてかどわかされる。キリシマの息子だからって500億なんて法外な金額を奪おうと考える奴がいる。しかもそいつは、俺をまだ持つてもないのだ。

頭は十人がまとまって掛かっても太刀打ちできないけど、戦闘能力的には0.5人程度の人間を力づくで支配している外道がいる。まったく、とことん、月ってやつは一から十まで気に入らない。絶対に自分に恨みでもあるに違いない。行きずりの人間を崇^たりやがって平然と白く輝いてるこんなところなんか、大の大大の大っ嫌いになってやる。

6・常識人は推理した

三雲はエアロバイクをこいでいた。心拍数があがり、呼気とともに体内窒素が抜けていくよりも素晴らしい勢いで、どんどん不機嫌ゲージが上昇していくのを感じていた。

（あの野郎、最近、どうにもふやけてやる）

あの野郎とは、もちろん霧島飛竜のことだ。三雲が彼のことを、何だか日本人らしくもない「キリー」などと呼び出したのは、まだ飛竜が小学生の低学年ぐらいのときだった。そのころは三雲もペーペーは脱したかしないか、まだまだ若手と言われる頃で、シフトがないときは、よく飛竜のお守りをさせられたものだ。

シャトル打ち上げ基地では、不慮の事故に備えて、退避壕トレンチというものが発射台を放射状に取り巻いて幾つか作られている。ふと見えなくなったと思ったら、塹壕ざんこうみたいな外見をした、そいつに――流石に至近距離にあるものはなかったけれど――潜り込むのが大好きというところでもないガキだった。

もともと家族企業みたいな色彩が濃い霧島運輸では、創業者の同世代、つまり、三雲よりちよつと上の世代には、現場で実際に操船に携わっている者もまだ珍しくなかった。バージ（舢）シャトル・ライダーの大先輩として三雲も世話になった覚えがある霧島の現会長の従兄弟、秋庭という男が、とにかくシャトルの発着を見てればご機嫌な飛竜を連れて遊びに来る常連だった。オーナー一族でもあり、引退したとはいえ古株のライダーで、古参連中も頭が上がらない秋庭に、「三雲、こいつをちつと見てくれ」などと頼まれれば、断ることなどできようはずもない。けれど、飛竜は、とにかくシャトルが見えるところにさえ置いておけば静かなのだから、手も特別

かからなかった。

三雲にも覚えがあるけれど、男の子というのは、こういうゴツイ機械にわけもなく惚れたりするものだ。三雲の友達の中には、工事現場を見ているのが好きで土建屋になった者もいるし、宇宙コロニー建造に魅せられて、そいつに関わる仕事についた奴もいる。

あの頃の社長、現在は霧島運輸の会長として居すわっている皆から「おやつさん」と呼ばれる霧島晃は、飛竜が生まれるまでは子供は女の子ばかりだった。

当然、誰もが皆飛竜少年を、キリシマのおやつさんの跡取りと見^み做^なしていたし、危ないことと邪魔なことさえしなければ、キリシマのヤード内であるかぎりには、どこにしようとも誰も咎め立てしなかった。

ただ、おとなしくしているからと油断をしていると、ライダー溜まりを抜け出して、発射の順番待ちをするレーンに待機するシャトルの間近かまで侵入してたりするのだから、そういう意味では手をかけさせられた覚えもある。

当時、まだ嫁さんもらっていなかった三雲は、飛竜に「おつちやん」と呼ばれるのが実は面白くもなかったのだが、まあ、オーナのガキに、そんなことでいちやもん付けられようもなく、そのまましておいたら、あんなふうにすっかり大男に化けちまってからも、「おつちやん」のままだ。

「でかくなったらシャトル・ライダーになる」というのは、そのころの飛竜の口癖で、みんな「おう、待ってるぜ」なんて言いながらも、この少年が本当にライダーとして仲間になるなんて思ってもいなかった。

本当に飛竜はデカくなった。あのころは、片手で捕まえて、肩に乗せてやることも簡単にできたのだ。

そんな飛竜がどっから見ても立派なガキンちょのときの、とある日。いつものように肩に乗せて、シャトルまでの視界を確保してやっていた三雲に、突然聞いてきた。

「オンゾーシってどういう意味？」と。

首を傾けて飛竜をみると、いつになく真剣な表情をしていた。三雲は何だかその一生懸命さにあてられて、つい真面目に答えてしまった。

「霧島運輸の跡取りってことだな。ま、お前は次期社長だろ」

そのときの飛竜の怒ったこと。今、思い返しても可笑しくなってくる。

——ボクは社長なんかになるもんか。ライダーになるんだ。

——じゃあ、誰がおやつさん継ぐんだ？

——松ねえ。

飛竜はまったく迷わないで答えた。

——そうか、まあ、今はそういうことにしておくか。

——今は、じゃないよ。絶対なるんだ。

バージ・シャトル・ライダーなんて格好よく呼ばれようが、所詮は厳しい現場仕事にすぎない。給料はもちろん地上勤務や宇宙勤務に比べればかなり美味しいけれど、その二つの重力圏を行き来する肉体的なハードさから、現役で居られる期間は両者に比べて落ちる滅多にはないがたまに起きる事故では、死者が出ないなんてこともない。そんなわけで世間一般では、人間がするに不向きな仕事として、完全にオート化しようという動きすらある。まともにソロバンを弾けば、こんなの誰もやりたいとは思わないはずなのだけれど、やっぱり飛竜や自分のように、ただ宇宙へ飛び出して、母なる大地

に帰ってくるという単調なことをやりたがる人間は後を絶たない。

言葉通り、飛竜は高等基礎教育を卒業したときに、操船学校などにいききたいなら学費を出さないとまで言った晃社長に肩すかしをくらわせて奨学金を取って進学してしまい、ついでにあのNexGas^{ネックスキ}s、極東アジア国でも屈指のレベルの操船学校で、フライトレベル評価Sという最高ランクを獲得してきた。

もちろん、厭味にも一般入試枠で、しかも学校の推薦状を持って霧島の人社試験を受けに来た飛竜と、面接でがつり再会したとき、おやっさんが頭から蒸気を噴き出して、見事な茹で蛸なったそうだ。「オマエなんか誰が採用するか」と息巻いた晃に、社長の松姫——通称ヒメ——は、NexGasのS評価の推薦状を持つてる人間を不採用にしたら、二度と有用な人材を紹介してもらえなくなるけど、それでいいかと、凄んだらしい。

なるほど、NexGasのS評価は伊達や酔狂や縁故でもらえるものでない。飛竜のフライトセンスは新人としてはまったく悪くない。何よりも心配したような、霧島のオーナー族の一員であることを盾にとつて、偉そうに振る舞うところが微塵も見えなかったことが三雲を喜ばせた。陽性で一本気で曲がったところのない、とにかくシャトルが大好きという、シャトルに乗ればそれで幸せとというのが疑いようもない新人で、ガキのころの飛竜を知らない中堅どころのライダー連中からの評価も、今までのところ決して悪くない。

三雲としては、飛竜に馴れ馴れしく振る舞われたら、正直扱いに困ると構えていたようなところもあったのだが、それは杞憂^{きゆう}にすぎなかった。ライダー溜まりで一緒になるときも多いが、他の新人がするのと同じ、ごく控えめな態度を崩さなかった。

そこまではいい。完璧だ。文句も「も」の字も言えやしない。

ただし月に来る前までは、だ。

なんだあいつは。まず、月に来るのを嫌がっていた。大体が、レディ・サヤコの尻撫で撫でにしたって、もともとはおやつさんのオヤジさん、霧島昇の失態がスタートなのだ。他のだれが『いやだ』と言おうと、霧島看板を背負っている飛竜に、嫌だと贅沢を言える権利なんかあるもんか、と、やはりレディのお世話は嫌だと思っっている三雲は思う。自分たちはシャトル乗りなのだ。

月までは飛竜は素直に來たは來た。けれどその後は最低だった。どこからどう見ても、嫌々やっているのが丸わかり。仕事は荒いし、いい加減だし、作業の終わりを告げるとそそくさとばかりに逃亡する。最初から余りに目に余るやりようだったにも関わらず、日を追う毎に酷くなる。

大体、月に來てから、あいつは、どうもよからぬ連中とつるんでいるらしい。その筋もんにあからさまに守られているような変なのと、よく飲みに行っているようなのだ。友達タチは選べと昔から言っているのに、まったく人の話なぞ聞いてないっちゅうことだ。

三雲の我慢の限界がようよう突破したのが昨日のことで、ちよいと厭味を言ったら、本当に久しぶりで「おっちゃん」ときやがった。何かしゃべりたそうにだったけれど、そのまま目を逸らしやがったからますます腹が立った。

殊勝にも、「ごめん」、「気をつける」と言っただから、まあ、もうちよつとだけ様子を見てやるかと、無理くそに腹立ちを納得させたのが、他でもないつい昨日だ。24時間丁度まえ。ホウキを持ってレディに乗っかりに行くこのタイミング。昨日の仕事はちよつとはマシだったけど、それだって、それにしたって、というしょもないという状態であることに違いはない。

今日も一発どやしつけてから仕事を始めるしかない、拳に息を吐きかける勢いで來たものの、今日は姿形すら見えない。

——あの野郎、ふけやがったか！

三雲は心に決めた。社長に直訴する。あの野郎、ちゃんと反省して詫び入れるまで、霧島のライダー看板あげさせねえ。

そうは思っても、やっぱり飛竜は可愛い昔馴染みだ。言い訳があるなら、聞いてやらなくもない。今日は、昨日飲みすぎて寝坊しているだけかもしれない。（寝坊で集合に遅れるなんぞ、それこそライダーとしては致命的だけど）あわてたような、申し訳なさそうな困ったような顔が、ひよっこり入り口に現れるかもしれない。

三雲は、マスクを着けた状態で、エアロバイクをこぐというプレブリーズ運動をいつものようにこなしながら、目の端だけで入り口をちらちらと何度も睨んだが、別に扉は扉のまんまでそよとも動かない。そのたんびに舌打ちがつついっ出る。

何百回目かで入り口を見たとき、丁度ドアがしゅるんと開こうとする瞬間だった。

「馬鹿野郎っ。今何時だと思ってやがるっ」

三雲は叫んでから力が抜けた。そこに立っていたのは、霧島のバツチ持ちなのは間違いないけれど、三雲は名前すら知らない事務方の若い衆だったからだ。

「あ、すみません、間違えました」

謝って、やっぱりギリギリと腹が立つ。飛竜がちゃんと来ていれば、こんなふうには他人様を頭ごなしに怒鳴りつけてしまって、あわてて謝る必要なんてなかったのだ。

「三雲さん、ちょっといいですか。あの、大変なことが……」

向うは三雲のことを三雲と認識しているらしく、ちゃんと名前を呼んでから、誤ることなく三雲の方に向ってきた。

「大変？」

イライラの所為で、耳に聞こえた話しが、まっすぐ理解できない。阿呆のように聞き返した三雲の耳に、更なる理解不能な単語が飛び込んできた。

「警察の人が、お話聞きたいって来てるんです。すぐに来てもらえませんか？」

三雲は、ケーサツという単語が「警察」という意味で理解できるまでにたっぷり十秒以上は時間がかかった。それから、徐に確かめる。

「警察？ 俺になんで？」

「御曹司が誘拐されたみたいなんです。ヒメんとこに500億払うようにって脅迫がきてるらしいんですよ。で、マスコミとかネットとかにも、犯人が同じような犯行声明出してるらしくって、警察が昨日のキリーちゃんの行動を当たってるらしいんです」

500億というと、大体シャトル2台分ぐらいの値段になる。確かにキリシマにとって、払えない額じゃあないだろうけれど、銀行と銀行で数字をやり取りするだけだから存在できる値段であって、身代金として現金でやり取りするには、ちよつと非現実な金額だ。犯人はどうやってそんな大金を、受けとるつもりでいるのか理解に苦しむ。

「どこのどいつだ、そんな間拔けた金額言ってくる奴は」

「どこのどいつか分からないから、警察が出てきてるんじゃないですか」

質問に即座に返ってきた答えを聞いたとき、三雲は何だか頭を叩かれている気分になった。

昨日、霧島飛竜キリーが何をしてたか？

そんなの、俺が知るもんか。

* * *

テレビの画面に映っているのは、冷静沈着で切れ者と評判の、はつきり言つて、三雲に言わせれば、おやっさんや、キリーちゃんよりよっぽどしっかりしている霧島松姫だった。松姫はいつもどおり、どっしりとした落ち着いた雰囲気をも崩さず、その表情も毅然とした中に、少なからず心痛が滲み出ているといった絶妙なものだ。

霧島松姫への記者会見はもう終わつたらしく画面が切り替わる。字幕も付いていたし、多分、少し前に録画された映像だったのだろう。変わった画面には、月に定期的にやってくる三雲に見慣れた風景の街並みが映っている。うわつついた感じのレポーターとやらが、事件の概要を説明しているらしい。こういう番組の例に漏れず、何度も何度も同じことをバカのように繰り返しているのだろう。

画面で図面などを使いながらけたたましく説明しているお姉さんによれば、昨晚、霧島飛竜さんは、ご友人とご会食をしていたそうだ。（飲んでただけだろうが）

その途中で、一足先に帰った知人の忘れものを渡しに店を出て直後に、何者かによってその知人とかいう女性と共に連れ去られたのが、複数の通りすがりの人たちに目撃されている。

その忘れものをしたという知人の女性とやらが、どうやら月に蔓延る諸悪の根源たるヤクザ連中の中でも一大勢力を誇る青山会の関係者らしく（何でそんなヤツと、我等の御曹司サマが知人でいらつ

しやるやら）、その女性を迎えに来ていたらしいカートを運転していた男性二人が、カートの中で頭を撃ち抜かれ（まったく、本当に月らしすぎる）搬送先の病院で死亡が確認されているそうだ。

最初警察は、最近は鎮静化していた青山会絡みの抗争であるとして、一般人が事件に巻き込まれて拉致被害に遭ったという判断の下、巻き込まれた一般人（つまり霧島飛竜のことだ）の保護を最優先に特別捜査本部を設置、極秘捜査を開始していたらしい。

ところが、まったく予期せぬ方向に事件は展開する。500億ユニバの支払いを条件に、霧島飛竜を解放するという脅迫メールが霧島本社の『お客様相談窓口』に送付され、ほぼ同時に、膨大な量の同じ趣旨の書き込みが、マスコミや主なインターネットのニュースサイト上にされたのだ。

丁寧にも犯人は、キシシマが500億払わない場合は、霧島飛竜にレディ・サヤコと心中してもらおうというのだ。ハツタリか真実かまだ分からないものの、既に、レディ・サヤコには爆発物を仕掛けであると。

もちろん、ルナマス・ドライバーシステム、レディ・サヤコは日本県を持ち物であって、キシシマという私企業の持ち物ではない。が、砂の加工輸出が基幹産業の月において、キシシマが500億を払わずにレディ・サヤコが破壊された場合、その経済界に与える損害は計り知れない。

霧島飛竜が誘拐されて身代金目的に脅迫されているだけならば、それは、トークショーの番をするのが人生の楽しみのおばさんたちに格好の話題を提供するだけだが、レディ・サヤコが人質であれば、月で暮らす日本県の住民には、生活に関わる大問題になる。

人命が関与する拉致事件とはいえ、事件のベースにあるものが、

暴力団の抗争であるのと、私企業をターゲットにした誘拐及び身代金要求事件であるのでは、捜査に関わる部署も、事件解決に際しての手法も大幅に異なる。立ち上げ直後、軌道に乗る前に方向修正を余儀なくされて、特捜本部は混乱を免れないらしい。

それと忘れてはならないのが、犯人がどういう属性の人間であるにしろ、既に二つも死体を作っているという事実だろう。被害者は二人ともが、頭部にそれぞれたった一発ずつの凶弾を打ち込まれて、ほぼ即死状態だったという。つまり、暴力団関係者であるなしに関わらず、犯人は殺人に対して、禁忌というものをまるで持っていないということだ。

ということは……、と、三雲は思う。松姫^{ヒメ}が素直に身代金を払ったところで、飛竜^{キリ}を無事に返してくれるつもりが犯人にあるのかどうか分からないということだ。非常に予断を許さない状況なのは間違いない。

「では、昨日もいつもとまったく変わらない様子で、飛竜さんは仕事を終わられたあと、宿舎になっっているホテルに向かわずに、そのご友人と落ち合われるために出掛けられたのだと、飽くまでも『思う』ということなのですね」

警察官というのは嫌らしい聞き方をする。映画やドラマなんかでも出てくるように、きつちりと二人組で、一人はメモを取りながらもう一人がまるで真相など知り得ない自分に、ネチネチと同じような質問を繰り返してくる。

「ということは、最近の飛竜さんの行動は、数日間続けて監視していれば、犯人にとってたやすく予測はついたと、こう考えてもいいでしょうか」

いつもとまったく変わらない、ということとはなかった。月にきてから、ずっとあいつは奇怪しかった。心ここにあらずという感じ。

それから、らしくもなく人をまつすぐに見ない。いや、そうじゃない。あいつは月に来るのを嫌がっていた。月に来てからずっと、何かにおびえるような……。仕事も手につかないような。

レディ・サヤコと心中させる。レディ・サヤコと心中させる。レディ・サヤコと……。

「あの、勘違いかもしれませんが……」
三雲はつい口にした。

スーツ姿の私服警官（多分、刑事さんというやつだろう）のペンが止まる。

「彼は、そもそも月に来るのを嫌がってました」

「……といいますと？」

「普段の彼は非常に真面目で、その、鬱屈したところのない人間なんですけど、月に来ること自体を、その、尋常でなく嫌がってました。ここに来てからも勤務態度も、なんというか気合が入らないというか、心ここに非ず^{あら}といった感じでした」

月そのものに来ることを飛竜が恐れていたとすると、とても彼の不可解な態度は説明がつく気がする。三雲にとっては、あの飛竜が霧島の御曹司モード全開で、下らない仕事を避けようとしていたというよりも、俄然、納得できる。

——おっちゃん。

と、言いかけたあのとき、飛竜は自分に何か言つつもりだったのではないだろうか。例えば、今皆の注目の対象である、レディ・サヤコに仕掛けられたという爆発物のことなど……だったとしたらどうだろうか。

あの時点で、飛竜はその晩に拉致されることを予感していたのではないか。あるいはそれとも、既に脅されていた……ということは、考えられないか？

青山会のチンピラを引き連れているような連中と付き合ってたのは、なぜだ？ 普段、レディ・サヤコへの荷役はオートメーション化されている。コンテナは全て検査装置でスキャンされるから、レディ・サヤコに爆発物を仕掛けることなど不可能だ。ただ、年に一度の煤^{すすはら}払いのときになら、霧島の微細重力下特殊作業士有資格者は、レディ・サヤコに物理的に接近できる。

万が一だ、想像だけの万が一だけれど、もし、飛竜が何者かによって、レディ・サヤコに爆発物のようなものを仕掛けることを強要されていたということは考えられないだろうか。

霧島の社員がレディの上のレゴリス掃除に行くときに、だれも不審物を携帯しているかどうかなど検査されたりしない。飛竜は本当にただの被害者なのか？ 本当に既にレディ・サヤコに爆発物が仕掛けられているのだとしたら、脅されるか何かしての上だったとしても、その実行犯が飛竜でないと誰に言える？

7・ バタフライ・ハグ

「お前何やってるの？」

タカが声を掛ける。

斉藤が、突然、腕を胸の前で交差させて自分の両肩を抱き、とんと叩き始めたからだ。ツタンカーメンの棺桶カバーのマネに見えるかもしれないが、そんなもんこのタイミングでやるものではないだろう。

「……バタフライハグ」

短く答えた斉藤に、タカは続きを言えというように沈黙する。

——バタフライハグってのは、セルフコントロールの技法の一つ。

激甚災害時なんかの避難所とかで指導されることもあるんだけどね。誰かがハグしてくれてる気分になれるし、ちょっとパニックを引き起こしそうなときとか、際限なく落ち込んでいきそうなときに、有効だって言われてるね。

答えたのは、斉藤ではなくて、萩原だ。
アゲイツ

「じゃあ、オレがハグする方が効果ある？」

問答無用とばかりに萩原の説明を聞きもせず、タカは自分を抱きしめている形のままの斉藤を思いつきりがっしりと抱擁した。ハグ萩原が女性には不似合いな豪快さで笑った。

——単純でいいね、キミ。自分を抱きしめられるってのは、自分を受け入れるってことだから効果があると言われるんだ。抱いてくれる人間が誰もいないから仕方なく自分を抱っこしてるんじゃない

よ。

「あ、そうなの。野郎にやって損した」

そんな言葉と共にタカの抱擁はあっさり解かれて、斉藤がちよつとだけむかついた。けれど、手足がどうしようもなく震えてくるのが分かるので、そのままの態勢を解くことはできなかった。斉藤は恐怖に支配されていた。手足の先からずるずると力の全てが抜け落ちていくような錯覚に囚われているほどに、ただ恐かった。

今までは無我夢中だった。とにかく、飛竜の今の命を確保すること。少なくとも今の段階での生死を確認することだけに気持ちが入っていて、とにかくその辺にあるものは何でも使ってやるという開き直りみたいな気分支配されていた。

けれど、生きている飛竜の動画を見たたん、襲ってきた安堵の中で、これから先に飛竜が死ぬようなことがあったら、それは間違いない自分のミスでしかないという事実^{すく}に心が竦^{すく}んでいた。飛竜を殺せさせないために、とにかく自分はこの状況を作り出した。

霧島に飛竜の映像が届いたということは、少なくとも自分のここまでの推理は外れていないことが証明されたということだ。瑠璃子と飛竜を拉致した犯人は、間違いなく自分を狙っていたこと。森本茂の居室の総合端末は盗聴されていること。そこまでは見事正解した。けれど、なぜ瑠璃子と自分が狙われたのか——森本の性格を知っていれば、ハルカの件を引き合いに出すまでもなく、森本への牽制にはなり得ないことは明白なのだから——分らない。

けれど、自分と飛竜を交換するという話し合いのテーブルに、向うが乗ってきたということは、少なくとも一歩前進に違いない。顔を出さないモグラを叩けないのと同様、見えない敵は殴れないのだ。

瑠璃子と飛竜を連れ去られた直後より、見えてきている事実は増えた。瑠璃子はともかく、少なくとも飛竜は死んでいない。

歩にそれ以上何かしてみろ、シャトルごと突っ込んでやるからな——と動画の中で叫んでいた飛竜は、血は取りあえず止まったように見えるけれど、頭部からひどく出血したらしいことがありありと分かるような状態だった。

動いていて、あの自分の写真に心底から怒っている飛竜は、間違はなく生きていた。そして、彼が生きているという事実は途轍もない安堵をもたらした。そしてそのことが、斉藤がこれより先に進まなければいけないという思いを恐怖で縛っていた。

今飛竜は生きている。だから、飛竜が死ぬようなことになれば、それはこの場を作り出した自分のやりようが全て裏目に出るからに他ならない。何もしなければ、少なくとも自分が飛竜に引導を渡したと思わないで済む。けれど、このまま途中で投げ出しても何も事態は好転しない。

——バタフライでどうにもならないみたいだね。

動かないままにいる斉藤を見て、萩原がぼつんと言った。

——怖いのか？

斉藤は自分の恐怖を否定したかった。けれど、手足は震えているのは誤魔化しようもない。

「みたいです……」

——まあ、正常といえばそうだけどね。大切に思う人の命がかかっているときに、恐怖を感じないなんてのは、はつきり言ってどっかが

奇怪しくなってるってことだからね。

（ちょっと情けないけどね）

そこだけ、萩原は心の中で付け加えた。

「だけどさあ、こいつが動かないと、事態も硬直しちゃうんじゃない？」

どことなくのんびりした口調でタカがいう。

「少なくとも、飛竜と歩ちゃんの人質交換オツファーにはオチをさつさと付けないと、向うのその気がいつまで続くか期待してる場合じゃない。仕掛けた以上は殴り合ってるってことだからね、動きを止めたら殴られ放題だ」

斉藤がぎりつと唇を噛んだ。

（タカ、お前、頼むから少しは俺を甘やかしてくれ）

そう思いながらも斉藤は泣き言を口にはせず、次の手を考えた。

萩原が保証してくれたように、怖いっていうのは、別に異常じゃない。怖いからって動けないってこともない。動く必要があれば、俺は動ける。

「……シャコさん。……松姫さん。犯行声明に……、飛竜の身代金をもらえない場合は……、レディを爆破するって……付け加えて」

斉藤が声を絞り出す。その様子を見て、タカはもうちょっとだけ肩をすくめてやれやれという具合になると、斉藤をもう一度ガツと抱きしめた。

「よしよし、ちゃんと動いてるな。よかった、よかった」

「バカにしてろ……よ」

本当に、こいつは基本的に野郎はどーでもいいと公言はするものの、結局はスキンシップ大好きなお子ちゃまが抜けてないのだ。

——斉藤。さつきから、何であなたってば、そうレディ・サヤコに拘こたわるの？

萩原が二人を無視してそう聞いた。萩原の疑問は、みんなの疑問だった。

「私……は、レディに拘こつてゐるんじゃない……ないんです」

斉藤が断固としてタカの抱擁ほどを解ほどきながら言った。

——というと？

萩原が畳みかけるように聞く。

「……月は何で普通に火薬をつかった武器が蔓延まんえんしてる……のか、わかります？」

「そりゃ、壁に穴があいた向うにも、空気があるからだろ？」
タカが即答した。

「タカ、正解。地面に……もぐったままのモグラは叩たたけませんよね……だから、ひっぱりだす必要があるんですが、その先は……インフレーター・ドームに……したいと、思ってるんです」

——ああ、なる……ほどね。

萩原も即座に納得した。銃火器を遠慮会釈なく使いまくれる環境と、構造物そのものを破壊した場合、攻撃者の方の生命維持にも直接被害をもたらすのでは、人的被害のレベルが変わってくる。

——それに、インフレーター・ドームはおたくらの施設ってことも、大きい？

萩原が言うのは、斉藤や高柳が軍人であることを指しているのだろ。軍の施設というものは、当たり前のことだが、中の構造について一般に原則公開はしない。どこにどうという設備があって、どう

いうふうな構造になっているのか、斉藤はともかく高柳は熟知している。階級レベルによって立ち入れない場所はあるだろうけれど、悪さをしているモグラを引きずり出す場所は、そんなにきわどいところである必要はないのだ。

もう一つの効能がある。警察の介入を排除できるということだ。月で悪人を逮捕しまくったら、町としての機能を維持できるだけの人口は残らないだろう。

毒を以て毒を制するのは、一面の真理であるから、仕掛けてきたのが森本の対抗勢力だとしたら、それを潰してしまうのは森本の一入勝ちを意味してしまう。このバランスのためには、適度に牽制し合っているぐらいで丁度いい。だから、飛竜と瑠璃子だけ返してもらえれば、ついでに一、二発ぶん殴ることができればいいのだ。壊滅させようとか、存在許すまじとやってしまつては、長期的に見て損失が大きすぎる。

もちろん、森本には命より大切なメンツがある。身内を虫けらのように殺されては、瑠璃子が無事に帰つて来ても「よかった、よかった」で納められないだろう。瑠璃子を迎えにきただけの人間を躊躇うことなく殺した人間は、それこそ引きずり出すつもりではいるけれど、それを森本の手になんて私刑に任せるつもりはない。徳永は多分、理論ではなく感覚で分かつてるだろう。ブルーマウンテンだけでも、百合園だけでも、ポストカードにはなっても景色にはならない。青山の麓に野百合が群生して少しは見られる風景であるのだということ。

それは多分、悔しいけれど、青山の森本と百合根の棗の共通認識だと思う。月に来てから、正規な仕事の片手間に、警察の記録をず

つと追いかけた。自分の記憶を求めるのを止めて、冷静な分析者として事件記録に向つてみれば、森本はハルカに死をもたらした人間を樺崎派に粛清させただけで引き、棗と全面戦争は起こさなかったという、ことの顛末てんまつを知っている。

大体、まったく考えなしに潰しあいをするだけ連中なら、これだけの影響力を持ち続けることは当然できない。暴力団だのヤクザだのという連中は、暴力という言葉を道具として持つことに禁忌を覚えないうことと、文書化された法律に従わなければいけないという規範を持つていないだけで、まぎれもなく人間たちの集団なのだ。人間なればこそ、それぞれに思いもあれば、心だつてある。損得勘定だつてしなければ生きていけない。

あれだけの人数を組織としてまとめていることでも明白なとおり、彼らには彼らなりのルールがあり、その中では真つ当な人間より、余程シビリアな規範に従つて生きている。

樺崎なんぞは、森本なんか間違つて惚れたりしなければ、こつちのサイド（堅気の世界）で生きていても大物になっていたことは間違いない。

森本茂。そう、ハルカも、樺崎も、カナタも、もちろん瑠璃子も、あの男にイカれている。樺崎だけでなく、青山の代紋を付けている男たちには、斉藤の目でみてひとかども一廉と評するに足るだけの魅力的な者が少なからずいる。それぞれが強烈な個性を持つ彼らに共通する唯一の事項が、例外なく森本に惚れぬいているということだ。

本当に忌まらしい男だ。カリスマと単純に言つていいのだろうか。あの男には、自然と魅せられてしまう男たちがそれこそ掃いて捨てるほどいる。なぜ、あれほどの男が森本の前で、思っていることをしゃべりだしてしまうのか、どうして、命をかけておしくないという気持ちになつてしまうのか。不思議でならない。

不思議なことに、その血を受け継いでいるたった一人であるにも関わらず、斉藤には森本の魔法がさっぱり効かない。圧倒的な自然

の景觀にわけもなく飲み込まれるようだ、思ったこともない。

それが単に、あのときの苦痛のすべてを「しかたない、済んだことだ」にされてしまった恨みなのか、単に多くの人から惚れ抜かれ、でも、それを当然のことと泰然として受け止めることのできる男に對する、子供っぽい焼き餅なのか。自分でも分らない。

警察のデータベースを周遊しながら、斉藤は自分の白く塗り潰された記憶を取り返すために、事件記録そのものに当たってみたい衝動にかられそうになったときもあった。けれど、恐怖の支配の方が断然強く、結局、そこにあるはずのハルカの遺体の写真や、検視解剖記録を見るのは、断念している。

今回の自分の情けない状態を見るに付け、多分、あのファイルは開けなくて正解だったのだ。

斉藤は、萩原の言葉に我が意を得たりという感じで頷いた。

「ええ、天敵がいることが、生態系のバランスを保ちますから……」

——天敵がなくなれば、異常増殖して自滅する。そこを待つというのは考えないの？ 空き地にやってくるのは、別の世界かもしれないよ。

面白そうに萩原が言う。

「神様の役割は、神様がすればいい」

斉藤が毅然とした口調でいうと、萩原は笑顔になった。

——身の程を知っているというのは、いいことだわ。

「常識がある人間なら、深層階と同じタイプの暴力が使えないだろ

うけどよ、向うさんがホンマものの真正の間抜けで、地下と同じことやらかしたら？」

徳永が言うのに、斉藤は首を振った。

「今回の犯人……頭が悪い人間だとは思えません」

「アタマは頭よくても、実行部隊に間抜けが居るって可能性は、ちゃんと押さえといった方がいいんでねーの？」

タカも懐疑的な方向だ。斉藤は苦笑する。確かに、そもその段階で自分と飛竜を取り違えているのだから、実行部隊に間抜けがいることは間違いない。

——おし、こんなんでどう？

突然、沖が割り込んできた。

『我々は少数企業の不当な利益独占を許さない。

霧島は広く社会に還元すべきである。

500億ユニバを用意したまえ。

支払方法は追って指示する。

霧島が利益の独占を続けるならば、

霧島飛竜はレディ・サヤコと心中してもらうことになるだろう。

我々の準備は既に完了した』

斉藤はため息を付きたくなった。大袈裟なことが大好きなシャコさんは、どうしても飛竜なんかにはシャトル並みの値段をつけたらしい。金額が大きすぎて、ここまでいくと犯人は真面目に人攫いしているのではなく、衆目を集めたい愉快犯に過ぎないように見えて来る。画面モニターに表示された文字を眺めて、斉藤はちよっただけ首を傾かしげた。

「なんか、霧島が悪徳企業みたいですね。これじゃあ」

敢えて、斉藤に任せて多くをしゃべらなideいた松姫が介入した。

——飛竜を助けるために動いてくださる方々の危険を少しでも減らすことができるのでしたら風評被害を被るだらう可能性ぐらいは、払うべき費用と考えます。

そのきっぱりとした物言いに、思わず徳永は微笑んだ。流石は霧島ぐらいの規模の会社を統率しているだけあって、女だてらに決断のしどころを心得ている。ごり押しというのは、無茶を承知で通すものだ。なかなか、この姉さんはオトコマエだ。

* * *

記者会見は、マスコミ各社の共同申し入れで、GMT（グリニッジ標準時）午前7時という早朝に行われた。

憔悴感をにじませながらも、毅然とした態度で質問に答える霧島松姫の姿は、見るものにある種の感動を与えていた。

「今は情報が少なすぎて、まだ皆さんの御質問に十分にお答えすることはできませんが、霧島の資金が、犯罪や暴力手段を躊躇うことなく使うことのできる者を潤すことは、断固として拒否すべきだと思っております。レディ・サヤコの破壊を臭わせた段階で、犯人の反社会性は疑い得ないと思っております。ただ、身内が直接、危険にさらされていることは、私ども霧島の者にとって、耐えがたい状況であることはお察しいただきたいと、お願い申し上げたいと思

います。犯人からの具体的な指示はまだないということだけお伝えして、今はお許しいただきたいと思っております」

モニターに映る松姫まつねえの思いは一面真実だろう。斉藤は思った。飛竜の身代金を要求したのは自分だけれど、彼が危険にさらされたままの状況であることは、まだ少しも好転していないのだから。

壁面モニターに映る、記者会見の様子を見ながら、犯人も多分これを見ていることを、斉藤は確信している。そして、斉藤歩の身柄を有している、霧島飛竜を欲しがっている者が、どういう行動に出るかを待っている。そう、待っているのだ。将棋やオセロと一緒に次の局面に進むには、こっちが動く必要がある。

この先の行動は、犯人がなぜ、自分と瑠璃子を狙うのかを、過たず見極めなければ決めることができない。長考しすぎる愚は分かっても、ここは考えどころだ。

「萩原さん」

斉藤がぼつつりと口にした。

――何？

「パンダのカラーリングのことですけど」

――また、パンダ？　好きね。

萩原が苦笑する。

「意味は絶対あると思うんですよ。人間の常識では計れない理由があつて、あの雪の上でも岩の上でも目立つ色になった。それが失敗じゃなかったのは、生き延びたという事実が示している。だけど、

それに整合性のあるストーリーを思い付けないのは、想像力と情報量が不足しているから……ですよね」

思考する事で冷静を取り戻したのか、松姫の冷静な振る舞いが影響したのか、幼子のような頼りないふうだった斉藤が、いつのまにか冷静と皮肉を取り戻していた。それを頼もしく感じながら、萩原は斉藤の言葉を先取りした。

——秋篠瑠璃子と斉藤歩を欲しがってる人間が、どう思っているのかを知りたければ、多分、何をしたいのかを分析するべきでしょうね。時間不足が忌ま忌ましいけど。

秋篠やタカのような人間と話しているときと違って、萩原の理論と理論が詰まって飛躍している会話は、斉藤には理解に苦しむ事もなく、苦痛でもない。むしろその快適な速度感が心地よい。

「……地下四階の……利権絡みとするのは、先走りでしょうかね」
ベースメンツベース

——あながち、そうとも言えないでしょうね。

8・真相は時として単純で

再び、瑠璃子と二人で、意識を取り戻してこのかた軟禁状態に置かれていた部屋に残された飛竜は、それほど豪華ではない、ソファと長椅子のあいのこのようなものに、体を投げ出した。

興奮して血が頭に上ったせい、生まれて初めて間近に見た火薬式拳銃というものの質量に当てられたせいなのか、それとも、強く殴られた頭が回復までは時間がかかるとあざ笑っているだけなのか――とにかく、銃で脅されて興奮が一気に醒めたたん、めまいを起こしたようにくらくらしてきて、体を起こしているのがしんどかった。

誘拐犯人たちが視界から消えて、かすかな安堵と共に横になると、腹の底から、ふうと、深く長いため息が漏れた。

「シャトルで突っ込むって、すごい個性的なオドシねえ、ドラゴンちゃん」

呆れたような瑠璃子の感想に、目を閉じたままで、飛竜は逆に質問する。

「……歩って、子供のころにも、攫さらわれて酷い目にあってるんではないね……、樺崎さんに聞きました」

瑠璃子は目を閉じたままの飛竜の顔をしばらく見ていた。飛竜の不快そのものといった顔は、ダメージを受けた頭が痛むからなのか、歩のあんな映像を見せられたことで心底腹を立てているからなのかよくわからなかった。

「月ってとこは最低だ……」

飛竜がほとほといやそうに、そうつぶやいた。

「樺崎は……どんなふうに？」

「別に詳しくは。酷い目に遭ったってことと、おふくろさんを目の前で殺されてるってこと……それだけですよ。半年以上って言うってたか、ずっとあの歩がしゃべらなかつたっていうのも……聞いたただけです。あいつはひと言だつてそんなこと……、いったい、どんな……。いえ、奴が話さないでいることを、あなたに聞くのはフェアじゃないですね。ただ、気を回しすぎかもしれないですけど、そんなことを経験してたら、あんなふうに自由を奪われて痛めつけらるのは、普通の人間がそうされるより余程つらいんじゃないかって、そう思ったら、めちゃくちゃ腹たつて……」

瑠璃子は飛竜の頭の方に僅かに空いていたスペースに、無理矢理尻を押し込んで座わり、飛竜の頭をもう一度ひざに乗せた。

「私は、あんまり……説明うまくないけど、ドラゴンちゃんは……ボ―エーホンノウによるニンチショウガイって聞いたことある？」

飛竜はちよつとだけ薄目を開けて、瑠璃子を見た。

「あの子……、覚えてないのよ」

「え？」

飛竜はとつさに言葉が出てこなかった。

「基本的に、あの子にとって、そここの三日間ってないの。それからその後の多分二、三か月もなくしたのと一緒に思う。あのとき、ずっとあの子の心の方を見てくれたお医者さんに言わせると、覚えていたら狂うしかないほどの体験だったから、忘れた……、ってことらしいわ。今はどうなのか知らないけど、あの直後は、記憶がどうやら襲いかかってくるみたいな感じで、本当にしょっちゅうおかしくなつてた。真っ青になつて歯をガチガチ言わせながら体中でぶるぶる震えてたりするんだけど、そのすぐ後にケロつとして自分が今の今そうだったことを全然覚えてなかったりするの。そういうののことを、確かボ―エーホンノウによるニンチショウガイっ

て言っただって」

余りの悲惨な状況に、飛竜は絶句したままでいるしかなかった。

「一番酷かった頃は、もちろんボロボロにされた体が回復してないときで、あのころは、しゃべらなかつたっていうより、しゃべることとを忘れてたって感じだった。ずーっと脱け殻みたいに寝てるかと思ったら、次の瞬間に声も出さないで、さっき言っただけになっちゃって、もがいてるの。心のお医者さんが言ってた。もしかしたら、歩ちゃんは、あの三日間の間、暴力を受けてる間中ずっと声を出さなつて言われ続けてたのかもしれないって」

瑠璃子は飛竜の視線に気付くと、それを受け止めてちよつと励ますように微笑んだ。

「安心していいよ、ドラゴンちゃん。歩ちゃんは、あなたを信じてなくて黙ってたんでも、あなたたちに気遣いさせたくなくて黙ってたんでもない。単純に、ちゃんとしゃべれる形で覚えてないから話せなかつただけ」

飛竜は却つて混乱した。樺崎から、斉藤の過去にあつた悲惨なできごとを聞いたとき、あいつが何もしゃべってくれなかつたという、紛れもない事実、どうにもならない脱力感を覚えた。そして、どうやら斉藤には自分たちをまつたく頼る気がないらしいことに怒った。信頼されていなかったのだという事実が、自分にはすごく悔しくて、そしてそのことが寂しかった。あのときの無防備な酔っ払いモードは、斉藤が自分たちの前でなら弱みを見せることができるのかも思わないでもなかつただけで、あとにも先にも、あのときのただの一度だけ。あとはいつものまんまの、見慣れてスカした斉藤であることに、どこかで苛立っていた。

全部、勘違いなのか？——飛竜は混乱した頭で必死に考える。

子供の頃のことを見事に話題にしてこなかったのは、自分やタカのことを頼りにしてないからでも、あいつが孤独でいるつもりで周囲を拒んでいたからでも何でもなく、単に、あまりに悲惨なできごとがあいつから過去を奪ってしまったから、できなかったただけなのか。だとしたら、自分は随分理不尽に、腹を立てていたことにならないだろうか。

「あの子ね、ハルカ姐さんのことも、本当にうつすらとしか覚えてないみたい。ちゃんと思い出そうとすると、ついでに最後の別れも思い出さなきゃ、記憶って納得できないじゃない。だから、ムサクイのコイっていったと思うんだけど、無意識が積極的にここでのことを思い出すのを避けてるんだって。理性的に突き詰めてあのことを振り返って、狂わないで済むようにするには、幸せだったこともついでに忘れるしかないんだって……寂しいよね。ハルカ姐さんは本当にステキな人だったのに、歩ちゃんに思い出してももらえないでも、ハルカ姐さんだって、思い出すことで歩ちゃんが生きにくくなるぐらいなら、きれいさっぱり忘れられても怒らないと思うんだ。だって母親だもんね。……あれ？ ドラゴンちゃん、どうしたの？」

斉藤の表情は、いつも仮面の下で鈍く動いているように見える。どんなときだって、いつだって、笑うことも、怒ることも、控え目で、そんな表情の揺らぎが通りすぎてから、もしかして笑っていたんじゃないかと思いがたることだって珍しくない。

まあ、今では手にとるように分かる斉藤のそういう感情の揺らぎは、付き合いが浅い最初のころは、まったく分からなかった。少なくとも、奴が可笑しがってるのか不機嫌なのか感知するには、ナレというかコツというか、とにかく技術みたいなものがあるのは確かなのだ。

そういう斉藤独特のやりにくさは、彼が常に陽気なタカとつるん

でいるから、余計目立って、彼のとつつきにくい印象は強調されていたのかもしれない。ただ、何も考えずに、そういう性格、性分、個性なんだろうと、ずっと思ってきた。だけど、あいつは……。

あの怒濤のおしゃべりの奥にもしかしたら何もないんじゃないかと疑わせるぐらいに、冷たく見えることも多々あるけれど、斉藤というのは実際のところ鬱陶しいぐらいにあったかい奴じゃなかったか？

いろんなことに気が付いちまうから、それで、ちょっと手を添えれば上手くいくなんて思っちまうと、気づかわれている方に頼まれもしないのに、迷惑を顧みず、動いちまうようなところがある。典型的なおせっかい。

あの生真面目を絵に描いたような管制の連中から、よせられる信頼が絶大なのだって、やつが結局、いつだって全身全霊の集中力を注ぎ込んで、飛んでる人間たちが当たり前に帰ってくるために手を抜かないからじゃなかったか？ 自分のためでなく誰かのために、いつも当たり前前に最善を探る姿勢に嘘がないからじゃないか。

瑠璃子の言うほどの経験をしてきて、樺崎が言ったことが真実なら、瑠璃子さんやカナタさんたちからも望んでいなかった形で離されて、それでいて、性根の部分で腐ることもひねる事もなく、心のだ真ん中のあったかいものを失くさないでいたって、それってもしかしてちょっとした奇跡じゃないか？

上手じゃないかもしれないけど、ちゃんと微笑んで、ちゃんと怒れる。斉藤はどこも壊れてない。それって、ものすごいことじゃないか？

「どうしたの？ ドラゴンちゃん、何か泣いてるみたいに見えるよ」

瑠璃子に指摘されるまでもなく、飛竜はなんだか泣きたい気持ちになるのを、抑えることができなかった。だからといって、ここで素直に泣いたりしないのは、今の斉藤が置かれているだろう苦痛を思えば、そんな感傷的になっている場合でないという自覚があるからにすぎない。

何をどうやったら、自分は斉藤を助けることができるのだろうか。情けなくも自分も自由を奪われているこんな状態なのだ。あのときもそうだった。前も自分は何もできずに、ただ、傍観していただけだ。

役に立ちたい。そういう気持ちは、強く激しく飛竜の腹に湧いてくるのだけれど、それをどうやって形にしたらいいのか、まるで思いつかない。自分は本当にバカだ。スター・斉藤に走る方向を教えてもらわなきゃ、どっちに向って突っ込めばいいのか、全然見当もつかないのだ。

「斉藤のオヤジさん、森本さんでしたっけ……」

「あら、またその話？」

飛竜が気を取り直して、バカなりの善後策を構築しようと、情報収集を再開した。

「ちよつと違うんですけど。瑠璃子さんが吉岡って呼んでたあの男、森本さんをどうしようっていうんですか？」

瑠璃子が噴き出した。

「吉岡なんかに、茂さんをどうこうでできるだけの器量があるわけないじゃない」

「なんかに……って」

「あのね、茂さんはみんながきちんとした正業を持って、自立する

べきだつてポリシーで、青山会の連中がちゃんと食いつばぐれないようにって睨みを利かせてる。そりゃ、道理を口で説いて分かんない連中と張り合うんだから、荒っぽいことも当然方便として使うけど、基本は青山は合法的な範囲でシノギを通して自立してる。堅気さんが自分の手よごしたくなくて、何とかしてくれて頼ってくるんだつて珍しくない。やつかいでどうしようもない問題が起こったとき、皆さん、こそつて茂さんを頼ってくる」

うん？ 飛竜は何かどこかで聞いたような気がした。

「めんどくさいなんて、言わないで、何とかしてみるって、茂さんすぐ安請け合いしちゃうのよね。で、実際に言った以上、最後までちゃんとやってのけるの。それで、いつも、忙しそうにしてるけど、全然へこたれないんだよね。なんだかんだ言つて、結局頼られるの好きなんだよね。ほんと、バカで見てられない」

瑠璃子さんみたいな女がバカだと言うんだから、多分そういう意味での人の良さは、天然なんだろう。本当に、いつかどこかで見たことがあるよく知っている誰かとかぶる。

思い切り感慨深くなっている飛竜にはお構いなしに、瑠璃子は続けた。

「青山の直系で、ウチの代紋堂々と付けられる人数が何人居ると思う、ドラゴンちゃん。ざつとだけど四百団体、構成員は二万を超えてる。それだけの数をちゃんとただ食べさせるだけじゃなく、いいもんを食べさせていくのに、カタギさんにまったり寄生してるだけでできるほど世の中甘いもんじゃないわ」

「……何か、ヤクザ屋さんって、外からなんとなく持つてるイメージと……随分違うんですね」

飛竜の間にあい手に瑠璃子は軽く頷いた。

「世間さんはどう思ってるか知らないけど、世の中で何が流行るかを見極めて、常にそれをいち早く抑えていくのがアタマの腕の見せ

所。茂さんは、月が儲かると踏んで、誰よりも早く月の土地を買い始めた。情報は持つてるだけじゃお力ネにならない。ある程度、見定めたら冒険も賭も必要。ただごとでなく大きな乗るか反るかのバクチを涼しい顔してやってのけるから、かっこいいんだよねえ……茂さん。これだけのテがそろったら、打って出ないなんてありえないって、すいっと気負わずにGOだしちゃうの」

「步って、やっぱり、森本さんに似てるみたいですね」

飛竜がちよつと感慨深げになる。

「あら、ここまで露骨に茂さんヨイショしてても、歩ちゃんが似てるって、そういうの？」

瑠璃子が面白そうに言う。

「まあ、さっきも言ったでしょう。瑠璃子さんの分かりやすく言うなら、歩はNexGas第一管制会の斉藤会頭だつて。管制の連中の、斉藤への入れ込みぶりって、ものすごいから……。あいつ自身、星型のエンブレムが入った青ジャケ着て第一管にいたときは、オーラみたいなの放ってたし」

「歩ちゃんの学校の管制組って、代紋、星型なんだ」

くすくすと面白そうに瑠璃子は笑い声を立てた。

「でも、これで謎が一つ解けたわね」

「謎？」

瑠璃子が神妙な顔つきになって頷いた。

「茂さんって、本当に男殺しなのよ。何でもかしくないけど、『あら、あの人もなの？』ってぐらに惚れ込まれちゃうこと珍しくないのよ。だけど、息子の癖に全然歩ちゃんって、茂さんに対して、冷たいぐらい、すごいとかカッコいいとか思わないみたいなのよね。フアザコン化するのが普通だと思うのに、茂さんのフェロモンに、歩ちゃんがやられない謎について」

飛竜がこの話の勢いのどこに、そんなものの解答が示されていた

のか、記憶をまさぐる。

「どうしてですか？」

あっさりと降参した飛竜に、瑠璃子は自慢たっぷりの口ぶりで言い放った。

「毒蛇は自分の毒では死なない、スカンクは自分の臭いで倒れない……」

そこかよ。飛竜は真面目に聞いた自分が悲しかった。

「で、話を戻すけど、受け専のモーホー野郎なんていう、趣味で差別してるんじゃないくて、器うつわのでかさの違いで、吉岡には万単位の人間に見せるビジョンなんて描けるようなタマじゃないの」
ぶつと飛竜が噴き出す。

「う、受け専つて、あの人そつちなんですかあ？」

「そーよ。中年のスケベがいつだってヤルのが好きだなんて思ってたやアマイわよ、ドラゴンちゃん。吉岡がそうなのは、こつちスジでは有名な話。実際この喧嘩マチガイ仕掛けの頭アタマは別にいるんだろうけど、オモテ立って顔さらして来たのが吉岡で、実際安心したわよ。少なくとも、ついでにいただかれちゃう羽目にはならないで済むもんね」
道理で瑠璃子が派手に罵ったときに、吉岡という男は、暖簾に腕押しな態度を、あんまり堪え性がなさそうな見た目の割に保っていたはずだ。

「小杉つてのは？」

瑠璃子はひょいと首をすくめた。

「知らない。見たことが無い……分らないわ」

だけど……。と、その先を瑠璃子は飛竜に言うことはできなかった。小杉という男を瑠璃子は知らない。それがどうにも、瑠璃子を落ち着かない気分にした。あの男、百合根の系列に寄っているら

しいけれど、あの態度は吉岡と対等か上。ヤクザというのは、角突き合わせるために、ちゃんとお互いのことは、特に油断なら無い相手だと思えばこそ、徹底的に洗ってちゃんと上下の力関係まで含めて弁えておくものだ。

瑠璃子の知らない顔であるのに、小杉は斉藤のことをどうやら知っているらしい。しかも、あの頃子供だった歩を直接知っていたとは思えない。

——虫酸が走るぐらい森本に似てきたと思わねえか。

子供にするには以ての外ほかの鬼畜の振る舞い。ヤクザだって、いや、ヤクザだからこそ、犯罪そのものへの順列というか、優劣には誰よりも拘こたわるし、厳しく品定めされる。豆泥棒こたわ（強姦）は、刑務所ムシヨでだって一番蔑まれる犯罪の一つだし、それが抵抗する力がない子供相手だった場合は、ごみくず以下の扱いすらされなくても当然だ。吉岡が真つ当なヤクザなら、子供だった斉藤に不埒ふらちなふるまいをやらかした下種げすにデカイ面をさせておくはずが無い。

あれが、あの見たことがない男が、ずっと殺してしてやりたいと憎んでいた犯人のはずが無い。

………だけ。

——似てきたと思わねえか。

あのときの斉藤を、小杉という男は知っていたに違いないという思いは、瑠璃子につきまとわって離れなかった。

「とにかく、ドラゴンちゃん、何とかして、歩ちゃんがここの連中の手に落ちるのを邪魔しなきゃね」

瑠璃子は小杉へのどうしようなく湧いてくる疑いの気持ちを無理に振りほどき、自分でも白々しく感じるほどに明るい声でそう言

つ
た。

9・地下四階

「何？ そのベースメント・フォースって。基礎の力？」

タカが言つと、モニターに大きく映っていた萩原アケイッのこめかみが、ちよつと引き攣つった。

——その子、わざとボケてる？

「……いや、多分天然」

「地下四階だわな。一般的に月じゃファースト、セカンドって数えるベースメントつつたら、この層になつてる一つ一つの街のことだ」

斉藤は徳永と言葉がかぶつたので、言い澱よどんだ。

「斉藤。いや、そっちの萩原さんでしたっけ、あなたでもいいんですけど、地下四階ビーズンの利権って何のことです？ 森本にオドシをかけたりするために、秋篠や斉藤を攫さらつたんなら、パターンから言つて、マルB（暴力団）の抗争だと考えるのが、無理がないでしょう」

——うちのプロファイルでは、棗慶造になら奥さんやお子さんを盾にするのは有効だけど、森本茂には、あまり意味がないというのが、斉藤には悪いけど正直なところ。

「別に悪くないですよ。そのとおりですから」

斉藤が請け合つた。

——斉藤もそう考えたから、私に地下四階ビーズンの利権どうのこうのって聞いてきたんだと思う。

「あのさ、頭いい人たちで勝手に了解し合っても、共通の理解にならない。データマン方式で頼む」

タカの文句に斉藤はちよつと苦笑いをする。

「おいてけぼり置行堀にしたつもりはないよ。ただ、理論の飛躍をしすぎてないか、確認したかっただけだ」

斉藤が少し考えてから、いくつか並んでいる重大なサイバー犯罪が起きたときに実動部隊員が座るはずのブースに座っている金田に向って歩いた。そして、クレジットの支払いの為に非接触型リーダーの上に置かれた携帯端末を手にすると、なにやらいじって、もう一度元の場所に戻した。

回線を確認しただけで、今は誰ともつながっていない、最初、霧島梅香と繋がっていた画面にコール中のサインが出た。

——一体なんだ、こんな早くから。大体、同じ月の上で、ハイパーウェーブ通信使ったのは、どういう冗談だ？

画面に出たのは、斉藤歩のパートナー、カレスティラ・ディエゴだった。出勤の身支度以前どころか、起き抜けといった雰囲気、いつもならきつちりと整えている暗めの金髪がまだ元気に乱れている。付き合いの浅い斉藤には、スタイリッシュなディエゴはスーツ姿が基本で、どんなにラフな格好といっても、精々ジャケットを脱いだ姿ぐらいまでしか見たことがない。くしゃくしゃの髪に、なぜかクマのイラストが入ったTシャツ姿のディエゴはとても若く見えて、ちよつとほほえましい。

——アユム、その顔どうした？ だいたい、その物々しい雰囲気の一部屋は何だ。うん？ そちらはサイ対の三上室長？

ディエゴが瞬間に三上の立場を正確に言ったので、三上が奇妙な顔つきになる。そういえば、ここを斉藤に使わせるとごり押ししてきたのは統合幕僚本部の沖トウバクだけれど、元をたどれば、多分間違いない斉藤の方だ。三上は思う。三十前後に見えるこの金髪の青年が誰だか分からないけれど、自分は随分有名な人だったらしい。

「通信回線がこれなのは、単に機密性を上げるためです。えっと、手短にいいですけど、オフィスに今から直行して、私の端末をここに繋げてもらえますか？」

——そこって？

「三上警視正が室長を務められている、サイバー犯罪対策室の司令室ですが」

——冗談はやめてくれ、アユム。そんなことミスタ・アルトゥールが許可するわけないだろう？

「管理チームのホストとここをリンクさせると言ってるわけじゃないですよ。単に、僕のデータをみたいと言ってただけです。室長が出勤される前に、何とか頼めませんか？」

——なんで、俺に。

「やだな、パートナーだからに決まってるじゃないですか」

違法なこととまでは言わないまでも、かなり危うい路線のことを気軽に頼むほどには、深いつきあいが無いディエゴに対してにも関わらず、斉藤はそんなふうに言った。

——アユム。おまえ、本当に性格悪いな。

「ディエゴさん」

齊藤がちょっと真剣な口調に変わった。

「キリシマのニュース見てますか？」

——……知らん。どういうニュースだ？

「霧島運輸の会長の息子、つまり社長の弟が、身代金目的に誘拐されてるんです」

——月ツキでか？

一瞬だけディエゴは言葉を飲んだが、すぐに気を取り直して続けた。

——それが、日本県租界の警察から、国連オフィスのホストに繋がる端末に繋げろという依頼の説明になるとは思えないが？

「彼を何とかして取り戻したいと、僕は思ってたんで、で、犯人像をある程度イメージしないと、どういう方向に作戦を組み立てるのがベストか悩んでるんです。それで、今まで調べてきたことのデータを基に大雑把に犯人のイメージを作ろうと思ってるんです。僕が調べてきたデータしか使いませんので、何でしたら、ここまで僕の端末のドライブをコピーして送ってもらうだけでもいいです」

（この後に及んで、そんな悠長なことをやるのか？）

徳永は呆れた。

——その位なら、まあセーフかな。急ぐのか？

ため息と、苦笑。本人にはその自覚はないのだろうけれど強引に

物事をすすめていきだしてしまうと、斉藤という男は些かならず傍若無人になる。そのモードに入ってしまったら、言い抜けしようと避けようと、頑として譲らず妥協線まで執拗に畳みかけてくることは分かりきっている。

こういう押しモードに突入しているときの斉藤を拒否することの難しさを、短いつきあいなのに、既に骨身に沁みているデイエゴは、厳格な首席監督官ブチロフ・アルトゥールが出てくる前にさっさと物事を片づける方をとっさに選んだ。

「ありがとうございます、恩に着ます」

——オンニキルっていう表現の使い方を今度、ちゃんとレクチャーしてくれよ、アユム。

向うの携帯端末がオフラインにされたらしいが、斉藤は画面をそのままにしていた。その部屋にいた誰もが意外なほどに程なくしてもう一度向うの画面が立ち上がる。

——へ？ ハイパーウェーブ HWなのに、つけっぱか？ エライ贅沢だな。

「そっちの宿舍って、同じ建物？」

ブースに腰を落ち着けた斉藤の背後に、いつの間にか寄っていたタカが小さく言うのに、斉藤は軽く頷いた。

「ウチ軍隊並みだな」

「安全対策。ウチ国連の職員は、拉致被害に遭うケースが稀まれじゃないからね」

「なるほど」

そんな話をしている間に、向うのデイエゴが総合端末を立ち上げ、携帯をリーダーに置いたのか、画面には端末を操作しているデイエゴが若干小さく映った。

——セキュリティはパスワード？ それともコード？

「コード。転送します」

斉藤がなにやら操作をしている。コードというのはアルゴリズムを符号化したプログラムのことで、パスワードよりも当然そのセキュリティレベルは高い。ただし、プログラムは、完成後は複製しようとしても自動的に破壊されるように構築させることが多いので、万一にコードが破壊されたときに、そのプロテクトをかけた本人にも開けなくなる危険がある。普通のエンジニアなら、データを丸々複製したものをバックアップとして別の場所に保管するケースが多い。その元データのバックアップが要するという一事が、ホスト型の巨大情報蓄積型人工知能にコード形式のセキュリティが採用されない理由の一つでもある。

——おし、開いた。どれをどこに送ればいい？

「初期画面にあるファイルMを、ここに」

斉藤がいい終わるが早いか、転送されてきたデータが蓄積していくゲージが動きだす。

——さすが、HWだ。めちゃくちゃ速いな。誰かがこないうちに、回線きるぞ。

「ありがとうございます」

と、斉藤がいい終わらないうちに、もう一度、向うで一方的に回線が切断された。今度は斉藤も、WHの回線は当然維持したままで、通話の方を閉じた。

「斉藤、それ何？」

斉藤がファイルを開くと、棒グラフや円グラフ、表のようなものを何だかでたために、次々と立ち上げて行く。

「萩原さん、この開いた状態で送りますから、ちょっと見てくださ
い」

——了解。で、何、それは？

「月の地下の想定される各国の居住可能空間の容積率です」

——どうやって、そんなもの出せるの？ 地下空間は非開削地中探
査ならできることは分かっているけど、規模が半端じゃなく必要で、
投資に見合うだけの情報量が得られないってことで、国連レベルで
データベース化されてる主要国の一部分のものしか集められていな
いはずよ。第一、地中レーダー探査なんてややこしいもの、経常的
にされてないから、最新の情報だって、下手したら三、四年は前の
ものになるわ。

「でも、取りあえず、地下空間の規模、都市化されていない部分も
含めて把握しないと、深層で国境が公正に守られているかどうか以
前の問題でしょう？」

——まあ、それはそうだけど。でも各国が各国内のことは何とか把
握しているかどうかとところかやっというのが現状じゃないの
？ 月自治区では、各国の政府なんてのは、基本的に税金を納める
宛て先という意味しか持たないわ。

「でも、そこを把握しなきゃ、まず一步が進まないじゃないですか
えっと、僕のこのデータでは天然にもともと存在した地下空間につ

「いては、取りあえず無視してます」

——普通はそこを把握しようとするんだけど……。

「取りあえずできることからしか始めなきゃ、何も進まないじゃないですか。ベスト搜して考えあぐねて何もできないより、取っかかりがあればやってみる。少しのベターを積み重ねる方が何もしないよりマシでしょう。少なくとも、最悪じゃあない」

斉藤は情熱的に口走ってから、うつぷと自分で嘖き出しそうになる。これは、何かことあったときの、いつものタカの口癖そのままで、受け売りにしたって自分なりの咀嚼が無さ過ぎる。背後のタカがどんな表情をしているのか、何となく気になった。

——分かった。それで、斉藤。あなたのベターとやらの手法って何？

「^{レゴリス}砂の採掘量統計です」

——え？

「えっと、ネオ・フロリダ会議ルナ元年で、各国の統計人口比による、月の国境線が決まりましたよね。で、一応、想定されている中心核までの錐状^{すい}に近くなる国境が守られているというふうに仮定します。実際の地下での誤差まで厳密に考えていると、大雑把に把握するのもできませんからね。

それで、砂^{レゴリス}の採掘総量のうち、まず一番明確で誤差が少ないと僕が思ったのが輸出货量です。これは、各国が月^{ルナ}マスドライバーシステムを所有しているわけではないので、船積書類のCertificate of Origin（原産地証明）で振り分けて各マスドライバーの稼働総量を比率で割ります。

それからそこで人工大気の原料になる液化窒素の輸入量と、それに必要な液化酸素を精製するのに必要なレゴリスの量を計算します。それで計算して作ったのが、その棒グラフです。青が輸出分、赤が自国消費分です。その総量から算定されるレゴリスの容積分が、もともとあった空間を変数 X として、それにプラスする形で表示したのか、こつち。

それから主要国ごとに、想定される存在している空間と、実際に地番が付いて居住地として統計に載っている部分の容積分を差し引いて、存在はするけれども、都市化されていない、各国ごとにあると想定して間違いないだろう空間を一覧表にしたのが表Cです。それを割合として視覚的に分かりやすくしたのがCダッシュ」

斉藤の説明にちゃんとした理解がおいっているのは、多分、萩原と沖、三上、それから春花ぐらいだろう。和田とタカは最初から、徳永は途中から、理解しようとするのを諦めた。

——そんな統計手段で、有容積を割り出せるなんて、思ってもみなかった。斉藤、いい着眼点ね。

萩原が言う。タカは、飛竜と斉藤の人質交換を敵にオファーしなければいけない段階で、なぜ斉藤がそんな数字をいじりだしたのか、正直まったく見当もつかなかった。

「これ、日本のこの黄色の部分、変だと思いませんか？」

萩原の称賛には頓着せず、斉藤が話を進める。黄色というのは、どうもあるはずの空間のうち、都市として機能していない容積分の量だ、ということだけは、辛うじて徳永にも分かった。

「ちなみに、一番下の緑の長さは、実際に今統計対象になっている、居住地化されている容積分です」

他の国の黄色は、どこを取っても緑の長さに比べて随分短い。け

れど、日本租界部分に關してだけは、黄色が緑より長い。

「それから、ここにも一発仮定の話を食べい込ませるので、専門家の先輩方からは、まあ精度としてアテにならないと言われてしまうのかもしれないんですが、約十年ほど前、青山と百合根は、盛大に角突き合わせながら、開発されるや否や、新しく生まれた空間を都市として売りに出していました。それが、なぜか鎮静化して、どこことなく平和の氣風を醸^{かも}しだし始めたのが、大体、六年ほど前からなんです。で、面白いことに、そのころから植民地^{コロニー}衛星の一般居住者に対して入植を促す販売競争も鎮静化してるんです。この二つの事象から、導き出される仮定としての彼らの目論見を見ると、僕は二つの可能性を考えられます。

一つは彼らが十分に満足して、カタツムリのように、今ある体で生きていこうと決めたという可能性。もう一つは、ただスペースコロニーと殆ど変わらない、地に足着いているというだけが宣伝文句の月に、付加価値を添えることで、もっと大きく稼ごうとしている可能性。

青山の森本と、百合根の棗、あの二人の性格と、現在の勢いの在り方を考えると、彼らが儲け^{もう}ようとするのを止めた理由としては……」

——まあ、後者が自然でしょうね。

萩原が断じた。 斉藤が頷く。

「僕も、後者の方にターゲットを当てる方が自然だと考えます。そうすると、彼らが付加価値として足そうとしているのは……何だと思えますか」

——ただ土地をつるのではなく、もっと大きく……。日本租界の謎

の地下四階が、従来の月の常識を破って、今までのやり方であれば三、四層に相当する層を一つの空間として構成して、高さもキロに及んでいるらしいって……アレが、ガセネタでも、都市伝説でも何でもなく、現実だと、そういうこと？

「……そんな高さにする必要がどこにあるかということ……」

——まさか、テラフォーミング……？

「月でのテラフォーミングはコストパフォーマンス的にも技術的にも無理だとしている学者も多いですし、僕も月規模の地球化はナンスだと思ってます。表面温度差一つとっても、大気をつなぎ止めるだけの重力を有していないことでも明らかです。でも、パラ（擬似的）テラフォーミングなら、どうでしょうか。」

月の地表に人工的な囲いを構築することは、大気という天然の緩衝材を持ち得ない環境では困難でしょうけれど、月の地下は視点をかえれば、その囲いが既に存在している状態だということが言えるでしょう。だから、すこしでも聡い人間なら、人工的な囲いを一から構築するより、余程理に適っていると見定めるとは簡単です。そういう仮定の下に作ったのが、次のこの表なんですけど。仮定だらけなので、報告にあげるのも恥ずかしいと思ってたんですけど……」

斉藤はちよつと言葉を止めて息を整えた。

——既にある三層分を、厚みがあって強度を持つ人工的な囲いだというふうには、ドラスティックに視点を切り換えたってことか……。なるほど、パラテラフォーミングねえ。技術としては、多分可能よね。それに、開発建設費用もかからない。だって、もうそこは都市としてあるんですものね。スペースコロニーと違って、土台が天然

物だから、老朽化による再建築、移住。資金力のないものが取り残されて、老朽コロニーがスラム化していく社会問題の根本解決に……なる可能性が……あるじゃない？　これ、日本租界が走らせて、ちゃんと動いたら……間違いなくブレイクするわね。各国でものすごい競争になる……。技術は、使えるものだったと仮定した場合、一番最初に商品化できたものが利益を独占できる。森本、棗が手を結ぶ理由としてなら、おつりが来るわね。

萩原の顔がさすがに真剣味を帯びてきている。斉藤が続けた。

「この表は、地球からの輸入品目として、許可申請が要る農業用耕作用土とか、検疫が必要な動植物などの数値を、個人愛玩用、個人園芸用の名目でなされたものも含めてこの五年分を総計したものです。あと、最近思いついたので、まだ集計し終わってないんですが、火星の極冠地（北極と南極）からの土の輸入量です。火星は保護対象でありませんし、今はまだ恒常的入植が可能かどうかの調査段階ですから、地球産の土と違って、国の管理対象品目ではありません」

——火星の極冠地の土壌には、ドライアイスと水が永久凍土化しているんだっただよね。

「……これがその輸入総量です。月に絶対量として足りない水分は、リーファコンテナ（冷凍コンテナ）で輸入されてきますけど、この量は消費を全部賄って、なお多すぎると思いませんか？　もし、この低重力の中でも循環系として機能させることができれば、それから植物の絶対生息数を確保できれば、大気を強制循環させることができます……もし、もし、もしかかりで本当に情けないんですけど、月は新しい閉鎖系として、完全に独立できます」

月の地下を擬似的な地球にできて、完全に自給できるとしたら、

そこは地球を追い立てられた人類にとって、新しい天国になるだろう。細かい数字の説得力はひとまずおくとして、その部分だけは、その部屋に要る全ての人間に、それからその部屋にハイパーウェーブ通信で繋がっている人間には、明白のことに思えた。

「だめだしですけど、これが、現在、日本県に居住している、テラフォーミングに関する専門家といわれる人たちのリストです。五十八名って、普通に移住してくるには多すぎませんか？ この人たちは、ジ・アースへの居住権を持つているレベルの学者に限定しての数字です。もつと細かい分野での専門家になると、オープンソースによる統計手法（つまりオシントの技法）では、追いきれません。パラテラフォーミングが実現したとしたら、そこへの居住権を求める人に、どれだけの価値として映ると思いますか？ これは、青山と百合根だけではなくて、堅気カタギの側の実業界も巻き込んだので、一大極秘プロジェクトだと思っんです。ただ、日本という単位、極東アジア国という威信を敵にまわしていることで、法的に後押しされないというだけで。」

完全な独立を視野に入れているなら、その違法性も、堅気カタギの企業さんにとってすら、制約にならない……ということですよ」

斉藤の話は、その場の空気をなにか壮大な物事を目にしたときに人間が感じる圧倒的な何かで席捲した。けれど、

「なあんか、でっかい話になってきちゃったけどさ、それが飛竜を助けるのと、どう関係があるのさ？」

タカはのんびりした声で、けれど断固として、今さっきまで目の前にあったはずの問題を、思い出しなさいとばかりに打ち込んだ。

10・仮定による予測、あるいは予断による妄想

斉藤が迷子になった。春花は手間の掛かるやつだため息をつき
たくなる。

微視的^{ミクロ}モードでアイドリングしているようないつもの斉藤は、小
器用にいろんなことに頭が回るタイプだ。そういうときは、思考に
割り込んでも即答が返ってくるが、こうやってたまに巨視的^{マクロ}思考と
いうか、とんでもなく鳥瞰的に大きく全体を見極めて、ある意味哲
学者モードに近くなっている時には、逆に小回りが利かない。

タカに言われるまでもなく、話の流れから察するに、斉藤の意識
の中ではこの壮大な月の地下四階計画の説明は、飛竜の救出計画と
一つに繋がっている問題だと思う。だから、今それについて話して
いるのに、タカからそういう切り口で質問されて、自分の説明の仕
方のどこが拙かったのか、うっかり検証し始めているのかもしれない。
この男は頼りになるようでいて、目が離せない。

モニターの向こうで、ずっと黙って成り行きを見ていた春花が、
タカの質問に即答できない斉藤を見かねて、やんわりとした口調で
割り込んだ。

——あのさ、タカ。斉藤はさ、その秋篠さんと斉藤を攫^{さら}おうとした
犯人が、最終的に、自分たちを殺してもいいと思ってるのか、それ
とも、生きててこそ役に立つと考えてるのか知りたいんだと思う。
だからこそ、犯人が何を目的として、斉藤のパパにどういう要求を
突きつけるつもりか知りたいってことだと思う。

「それ、どういう意味？」

——斉藤をエサにして、飛竜を釣るだけならね、おびき出しといって警察にとつかまえてもらえばいいわけでしょ。そこで単純に一件落着だよ。どうせ飛竜つれてノコノコ現場に出てくるのなんて、ザコでしょうけども、斉藤はさ『天敵が生態系を保つ』なんて暢気なこと言ってるんだから、二人もパパの身内が亡くなっても、敵対している連中を叩きのめしてやるうなんて正義感たぷりに思っていないわけ、この後に及んでも。ただね、秋篠さんだけが、連中の手の内に取り残されたままなのは困るわけ、斉藤としては。

「でもそんなこと言ったら、今までの斉藤のやり方だと、大がかりな割に役にたたないぜ。どっちみち飛竜の一本釣りまでが精々で、そこで手詰まりじゃん」

——だからさ、文脈から察するに、そのアホは、向こうが二人が生かしたままで交渉しようと考えてるなら、冗談事じゃなく交換される気でいるわけよ。最終的にあちらさんが殺そうと考えてるなら、死体は二つより一つの方がマシって計算もできるから、決断しづつてるわけ。まったく、信じらんないわ。

「交換される気って……、冗談かましてるんでなく、マジで？」

斉藤は、春花の方が余程問題がうまく整理できて把握してるなあと、自分が見込んだリトルスターに惚れ惚れとしていた。

斉藤が黙ったままなのをしばらくまじと見つめて、タカは春花の言う通りのことを斉藤が考えていたと分かり、心底呆れた。どこをどころがしたらそういう発想になるんだ。斉藤がいいのははつきり言っただけじゃないか。なのにこいつは全く自分の程度つてやつを分かってない。

もともと、ただでさえアクション系は不向きなのに、月という環

境で流血痕を残して飛竜が拉致されるという一件をきっかけに古傷が疼きだし、精神的に相当なダメージを受けていることが判明した直後ではないか。らしくもなく、ちよつとしたことで震えがきてチヨウチヨ抱つこに頼ったり、場違いに笑いが止まらなくなったりして徳永に呆れられたりしているという体たらくなのだ。日ごろの斉藤の安定感を百としたら、今の斉藤ではよく頑張つて五十働けたらお釣りがこようというものだ。

そうでなくても、タカの主義たるベター方式で計算するなら、斉藤と飛竜を比べた場合、どう考えても人質などという穏やかでない立場で生き残り確率が高いのはあつちであつて、斉藤では決してない。

「こいつ、もしかして、すげー頭悪い？ 俺にしてみりゃ、飛竜と歩ちゃんの人質くらべなら、飛竜の方が絶対安心できるけどな。あいつとコレだったら、同じ力の攻撃を受けた場合、あつちの方が耐性つてやつの数値絶対高いぜ？ 生存率だつて当然違うよな」

——でしょう。物理攻撃だつて、精神攻撃だつて、絶対飛竜の方が……つて、そういう話じゃないでしょうが、飛竜だつて一応、撃たれたら死ぬかもしれないでしょうが。

「取りあえず、真空じゃ死ななかつたけどな」

——ちゃんと死にかけぐらいはしたじゃない。一応アレは、あなたと違つて人間なんだから、その辺は壊れものつて認識しとかないとほんと攫われたのがタカだったら、自力で帰つて来ても驚かないんだけどね。飛竜は目的地ちゃんと教えないと暴走するタイプだからねえ……、困つたもんだわ。世の中、ままならないことばつかよね。飛竜の一本釣りのエサだつて、誰でもいいなら私は迷わずアンタをくつつけるわよ。

「春花あ、俺も人間の部類に入れといてよ。少なくとも飛竜だの斉藤だのが人間ならさ」

タカが珍しくぼやいた。

「そんなに、俺、頼りないかな？」

斉藤がさすがに傷ついたような口調でそう言う。

——当たり前でしょ。

「当然」

モニターの向うとこっちの二人が、まるで迷う気配もなく即答した。

斉藤が、いきおいうなだれた。

徳永は、自分にとっては子供といってもいいくらいの若者たちのどこかかみ合わない会話を、半ば呆然と聞いていた。高柳^{タカ}という青年が適宜ストツプをかけてツツコミを入れてくれなければまるで会話の流れが見えないというのは、まあ取りあえずよしとしよう。世代ギャップというよりは思考の回転効率の違いによるもので、これは単純に自分と三上の差みたいなもんでしかない。

斉藤歩は、拉致されるということが、時としてどういう結末を迎えてしまうのかを身に沁みて知っているはずなのに、なぜ、そういうところに自分を置こうとできるのか。まったく過去の事件が身に堪えてないほどに鈍いならとにかく、一時的に行動不能になるほどに自分がそれから立ち直っていないことを突き付けられた直後なのだ。少なくとも自分がどういう状態か分かっているはずだ。なのに、どうしてそんな立場に自分を敢えて追いやろうというのだ。

正常なというか、一般的なレベルでの危険認知能力が欠け落ちているとも思えない。どこるか、むしろ普通より抜きんでて物事が見

えているタイプのようなのであるのに。

この年頃のころは、そんなふうに、自分より友人や家族を大切に思えるものなのだろうか。それとも、この斉藤歩という存在が、純粹に自己犠牲だとかそういう悲壮感なしに、大切に思える人を当たり前に自分より大切にできるといことなのだろうか。

愚かだなと思う。若くて、青いなとも思う。けれど……とても、こう何か滅多にみることでできない貴重なものがそこにあるような気がしてくる。どういったらいいのだろうか。そう――眩^{まぶ}しい？

――で、斉藤。いままでの地下四階についての話で、どういう犯人像を導き出せると思うわけ？

春花がアウトコースを辿っている話しの流れに、さっさと軌道修正をかける。時間を無為に費やす贅沢は自分たちには許されていないのだから。

「月に……いないんじゃないかと、思うんだ」

――犯人が？ そりゃ、無理でしょう。実際に二人は月で攫われているんだから。超能力なんて言ったらぶん殴るわよ。

「実行犯じゃなくて『音頭をとっている人間が』だよ、春花」

――どういう意味？

「だから、地下四階が、言っなれば第二地球^{セカンド・アース}の実現を目論んでいて、しかも堅気^{カタギ}の実業界まで巻き込んで最終的には独立まで視野に入れているとしたら……。そして、それが十分に実現可能というか、ほ

ば最終段階に入ってきているのだとしたら——仮定ばっかですみません——それをされたら困るのは、月でうまい汁を吸ってる連中じやあないんじゃないかと、そう思うんです」

春花には碎けて話しかけていたが、説明体勢に入ると、斉藤はごく丁寧な言葉使いに戻った。

「目撃者情報によれば、秋篠と飛竜を拉致した人間は、これ見よがしに百合根のバッヂを付けていたんでしたよね。人目が多いところで、わざわざ青山にちよつかい出すのに、百合根の看板を堂々と背負っていたというのが、疑問その1です。」

それから、森本の仕事場に盗聴器が仕掛けられているとしか思えないこの状況を察するに、実行犯は森本の仕事場に堂々と出入りできていたということの意味します。森本の仕事場に立ち入れる人間は限られてます。うちでいうなら樺崎クラス、あるいは兄弟と呼びあう仲のレベルです。

敵対や同盟クラスの親分さんと会うなら、料亭かホテルを使えばいい。実際の仕事場にまで招き入れているとなると、これは杯さかずきがあったなと考えるべきです。そう思いませんか？、徳永さん」

徳永はいきなり話をふられて徳永はちょっと答えに窮した。杯事おがすきじというのは、同盟よりももうちょっと深い。文字通り義兄弟として生死を共にするという誓いを周知させるためにやるものだ。連中ヤクザの仕来りしきたりから言つて、堂々と派手に執り行われる。森本が兄弟杯をだれかと交わしたなんぞ、聞いたこともない。

「もうちょっと、分かりやすく頼む」

徳永がそういうと、斉藤は軽く頷いた。

「森本の本当の仕事部屋に入れる人間は、樺崎クラスか杯を交わした兄弟だけと、ここに異論はないですよね」

斉藤が確認のために繰り返す。

「森本は同盟と親子はいるが、兄弟は持たねえ主義でここまで来てる。違うか？」

徳永は暗に否定する。

「それは、それでやりきれるだけのヤマしかもってなかったからです。こんどのヤマは森本本人でも、自分一人で背負いきれるような半端なヤマじゃない。その場合森本は誰と組もうと考えるでしょうか。雑魚ザコと幾らかき集めても、所詮雑魚にすぎない。私が森本なら、過去まえになにがあるうと、狙うのは棗なつめしかいません」

徳永は、その斉藤の全てを見透かすような瞳にぞくつときた。女を殺され、手下を殺され、息子を辱められたところで、森本なら棗慶造が必要と狙いを定めたら、全て流すはずだ。そして信頼を勝ち取るために、相手が納得するためならば、ごくごく身近にまで棗が切り込んでくることを受け入れるだろう。

「警察庁の知らねえところで、森本と棗が杯さかずき交わしてるって、そんなこと有り得るのか？　ウチのマルBだって節穴ふしあなばかりじゃねえだろう。事情通は当然いるし、目端の利く奴だってちゃんといる。それそこウラでツーカーなんだぜ」

警察の組織犯罪対策課と暴力団が裏でツーカーなどという爆弾発言をあつさりこなしつつ、徳永が疑問を投げかける。

「地下四階で進行していることは今の段階では極秘なんですよ。関わる人間が多いから、何をしているかは隠し通せない。だから、地下四階はすごいことになっていくことまでは、実際隠せてない。噂はずつと聞こえている。だけど、実際に何が起おこっているのかは、現場に行かないと分からない。でも現場は青山と百合根ブルマンが角突き合わせている場所でしょう。ドンパチ状態ではないにせよ、ど

これから撃たれたって奇怪おかしくない。そんな場所なら、誰がただの新しい街区を見物に命懸けでいきますか？ 黙ってても売りに出されれば全容は明らかになりますし、過去のパターンからいけば、物騒な連中の戦場は、そのころにはもう一段階深くなってるんですから」「マル機のこと忘れてないか？ 抗争事件ならどこまでだって鎮静化じへいに出張しやうるぜ」

「だからこそその低値安定。だからこそその生ぬるいにらみ合い。だからこそ、森本と棗は料亭を借り切ったの派手な杯事はできない。だから会ったのはごくプライベートな空間にならざるを得ない……、不自然ですか？」

「ここまで言われては、さすがの徳永もそれ以上の反論を思いつけなかった。静かにかぶりを振る。」

「じゃあ、実は森本と棗が、森本の執務室で談合するほどの近い仲になっているとして、盗聴器を仕掛けたってこたあ、棗が森本を裏切っているってことか？」

「斉藤がちよつとだけ逡巡しゆんするような素振りを見せてから首を振った。」

「あの人たちの杯事というのは、キリスト教福音主義者にとっての聖書みたいなもんです。絶対の中心。棗は森本より古典的ですから、彼は裏切ってないと思うんです。だけど、棗のその行動を面白くなくも思っている人間は、彼の側近の中には幾らでもいると思うんです。誰だって、森本や棗のように野心があるわけじゃない。それに自分の女や血肉を分けた人間の怨念を、森本みたいにあっさり過去のことにできない。山百合戦争に一息付いてから十年もたってないんですよ……」

「結局、裏切られてるのは棗慶造。だけでも盗聴なんてマネして森本の弱みを突こうとしてる連中は、棗を裏切ってるうちう自覚で

やってんじゃなくて、森本との杯をなかつたことにさせたいって考
えてるってわけか？ で、結局、秋篠の姐さんとお前を、百合根の
バッヂがぬつころせば、どうなるってんだ？ 義兄弟きょうだいになっちまっ
てるとしたら、森本みたいな性根の端っこまでヤクザでできてるや
つが、棗をどーのこーのすんのか？ あーっ、訳わかんねえっ」

頭を掻きむしりそうな勢いの徳永とは違って、斉藤は仮定に仮定
を重ねた複雑なストーリーのまだこの上に、風味が足りないとしても
いうように、これでもかと付け加えた。

「それでもというか、だからというか、行動を起こすためにはイン
パクトがいると思うんですね。そのインパクトは、やっぱり外圧
が自然じゃないかなあって。だって、やっぱり理由はどうあれ、棗
のシンパは彼の決定に首を振るのは、生半可なことじゃないだろ
うから」

「外圧ってどうしてだ？」

「月が閉じてしまったら、月が滴らせる甘い蜜を吸っていた連中が
困るんです」

「砂の輸入業者か？」

「……掘削量は調整する方向に推移するとは思いますが、しばらく
当面は外貨を稼ぐためにも、砂の輸出は止めない思います。とい
うか、どこかの国が止めても、買う方は契約する先を変えるだけで
いいんです。砂はどの国でも採集はできるんですから。そして出荷
国はマストライバー保有国が寡占していく現状も変わらないと思っ
ます」

「じゃあ、どこだよ」

徳永は、お手上げだと全身で表明するように万歳した。

そのとき、徳永のポケットの中で携帯端末が突然震えた。ほぼ同時に、和田がシオルダーポケットに手を伸ばしたので、招集コールということは用意に察知できた。

「招集ですよ、徳永さん。行きましょう」

方機^{ホウキ}は、つまるところパートタイマー機動隊員とはいえ、腐っても鯛、やっぱりマル機^{かたぎ}氣質が骨身に染みついているらしい。

普段の仕事じゃ、道案内一つまともにできない寝惚けた和田でさえ、とつさに気合が入ったようだ。今にも走り出しそうな和田を見て、徳永は可笑しくなる。

「ちつとまてや。うちは今警視正サマの指示で動いてるんだから、三上の意見を聞いてからだ。三上警視正殿、招集ですので失礼してもよろしいでしょうか」

改まった徳永の態度と口調に、三上もきつちりと姿勢を正す。多分、これは条件反射なのだろう。こんなところだけは、軍隊と警察は微妙に似ている。

「方機^{ホウキ}の招集は、レディ・サヤコに既に爆発物が仕掛けられている可能性を考慮して、当然出勤するはずの爆発物処理班の行動範囲を確保するための交通整理か？」

「多分そうでしょうね。このタイミングだと、そうだとしか」

「でも、我々は、爆発物など仕掛けられてないことを知っている。そうだな」

「もちろんです」

三上はにやつと笑った。

「斉藤君、君を攫^{さら}って、無体にも拘束しているやつって、徳永とか言わなかったっけ」

徳永の顔から出勤を目前にした警察官の峻厳な表情が滑り落ちた。

「三上いつ、テーマ何をいいだすんだ？」

思い切り警視正殿に対して絶対的に示さなければならぬ忠誠心というか、忠誠を傾けているふりを忘れて、徳永は三上の襟首をむんずつと掴^{つか}んだ。

「もちろん、人質の受け渡し現場には、少なくとも実行犯は出向かないと形にならないだろう。警察官たるもの、拉致監禁事件発生時には、その身柄の安全確保には、全力を尽くさんとな」

三上は飄々（ひょうひょう）としたものだ。

「刑事課の特捜全体に周知する必要はないだろうけれど、少なくとも本部の連中には、私が話をしよう」

「三上、お前警視正だって立場利用して、偉そうじゃねえかよ」

「偉そうなんじゃなくて、実際エライんじゃないの？ 警視正って、ウチでいったらどのくらい？」

空気を読まないタカが交ぜっ返したので、徳永が慌てた顔になり、ぱつと三上の服にかけた手を離す。

「比較は難しいし、まあ、大雑把だけど、警視正さんていうのは、上から数えての階級四位で、まあ、ルナ自治管区だと長クラスの人だと思っんで、一つ星くらいかな」

ついいつもの悪い癖で、斉藤が真面目に蘊蓄を傾けてしまう。今斉藤が言った「星」というのは、学校でのニックネームとしての星ではなく、将官の旗艦や乗車車両に付ける目印の星の数ことだ。これは幾らタカが常識を蹴^た飛ばす^く類の生き方をしていたところで、軍の釜で飯を食っている以上は無視することができない、分かりやす

い目印だ。星が多い人間の言うことを聞くというのが、基本的な身の振り方になるからだ。

「ってことは、佐官の上？」

「……うん。多分、三上さんお年から言って、そろそろ正から長に、成長するころだと」

「それって、ツースターってこと？」

旗艦に星二つは、補将、つまり航空宇宙軍でいくと、艦隊司令官クラスということになる。

「……まあ、多分。警察のことはよく知らないけど」

斉藤が自身無さげに言くと、タカが叫ぶように言った。

「三上さんっておエライさんだったんだっ」

——このガキ、今まで分かってなかったのかよ。

徳永の顔は頭が痛いというような表情になった。

「徳永さんは？」

「……上から八位、下から二番目だから、まあ、単純にいくと、曹長ぐらい？」

「全然、話しにならないじゃん。命令系統からいって、普通逆らえないよね、いろんな意味で」

徳永がぎりつとタカに鋭い目線をやり、そのどこにも悪意のかけらのない表情にどつと脱力する。

「……三上警視正どの……本職に何をしろっちゅーんですか？」

三上がその全然自分を敬ってなどいないことが見え見えの態度と、中途半端にオフィシャルスタイルが交じった言葉づかいに、うっかり微笑んだ。

「乗り掛かった船で、斉藤君の援護かな。援護は方機^{ホウキ}の得意分野だろっ」

「相変わらず、いやな野郎だ。大体、なんで誘拐と殺人の現場^{ヤマ}で、関係者の事情聴取の助っ人がこのつぴきならないところまで一気に転ばなきゃなんないんだ？ 今なら三上がごり押しして、俺にうちとこの招集蹴らせるにしてもだな、経緯からいって行き先は特捜の刑事課じゃねえかよ」

「まあそうはいつでも、徳ちゃん人は人がいいから、自分が必要とされてる現場から逃げないよね……」

「じゃあしやあと三上が言うのに、徳永はケツと応えた。

三上はくすと笑ってから、真顔^{まがお}に戻り、まるで他人事というふう
に距離を置いて、非常召集^{コール}に応えてすっ飛んでいくべきか、三上の
指令を待つべきか迷子になっている和田巡査に向き直った。

「和田君のこと私から隊長に話しておく。相勤の徳永巡査部長と
行動するように」

「……えっ？ 私もですか？」

徳永が頭を抱えた。

「三上、おまえ、四十面さげてやんちゃが抜けねえやつだな。いい
加減に大人になれよ」

プライベート・モード全開で徳永が言うのに、徳永より一世代若い
三上が褒められた少年のような顔になった。

「大体、徳ちゃんってば、ずっと制服勤務だろう。退官前に刑事（
私服の捜査官のこと）が体験できる唯一の機会になるんじゃないか
？」

「お巡り^{まわ}になりたかったんだから、俺は制服^{これ}でいいの。なにが悲し
ゆうてこの年になって刑事^{しんぷ}ごっこせなんらのよ。そりゃ、三上な
ら捜査課もしてるから小回りも利くか分からんけどよ、こちとらそ

んなに器用なこたできないぜ」

三上は肩をちよつと粹にすくめて、取りあわなかった。三上は地方採用の徳永と違い、県域公務員試験一種合格者なので、初任の階級は警部補。火力オーライの土地柄、事件が血なまぐさくなりがちな月自治区ルナの、よりによつて機動隊の小隊長の辞令をもらつて途方に暮れた。上級警察学校でも情報処理を専攻して、そこその成績をあげていたから、そちらに配属されると確信していたのだ。

あこのころの日本租界は丁度、青山会と百合根会の抗争が激化していたころ、俗に言う山百合戦争の真つ最中で、組織犯罪対策課だけでは手に負えない事件が多発し、もちろん機動隊員も出勤服どころか、防護装備でバリバリに固めて出張することが日常茶飯事だった。

そのころの徳永は、試験で決まる階級世界の悲しさで、三上が率いることになった銃器対策レンジャー部隊の、まったくヒラ隊員でしかなかった。けれど十年以上の経験を積んだ腕っこの隊員として、いったん現場に出れば、活動のいわば要かなめだった。

たたき上げのノンキヤリ、現場の実力者。そういう徳永のような立場の男から、駆け出しのひよっこキヤリアが苛められるという話は、よく聞かされて脅かされてもいたが、あこのころの徳永に泣かされた覚えは全くない。日々の活動に忙しく、皆が専門家プロフェッショナルだった。隊員の全てが、一つの目的に心置きなく邁進まいしんできる、気持ちがいい職場だった。

三上は単純に、陰湿なイジメをやっている暇ひまが徳永にはなかったのだろうと、思っていた。けれども、その後の長い警察人生の中で、三上は男の縦型階級社会に蔓延はびこる、嫉妬に起因する見苦しい足の引き合いに、しっかり見たり巻き込まれたりしてきた。忙しくても、いや、忙しければ忙しいほど、そういうことをしたいやつは、それに腐心するものだった。

自分がどんな肩書が付こうと、結局は警察官サツカンなんだという誇りを

持てるのは、徳永に負うところが大きい。三上は警察生活のそもその第一歩を徳永の近くで始められたことを幸運だったと、いつも思っている。

部外者の、しかも軍絡み、国連絡みの前科者。そんな人間の描く大胆というよりは、最早荒つぽい^{もはや}としかいえない、予断^{よだん}とはつたりにまみれた仮定付きの物語の壮大さに、それでもしつかりと三上は中^{あた}ってしまったのだ。

証拠を、そんなものは糞くらえと言えない立場だ。普段なら、当然特捜本部が設置されるような事件に横車を押し入れるようなことは御法度だ。万が一何かに気付く立場だったとしても、証拠を積み上げ、積み上げて、蹴ろうがど突こうが揺るがないところまで固めてから、ようやく「差し出がましくはありますが」と下手に差し出すべき立場だ。

だけど、こんな大規模な話は、そうそう転がっていない。首をつっこんで見えるものをみたいと思ってもたまにはいいじゃないか。そもそも、こいつらはオモテだって行動するつもりはないのだから、手柄になる部分があれば、そいつをこっちに取り込めばいいだけだ。やんちゃが抜けない、などと、警官人生における真つ当な成長をそもそも拒否して生きてきている徳永になんか言われる筋合いはない。

「斉藤君、説明を続けてくれ。君と秋篠さんに何かの役割をふろうとしてた我々の敵は、君はどの辺りだと考えているんだ？」

三上の言葉に、斉藤はもう一度ちよつとだけ、躊躇^{ためら}うような素振りになってたらつぶやくように言った。

「銃火器取扱業者……とか、そういう産業の仲介者」

「どうして、そう思う？」

三上が重ねて問う。

「平和に都市を繁栄させたければ、銃火器が普通にのさばっている状況を駆逐する必要があるからです。非合法は彼らの趣味ですから、自分たちがそれを手放すつもりは毛頭ないでしょうけれど、多分、仮称セカンド・アースにおいて銃火器類は建前禁制品になると思います。それに、青山と百合根が手を結ぶのならば、前の山百合戦争のときには決してならない。あの巨頭どもが手を組んだら、あそこに喧嘩を売れる組織が台頭してくるのに少なくとも十年という単位の時間が必要でしょう。原始的な銃火器類が堂々とのさばっているのは月だけです」

取りあえずの仮定として、文句の付けようがない。三上は続けて聞いた。

「彼らは、君と秋篠さんをつかって何ができると思っている？」

「第二次山百合戦争への導火線敷設」

斉藤が短く答える。

更に三上が畳みかける。

「君たちが直接危害を加えられる可能性はどの程度だと思う？」

「実行犯が、月の外にいるアタマからの指令で動いているなら、最終的には八割を超えとしても、交渉に要する時間内は安全だと思つてます。それでアタマが月のこの筋^{スジ}について詳しくないことは、私と秋篠を交渉の材料になると踏んでいるところで、明白なんじゃないでしょうか。生かしておく価値を見出せなくなるまでの生存率は、八割強……かな」

——ノウテンキ。どアホ。まったく、飛竜やタ力とつるんでるだけのことはあるわ。所詮が同じ穴の貉^{ムジナ}ってやつ？ どうやったらそこ

まで樂觀的な見積りできるのよ。

春花が猛烈に怒っている。タカは今日何度目かで可笑しくなった。春花は斉藤のことが心配でならないのだろう。だけど、やつがそういう意味で聞く耳持たないのは分かっているから、説得しようなどという無駄を試みる前に怒っている。

春花に取りあわず、三上は続けた。

「直接向うと対峙する役に、徳永巡査部長と和田巡査は必要か？」
「もちろんです」

斉藤は即答する。

「人質交換としてインフレ・ダブル・ドームを指定したとして、実際に連中が誘き出されてくる確率はどの程度だと見積もる？」

「七割弱……ぐらいかな」

これは大分弱気な語調になる。けれど、しっかり付け加えた。

「ベストとは程遠いかもしれませんが、今はこちらのターンなんです」

「こちらからアクションを起こさないと、何も進まないということか」

分かりきっていることを口にするときのそっけなさで三上が言った。

ふん、と徳永は荒々しく鼻息を一つ。それから投げやりな口調で言った。

「もう、どうにでもしやがれ。おら、斉藤、具体的な手順を説明してくれ。だけど、忘れんなよ。マルBは生憎経験がないが、月のそつち筋にや俺の顔は売れまくってるからな」

11・次の手

斉藤はゆつくりと画面の向うにいる人たちを眺めた。

飛竜の家族。この人たちに、飛竜を失わせていいか？ とんでもない。順列付けの一番上は、やっぱり飛竜を奪還することだろう。そうすると、この際、手つとり早いのは、こっちの第一手に向うがのって、飛竜と自分を交換するという提示を受け入れるという表明を得ている状況を活用すべきだろう。徳永にもう一度森本茂への電話で、簡潔に犯人に取引場所を示す必要がある。

それから瑠璃子さん。自分と彼女が一緒になった場合、自力で暴力の専門家の連中を出し抜いて脱出できる確率を考える。計算するまでもなく最悪だ。二人で協調できたとしても、まあできるところを打ち消しあつて一人ずつなら二割ぐらいはあるかもしれない成功率を一割以下に落すぐらいが精々だ。だけど、とにかく、あの人を連れてきてもらう方策が思いつかない以上、自分がエサになつて瑠璃子さんのところに連れていってもらうのがいい考えだと思う。少なくとも、彼女に辿り着くまでの経緯に危険はない。自分が行動の自由を奪われている状態であれば、殴られて痛い思いをすることもないだろう。とにかく、痛いだけは絶対に嫌だ。痛いと考える気が失せる。

月の地下四階が第二地球としての楽園をめざし、新たな格差の象徴として君臨しようと、今の自分にとって大切なのは、飛竜と瑠璃子、その二つだけだ。正しい、正しくないは野次馬が勝手に決めればいい。少なくとも、霧島松姫と崔春花と、傍らにいるタカと自分この四人にとつてはだけは、月の未来なんかよりも、それが大切なのだ。それは間違いない。じゃあ、瑠璃子を生還させるためには、

自分は何ができる？

齊藤は脈絡もなく唐突に、着任したてのころに、出されたままで放置してある岸の宿題を思い出した。あの課題に自分は答えをまだ出していない。あのとき、自分は、萩原アケイッにどういった？

——チームタワーで学んできたことは、人間だれだって一人でできる事なんか、たかがしれてるってことですからね。

——僕はだから、基本的に一人で何とかしようなんて考えないんですよ。

そうだ、自分一人でできることなんか何もない。自分は華麗に単身乗り込んで、ソロプレイで敵を叩きのめし、人質なったお姫様を片腕に抱いてさっそうと帰還してできるようなマツチョじゃない。それができるなら、そもそもこんなところで間怠まだるっこしく大人数を巻き込んでわたわたしていない。

瑠璃子との合流は、飛竜と交換さえされれば簡単にできる。そこから自力で抜け出してこれれば、それはそれで格好いいのだけれど、それで蜂の巣では、せっかく助け出した飛竜が、生涯癒えない傷を負ってしまう。

状況的にも、自分の能力的にも、どうすることもできなかったと幾ら理性が説得しようとしても、同じ事件に巻き込まれて一人だけ生き残ってしまったえば、自分の無力に対する非難を己の感情というものが止めることが決してできない。そう、身に沁みている。心を保つために勝手に記憶が自分をごまかしても、そうである事実を思うときに自分に対する怒りと、情けなさに対する絶望みたいなもんから目をそらせない。何もできなかったという絶望から、生涯逃れることはできない。

自分が死ぬことで飛竜みたいに太陽が似合う男に、鬱々とした人生を送らせるなきっかけになるなんぞも、ごめん被る。

だったら……。

（ちゃんと、助けてもらう）

この人たちに任せる。彼らは将棋の駒こまじゃない。ちゃんと考えて、それぞれが最善と思うことをしてくれる。だから、出来の悪いシナリオを投げておけば、穴はそれぞれが自分のアドリブで演技力を発揮して、終幕をめぐしてくれるだろう。だから、自分は次の第二幕フィナーレのシナリオを語るだけでいい。あとの微修正は、春花がしてくれるだろう。

齊藤は自分がちゃんと落ち着いているか、明晰さを失っていないか、自分の決めた次の手がそれほど酷いものでないか確認するために、目を閉じた。自分を取り巻く人たちを感じることができる。

（It is my this time turn.）

今度は俺の番だ。齊藤は決然と頭を擡こっぺげ、ブースに向かった。ヘッドセットを付けてないのが、どうにもこうにも締まらないと思っながら。

* * *

「森本お。何度も済まねえな」

ドスの利いた徳永の声がいう。

「お前がこいつを切っちゃえば、息子は死ぬぜ。まあ、お前にとっちゃ、どっちが息子ちゃんを殺そうが関係ないんだろがな。まあ、堪えてくれ」

前回の電話と同じように、斉藤の携帯を徳永は使っている。もちろん、連中にとっさの逆探知能力はないというこれも予断の上で、場所を特定されることはないと確信してのことだ。

「で、聞き耳たててやがる誰かさんへの用件に移る前に、森本、一つだけ聞かせてくれないか？」

——何だ？

短い応え。森本は声も斉藤と似てやがると、徳永は思った。声の質は骨格が左右するもんなんだろう。結局骨格が似てるから顔が似てるということだろうから、これだけ親子看板背負っている森本と斉藤の声がそっくりさんなのは、まあ仕方がないということだろうか。戸籍なんて糞くらえ。斉藤が森本の血を引いてるかどうかなんて疑う余地はこれっぽっちもない。自分だって、女房と娘の声の区別が付かなくて、よく家族の失笑をかつている。

「棗慶造と呑む酒は、旨いか？」

——どういう意味だ？

「まんまの意味だよ。地下四階じゃあ、エラい上等の酒が取れるみたいじゃないか、ええ？ お前ら二人とも、身内の血が浮かんてる酒でも一緒に呑んじまえば、テメエの血肉だってこったかい？ 大した外道どもだ」

——済まない。意味が分かりかねる。通じる言葉でしゃべってくれないか？

森本も秋篠と息子の友人を拉致した犯人がこの通話を盗み聞きしていることを承知しているから惚^{とほ}けているのか、あるいは電話の主^{ぬし}が他ならぬ警察^{サツカン}と知って警戒しているのか、どっちとも取れる形で言った。

大体、斉藤が樺崎に伝えたのは、森本への通話が盗聴されているということ的前提に、秋篠瑠璃子の拉致犯と交渉するから、どんな内容の電話であってもこちらから切るまで決して電話を切らないようにという、その一点だけなのだ。一回目の電話のあんまりな内容に、樺崎自身が混乱しまくっていることは想定できる。

樺崎はカナタと一緒に一通りの事情聴取を受けたあと、特捜本部の担当も少なくとも五、六人を伴って森本宅に帰り、そこで秋篠の誘拐犯からの接触を待っている状況らしい。

一本目の電話で、飛竜と斉藤の交換を徳永が提示して犯人に伝えた内容は全て当然樺崎も森本も聞いている。当然、あのサイトのあんまりな斉藤の画像も見ているだろうし、早朝に大々的に行われた霧島運輸社長への記者会見を見れば、霧島に対して五百億という法外な身代金要求があったことも知らないと考える方がおかしい。

主立った通信社のウェブページのトップには、沖^{シヤコ}が本領発揮してシャトルごと突っ込む云々と騒いでいる画像から切り取った霧島飛竜の写真付きで、脅迫状の内容がベタベタ貼り付けてあるのだから、マスコミは日ごろの人質脅迫事件なんかと違って、堂々と報道できる。トークショーを初めとして、テレビはその話題——霧島運輸への脅迫事件——で持ちきりだ。情報に大して常にアンテナを張っているヤクザ業界が沸騰している話題に無知ということは基本的に有

り得ない。

齊藤は既に、『青山会員繁華街で二名射殺。犯行は百合根会か？山百合戦争再びの恐怖の可能性』などという、朝刊に見出しが踊るはずだったそれを潰してしまっている。これ見よがしに衆目のあるところで殺人と拉致を実行した敵の意図が、齊藤の予測通りに青山と百合根を表立って反目させようというものだとしたら、この段階で序盤戦は齊藤が制したことになる。マスコミは、繁華街でチンピラが死んだことなど歯牙にもかけていない。マスドライバー・システム・レディ・サヤコを爆破させることを断念させ、会長の長男である青年を取り返すために、キリシマが五百億という巨額を費やすのかどうかに、下賤な注目が集まっている。五百億というのは財布に入っている金額としては突拍子もなく非現実的だけれど、シャトル2台分にすぎないと説明されては、不思議なことにキリシマの企業規模から見てまったくの法外な要求とは思えなくなる。

齊藤を病院から連れ出したのが制服の徳永というのを見ていたので、少なくとも樺崎にとっては、この電話の声が徳永だということは明々白々だと思う。

ここで、ひと言でも樺崎が『徳さん』などと言おうものなら全てがその瞬間で瓦解する。徳永に言わせれば、齊藤のやることなすこと全部が全部、最初から最後まで随分タイトな綱渡りだと思う。多分齊藤という青年は多分ゴールに向かう道筋しか見えてない。自分がやってるのが、大胆なことだなんてこれっぽっちも思っていないだろう。警察を誘拐犯に仕立てて、犯人を煙に巻こうたあ、一歩さがつてみれば常識に回し蹴りくらわせているようなモンだ。

だけど、ご都合主義に何となく上手くいつてしまいうで……、それがちよつと、怖い。こんなことが続いたら、このワルガキは調子こいちまうぜ、徳永は思う。

「文字通りだよ。いいか？ 森本、アタマ使えや。そこに盗聴器を仕掛ける奴がお前のミウチに居るかよ。いねえなら、新参もんだろうが。だけでもよ、お前らの杯は絶対だろ？ だったら、お前の新しいお兄様のシンパの焼き餅……、その辺を疑うんだな。ふん、お前に惚れる女は大変だな。野郎どもまでライバルじゃあなあ、秋篠の姐さんもえらいこっちゃだ。ああ、こいつは、回線借りてる礼のつもり親切心だ。こっそり新婚を楽しんでるテメエらに波風たてるつもりはねえよ」

徳永は手許のカンペ（カンニングペーパー）を見る。

第二手

- ・ 森本に、犯人は棗の側近と臭わせる
- ・ 人質交換の現場はインフレータブル・ドームJ4号
- ・ 時間は今から二時間後
- ・ ドームは火気厳禁をリマインド

「森本、テメエへの用件はここまでだ。さてと、お待たせしたな、マイ・フレンド。いいか、いよいよ霧島飛竜と斉藤歩に涙の再会つてのさせてやるうぜ。永遠の別れかもれないけどなあ。感激的だなあ、おい」

黙ったままの樺崎が、森本の傍らでどんな顔をしてるのか想像すると、可笑しくなってくる。徳永はごく自然に下品な嗤い^{わら}い声を漏らしてから続けた。

徳永が部屋の隅から中央ブースの方を見やると、例のハイパーウエーブ通信を使って、斉藤がまたぞろ誰かとしゃべっている。音声だけなので、相手は携帯でしゃべっているようだ。ぼそぼそして聞いて聞こえないけれど、まったく忙しく頭をまわすことにはかけちゃー

級品だ。徳永は斉藤の指令をもれなく盛り込んで、楽しくオドシのかまさなければならぬのだから、その上で斉藤が誰と何を話しているのかまで気をつかっていては、やり損なってしまう。興味が湧くのをぐつと堪えて、犯人への会話に集中した。

「ええ、そうです。徳永さんですよ。……だめですよ、森本にバラしたら瑠璃子さん危ないじゃないですか。何があっても、今は訳分からんって顔してくれなきゃ。で、確認ですけど、棗と森本って兄弟で、いいよね」

斉藤が小さい声でささやく。徳永のイタ電を樺崎に台無しにされないようにするには、彼をトツ捕まえとくのが一番なのだ。

「どうしてって、そりゃ推論による当てずっぽう。当たりなら、ご褒美にすることでオマケの情報お強請^{ねだ}りしたいんだけど」

斉藤が通話中の徳永への音漏れ防止のためにヘッドホンをしてしまったので、することも取りあえずなく、背後に立ってるだけのタカや、ごく傍らにいる三上には、小声の斉藤の言葉が何とか聞き取れる程度で相手がしゃべることまでは聞こえない。話し方で相手が樺崎だろうと見当はつくけれどそれだけだ。なるほど、余計な茶々を樺崎に入れさせないためには、捕まえておくのが原始的で確実だろう。

「……青山^{セイザン}が武器買ってる業者のうちで、大手さんを二、三個教えてくれない？」

調べるより聞く方が早くて確かかもしれないけれど、こういう聞き方を樺崎にできるところが、斉藤が思いつきそちらに両足を突っ込んだ存在だということなんだと、三上は思う。警察としても、こんなふうは無邪気に樺崎に聞けると楽なんだが……、とつい思っ

てしまう。斉藤を月の国境線管理チームなどというものに放り込んだ彼の上司は、こういう複雑な場所で、斉藤がそういう基盤をもっていることがどれだけプラスに働くかを冷徹に見極めていたということになる。斉藤がここでの過去と向き合うことの過酷さを踏まえてなおそうしたというなら、冷たくて計算高いという人物像を想像するしかない。

斉藤は例の統幕本部トウバクの情報のドン、万年二佐の岸諒介がずっと熱望していたというのをそこそこ漏れ聞いている。（幾ら三上でも、このテの情報のネタの出所は沖しかないのだけれども）彼が斉藤に目をつけたきっかけが、例のウチのデータベースへの斉藤の侵入事件だということも疑いようがない。

斉藤が月ココに向かうのにどれだけの利点を持ち、どれだけの弱点を負っているかを比べたとき、斉藤が過去に潰されてしまう程度の間なのか、それをはねのけて成果をもぎ取ってくるだけの器量があるのかを、冷徹に見定めているのだろう双眸を感じざるを得ない。本当に下手の才能が見えちまうと、若者は苦労するしかないということだ。

三上は役者になりきっている徳永と相変わらず自分の身の置き場所を見つけるのがド下手くそな和田を見て北叟ほくそう笑んだ。徳永の演じる悪党は、なるほど堂に入っていて、刑事しんぷくでも随分使えたんだらうという新たな顔を見せている。けれど彼の一番の活躍どころは、銃器対策レンジャー部隊であって、若いころは狙撃手として、そして人質救出作戦や立てこもり突入作戦の現場を仕切れる数少ない人間として、警察庁サツチョウで知らぬ者はない男だった。

一方徳永が今引きずり回している和田という青年は、ぬーぼーとした印象の頼りない手応えでいながら、狙撃銃を握って現場に立つても、妙にエキサイトしたり、根拠のない万能感を漂わせて暴走する様な質たちでない。

狙撃手に要求される資質のうち、冷静でありいかなる場合も平常心を手放さないことが重要だとするなら、出世してデスクワークをしたがっているのがミエミエの和田を、あの徳永が離そうとしないのと根にあるものは同じだ、全く気の毒に。

成長を待つとして、斉藤を十年以上の年月をかけて育てておきながら、手の内に取り込むやいなや、早々につぶれる程度なら潰してしまえという行動をとれるところが、情報の岸が恐れられる理由の一つなのだろう。いつだって根底に気のいい優しさが流れる徳永。岸と徳永の違いはたぶんそんなところにあるのだろう。

どちらにしろ、一つのスキルに長じた男に、勝手に後継者の一人として目されるということは、青年にとって災厄以外の何ものでもないだろう。つくづく思う。気の毒に。

斉藤にも、和田にも、たぶんそういう鬱陶しい愛情と期待をぶつけられているという事態に到っている事なんか、想定の外に違いない。

「ユキ……ブン？ ああ総合商社の？」

斉藤が小さく疑問形で口にするのが、三上には聞こえた。

斉藤がまたさっさと通話を切り換えるのが分かる。徳永が電話を切るまで、斉藤がヘッドホンを使ったままだろうことがもどかしい。

「萩原さん。ユキブンの取り扱い品目の中に、兵器はあるんですか？」

丁度そのとき、徳永が通話を一方的にぶった切って、斉藤に言っ

た。

「内容は伝えたぞ。人質交換実行は、今から二時間後だ」

その言葉が聞こえると同時に、斉藤がヘッドホンの接続プラグを引き抜いた。

——ユキブンは多分ないわ。トップの雪島ゆきしま文高は、ユキブンの名前ですんなことをするほど間抜けじゃない。ただ、羽島ハシマ精機貿易って知ってる？

「いえ……、すみません、名前も知りません」

——あそこは、ユキブンがいくつか持つてるダミー会社の一つで、そっち方面の取扱量が大きいっていうのが定説なんだよね。そうそう、ユキブンの社長にハツタリかませて情報引き出すつもりなら、プラムさんが適任なんじゃないの？

「プラムさんが？」

斉藤が珍しく間抜けのように聞き返した。

——前に、若手の企業家に連続でインタビューする堅い企画もんをEXK放送がやってたとき、ソフト路線の演出じゃないのかと思うけど、インタビューがプラムさんだったよ。確か、そのときの企業家十人の中に、ユキブンがいたはず。

「春花、プラムさんにコール。さっきのHW回線維持したまんまだから、コールバックすれば、すぐ繋がるって伝えて」

萩原の返答がおわるのを待たずに、斉藤が春花に指令を飛ばした。

自分がれっきとした人質になって動けなくなるそのときまで、二時間。残された時間でできることは限られている。

「シャコさん」

急に斉藤にふられて、沖が仲よく萩原の隣に鎮座する。

「ネットショップで、とびきりのブランド服二着、見繕みつくろってください。誰が見ても高そうに見える奴。連中目が肥えてるから半端にケチらないで、センスのよさそうな奴を頼みます。ここでクレジット決済するから、速配使って一時間以内にここに届けさせてくれます？」

——サイズは？

「本人に聞いてください」

——五百億ぼったくろうとしてる、徳永さんと、和田さんの分ね？
確認するまでもないだろうけど。

「私服ぐらい持ってるぞ」

「誰が見ても高そうだというやつを？」

「……」

タカが間髪入れずにつぶやいた所為で絶句した徳永を見て、三上が小さく噴き出した。

「あとカートを一台、これはできれば量産型のどことって特徴のないのを。これはそうだな、タカ、お前が直接取りにいつてこの駐車場に突っ込んでおいて」

——車はそっちで手配して。カード切れるなら中古屋に直接買いに行った方が早いかも。

「了解、タカそいうことでカート買ってきて」

斉藤が言う。

「おー、簡単にいつてくれるじゃん。景気いいね。でも店普通は開

いてないんじゃない？ まだ八時前だし、普通はそういうお店って十時半とか、十一時ぐらい？」

「開店まで待つてたら、間に合わないな。電話でたたき起こすにしても、この際だから必殺技乱発するか……」

「必殺技って……」

「ブルマンの七光」

言いながら斉藤は徳永の手から携帯を取り返して、再び電話をする。

「あ、ママばあ。早くから起こしてごめんね。昨日からの騒ぎで眠れてないって、うん、ごめん。で、お願いんだけど、ウチに転がってるカート、一台もらっていい？ うん、そうそう。壊しちゃうかもしれないから、一番どってことないのでもいい。高級車だと困るんだ、うん」

「電話一本でカートもらえるのかよ、お前んち。俺、斉藤嫌いになりそう……」

タカが文句を言うのに斉藤が笑った。

「飛竜なんかに比べりゃ、可愛いだろ。中古カートじゃどんなに高くても徳永さんたちのニュースツぐらいにしかないけど、あつちは単位が億だし」

「飛竜に億の値段つけたのは歩ちゃんでしょうが」

タカが騙されないぞというように憤然と腕を組んだ。

「タカ悪い、俺の家ちよいと行って車^{カート}持ってきて。あ、ママばあ、こいつに取りに行かせるから」

そう言いながら起動したカメラでタカを写すとそのまま転送する。「うん、よろしく。そっち警察一杯張り込んで？ だったら途中で持つてきてくれる？ カナタを使うのはだめだと思う。今ハンドル持たせられないんじゃないかな。うん、ごめん、片づいたら温泉でもなんでも付き合うから……、うん。そうだね、今中央署にい

るから、あの前の通りの、そっちから来ると一番ドン突きの交差点ぐらい？　そこで、ありがとう」

斉藤が電話を切って、にんまりとタカに向かって笑う。

「聞こえてたでしょ。よろしく。うちの祖母が若い衆やらせるって言ってたから、待機してて。タカの顔は送ってるから、向うが見つけてくれると思う。ここの駐車場に入れたら戻ってきて」

「了解。で、斉藤歩の誘拐犯は調達できた。J4号ドームまでの足も確保できる。で、無事交換が上手くいくとする。飛竜をとつかえして、歩ちゃんが向うに持ってかれちゃったら、まあ、人質らしさでは飛竜よりは姫っぽくてサマになってるけど、こっちとしては司令塔がなくなって、全然状況が見えてない怪我人が一人増えるんですよ。このあとどーしろっちゅうのよ」

タカが心底不思議そうに言う。

「それは、プラムさんにユキブン攻めてもらって……、あそこ直接交渉できるかどうかによるね。そろそろ電話があるころだと思ってるんだけど……」

——斉藤がいないと、交渉は誰がするの？

「そりゃ、ルリさんじゃないかと。OSINTオシントよりHUMINTヒューミントだよアゲイッね、萩原さん。あと三十分ぐらいで池内さん出勤して来るでしょう？　状況説明して、ルリさんにユキブン本人攻めてもらっているか、岸二佐に許可取つていてもらえませんか？」

——斉藤。お前ねえ、先輩をアゴでこき使いすぎてるのか思わないの？

画面の向うで萩原が呆れたように言う。

「使えるものは使い倒すようにって教えていただきましたから。あなたから」

——まいったわねえ。言つとくけど、金玉親分はあなたのお友達を助けたって動機じゃ、ルリを動かしていいとは言わないわよ。

「独立構想を後押しするのか、断念させようとするのかはとにかくとして、青山と百合根の同盟が地下四階ビートンから銃火力追放のきっかけになるのであれば、この連合の動きは取りあえず、ウチとしても手放して賛成するべきじゃないですか。たかが、在庫を吐ききるまで、もう少し旨い汁を吸いたって強欲なことを考える輩には、引き時を心得るようにつて釘を刺しとくべきです。」

ユキブン自体はもしかしたら、青山と百合根の連合が、今度の地下四階、第二地球化の構想と直結した情報でない可能性があります。だから、小さい儲け口の消滅に畏怖してるんでしょうけど。けどそんな小口の商いは、ユキブン本社の趨勢にはかわりのないことですよね。羽島精機貿易でしたっけ、窓口は。

だから、この一件が大っぴらに走り出す前にその情報を持てば、ユキブンには大きな商機を掴める可能性を与えることになる。HUMINTに当たって具体的な土産が必要なら、この情報は使えませんか？ 僕のさっきのデータ、説得材料として不十分ですか？ 羽島もユキブンに切られるよりは、秋篠の誘拐犯を切り捨てて方を選ぶと思うんですが」

——オーケイ、オーケイ。もう十分よ。こっちは金玉親父を説得してルリ借りて、ユキブンに第二地球セカンド・アースの情報を流して、地下四階の刀狩りを邪魔しているはずの系列会社に手を引くように説得させればいいのね。

「はい、よろしくお願いします。とにかく、ザコはアタマからの指令で動いているはずですから、アタマになってるところからの情報が絶たれれば、取りあえず動きが鈍るはずです。私のこれ……」

斉藤が首にそつと手をやる。

「岸さんとここで位置情報特定できましたよね」

——建物の中でも誤差五メートルぐらいでできると思っわよ。人が住んでるところ（街区内）なら。

「んじゃあ、SAT（特殊急襲部隊）に居場所流せますよね……。あれ、待ってよ、三上さん。孤立してる百合根がらみの監禁事件に対処するなら、担当部署はそこまでいかないで特捜さんですか？」

タカがため息をついた。

「お前ねえ、警察に突入させて助けてもらうつもりなの？ 強行突撃途中に人質が殺される確率って、統計的にどのぐらいだったっけ？」

斉藤が何か悪い？とも言うように肩をすくめて見せた。

「俺がアクションこなして飛び出そうとして殺されちゃうのと、おとなしく寝てて助けてもらえる前に時間切れで撃たれちゃう確率と、どっちが高いよ、え？」

タカがもつと大きくため息をついて、それから、何も言わずに部屋を出て行った。多分、カートを徒歩で取りに行くには丁度よい時間だ。仕込み完了するのは、丁度九時ぐらいだろうか。斉藤は頭の中で尚もせわしく時間を計っていた。

12・ 果報は寝て待つ（前書き）

以下3章、端折った分、加筆しろ攻撃がきてまして、まあ、端折った自覚がある分、素直に受け止めて加筆予定です。

取りあえずの結末だけでいい方はどうぞ 読み進めてくださいませませ。

いや、ちゃんと書けよな、という人は、連載休止気分でおまちなれ。（忘れてませんから）

12・ 果報は寝て待つ

「ご満足？」

総合端末のカメラから死角になる位置にいる男に向かって萩原はひと言投げた。

「……まあ、初仕事としては、十分だな」

「あら、あなたが褒めるなんて、雪でも降るかしら」

「どこから手をつけていいか分からなくて、途方にくれるだけなら誰でもできるがな。まあ、悪くない……」

萩原はつかつかと歩いて今は主がいない岸の部屋に入った。

「どうしたのアゲちゃん」

総合端末の操作パネルの前にいた沖が、やはりどこか明るく抜けた声で聞く。

「ストレス発散」

萩原はポケットから小銭入れを取り出し、10ユニバコインをつまみ出して、まじまじと見た。

「これで五百億分すると、どのくらいになるのかしらね」

例のモグラ叩きとは名ばかりの、不細工にひしゃげた顔の犬が出てくる古くさいエレメカ台にコインを吸い込ませる。

ミュフンッ。

景気のいい音をたてて、萩原がスナップが利いた手付きで犬をぶちかましていく。萩原について己の部屋に戻ってきた岸がからかった。

「なかなか、名人だな」

「あの子ね……恒例のあなたの課題、一人で何とかしようなんて

しないって言ってたわよ。どんな回答を提出してくるか……予測も付かないわね。ぱつと見、何もかも自分でやりたがるタイプかと思っただけ、とんでもない。人使い、荒いこと、荒いこと」

萩原の手が踊るたびに、情けない声を立てて、犬が凹む^{へこ}。ファンファーレが高らかに響き、曲調が華麗なワルツに変わる。

「こいつらがぴよこぴよこ飛び出してきても、自分で叩きのめそうと思わないっていうのは、かなり変わったキャラクターだな」
ぷつと萩原が噴き出す。

「あなたに言われたら、斉藤もお終いだわね、気の毒に」

頻度と回数と速度が同時に上がって、萩原は早速叩ききれなくなる。このステージになったら、叩けようが叩けまいがゲームセットは近い。エレメカの特徴で、延々とゲームし続けられる仕様にはなっていない。

ひゅー　　るる　　ちん。

相変わらずの、『残念でした』感を満喫できる効果音とともにゲームが終わる。萩原はそのヘッドがコミカルなまでに大きいハンマーで、肩を叩きながら言う。

「月の現状分析については、そうでも、詰めの判断、やっぱり指揮者としてはいただけませんよね……」

岸がにこりともせずに萩原に向けて手を出す。萩原が、ハンマーの柄をエレメカに切つてある台に戻してから、もう一度自分の小銭入れをポケットから取り出す。一枚、十ユニバコインを出す。

「……どうぞ」

「Thank you」

岸はハンマーも取らず、十ユニバコインをコイン投入口に入れる。

バックボートのスコア表示盤の周辺に配置された色とりどりの電球がきらびやかに点滅し、底抜けに明るい音楽が始まる。

ぴよこん、ぴよこんと、飛び出してくる犬は、叩かれないので情けない鳴き声をたてることもなく、機械の作動音が虚しく響く。最初のころに何もしないと、犬は叩いてくれとばかりにのんびり顔を出してしばしそこにいる。

「これを叩かないで見てるってのは、なかなか根性があるな」

岸はハンマーを引っ張りだすがつつんと一発叩きのめした。萩原がぶつくりと笑った。

「自覚が十分にある指揮官としてそこにいたなら、持ち場を離脱するなんて以ての外^{ほか}だけだな、今回、友達と家族みたいなものに降りかかった災難を退けることだけが彼の目的だ。指揮官として機能する能力も経験もある連中が、こぞって斉藤のやりようを是として、乗っかつてるといふことの方が注目すべきだろうね。まあ、そんなものに譬^{たと}えてやるのはサービス過剰だが、劉邦再来というところかな。穴だらけの計画で、頼りなくても、あの面々がっているんだ。まあ、難^{かん}らしく詰めで極めつけの無茶なことを考えたもんだが、今回は死んだりすることもないだろうさ」

岸が斉藤を前漢の初代皇帝の劉邦に準^{なぞ}えたのに、萩原は少し驚きつつも微笑んだ。

「勝ちを千里の外に決することで張良に及ばず、民を慰撫して補給を途絶えさせず、民を安心させることで蕭何に及ばず、軍を率いて戦いに勝つことでは韓信に及ばずなれど、この三人の英傑を見事に使いこなした……、しかるに項羽は范增一人すらつて奴？ ものすごい惚れようですこと」

やすやすと故事を繙いた萩原に応えず、岸は、まだ人を小馬鹿にするようにぴよこり、ぴよこりと飛び出し続けている犬を無視して執務机に戻り、何事もなかったように電ペに今日のニュースを表示させた。

* * *

画面に大寫しになった、プラムこと霧島梅香はどこをどう突つこうとも、髪形も化粧も服装も寸分の隙間なく整えられている。これは個人で頑張ってメイクアップしたというよりはプロにさせたことが明白だ。新京もGMT（グリニッジ標準時）を採用していることを考えれば、どう見ても普通にそういう店が開いている時間ではない。

「やっと捕まりましたね」

斉藤が声を掛ける。

——番組前の打ち合わせしてたのよ。そっちの方の私の出番は今回ポシャったんだと思って。それで、モーニングショーのディレクターが、生出演しろって言うてきたんで……。ああ、もちろん、飛竜の一件についてよ、まあ、することもないなら、仕事でもしところかと。

もう一つの画面の端に映っている応接セットのソファに、待つしかすることがないという雰囲気ではらくの間ずっと沈んでいた霧島松姫が立ち上がった。ものすごい勢いで総合端末に近付いてきた

のだろう、画面に大寫しになった松姫がプラムにかみついた。

——梅香、何を考えてるの？ 信じられない。飛竜が生きるか死ぬかってときに、それをネタに仕事ですって？

——だって、座ってるしかできないことがないんだったら、仕事してたって同じじゃない、姉さん。姉さんだって、記者会見終わったら出番終了でしょ。夜中じゅう起きてたんなら、少し寝たら？ 年なんだし、寝不足は美容に響くわよ。

——信じられない。皆さんが飛竜のために動いてくださっていると、そんなことしてる場合じゃないでしょう？

——じゃあ、私たちがヤキモキしながら座ってたら、なんか飛竜を助ける役に立ったりするわけ？

姉妹喧嘩をされるよりは、寝てもらってる方がいいなと思ったことなどそよとも見せずに、斉藤が割って入った。

「すみません。プラムさん、出番できちゃったんですけど、こっち優先してもらえます？」

プラムが斉藤に応える。

——ええ、もちろん。できることがあるなら、何でも。

斉藤がにっこり微笑んだ。
ぶしつけ

「不躰な質問なんですけど、ユキブン、御存じですよね」

——え？ ユキブンって、あの雪島文高よね。

「ええ、そのユキブン。時間がないので端的に聞きます。プラムさ

ん、ユキブン食っちゃったことあります？」

プラムがどう応えるか待たずに、斉藤はさらっと言ってのけた。

——あれ、食べ物だったわけ？

しれっとプラムが言うのに、斉藤は人指し指でぽりっとな形が変わっている鼻頭を掻いた。

「まあ、食べてなくてもいいんです。仕事で出張でもしてなければ、ユキブンは新^{そうち}京の自宅にいますと思うんですけど、プラムさん、彼のプライベート・コール・ナンバー御存じじゃありませんか？」

——どういう取っかかりかしらないけど、ええ、知ってるわよ。

「よかった。あの、プラムさんとは系統が異なるんですがやっぱりキレイな女性を一人、ユキブンとこに突撃させたいんですけど、手引きしてもらえます？ ユキブンは女性関係派手らしいですよ。もし、こんな時間でも一戦お願いすればホイホイのりますかね」

——他ならぬ斉藤君に確認するまでもないと思うけど、それって、飛竜の今の状態をどうにかするために必要なのよね。あんまりにも方向が違うんで、ちょっと、びっくり。風が吹けば桶屋かって聞きたくらいよ。

夕方のニュースショーので耳に馴染んでいるプラムの声は、ちょっとしつとりと落ち着いた種類の心地よい声で、そこはやはりちゃんとアナウンサーとして基本が鍛えられているものだった。浮ついた噂が絶えない女ではあるけれど、呼ばれた仕事にはきっちり顔を出そうとしているところなどみれば、プロであることは間違いない。

斉藤は飛竜から、自分は松姫も梅香も姉として慕っているのだけ

れど、あの二人同士は、どうにも反りが合わないと聞いていた。確かに、一人ひとりとは知り合う機会があったものの、二人一緒にのところをよく知らなかった斉藤が、ちらつと二人の会話を見ただけで、どこをどう押しても合いそうもないことは見て取れる。

「今はそれ以外のことをしているつもりはないです」
斉藤は請け合った。

——それなら、いいわ。そっち優先。で、ユキブンとくにどんな女を連れていけばいいの？

「ルリという女性です。彼女から連絡をさせます。可能な限りの大至急でユキブンところに突撃させていただけますか？」

——オーケーよ、了解したわ。じゃあ、ユキブンたたき起こすから、ルリさんからのコールはどんなに早くても十五分後ぐらいにしてね。

斉藤が頷くより早くプラムが回線を一方的に切り、画面が灰色になる。

「プラムさん、随分あっさり言うよね。ってことは、プラムさんってユキブン食ったことあるってことかな？ お前、トークショーネタまで守備範囲なのか？」

タカがさすがに呆れて聞くと、斉藤は一般常識の範囲でしようという雰囲気に応えた。

「ユキブンって、食べる女性は食べちゃう主義らしいんだよね。で、プラムぐらいのネームバリューの女性が相手なら、何かと自慢できるじゃん。だったらインタビュー受けるなんてチャンスがあったら、見逃すはずないなと思ったわけ。やっぱり当たりみたいだね。まあ、プラムさん食おうと思っても、並の男じゃ食われちゃうだろうけど

ね」

無駄話はその位できりあげて、斉藤は所在無さげになっている沖^{シヤコ}に言った。

「シヤコさん、聞こえてました？　というわけで、ユキブン行き^{ルト}の道確保したんで、ルリさんにプラムさんに接触してもらってください。百合根のうっかりさんを煽って、第二次山百合戦争を画策して武器密輸で羽島の儲けを確保するより、ユキブン本体にとって第二^{セカンド}地球計画^{・アース}のどこかにポジションをキープする方が大きいと納得してもらってください。まあ、ユキブンにしてもらうことは、秋篠と飛竜を拉致した犯人を切り捨てなければ、羽島を捨てるって、今回の黒幕になってる人物仮称エックス氏をプッシュするだけですから、ルリさんなら朝飯前でしょう」

——分かった。まあ、ルリちゃんは朝御飯ぐらい食べてから出勤してくるだろうけどね。

「朝飯後でもいいですよ。じゃあ、春花、プラムさんのパーソナルナンバー、シヤコさんに流しといて。あ、そうそう。プラムさんに伝言もよろしく。遊び心のあるスタイリスト^{ルナ}さんの知り合いが月に居たら、ここに差し入れてもらえるように頼んで」

——徳永さんと、和田さんの仮装用？

春花に名指しされて仮装という表現をくらった徳永が、スタイリストなんて連中に何とかしてもらわなくても服ぐらい着れると思いつつも、そんなことで憤慨するのは大人げないと気がひけるといふような、結構に複雑な表情になった。

どやどやという勢いで再び登場した男たちから、目の前にこれ見よがしに突き付けられると、銃口というのは不必要にでかく見える。マンガで誇張されて描かれていることがあるが、まさにああいう感じだ。その威圧感は、警察の持ち物でドラマでもお馴染みの、生物の体液だけ瞬時に四十三度ぐらいの高温にして行動不可能にするヒートガンや、五十万ボルトの衝撃がやってくるスタンガンなどに対してしたときとまったく違う。

余程運が悪くない限り死なないという武器と、かなり運が悪くないと生きられない武器という、持っている性質の差なのか、単純にそこから出てくるものが光線だの熱線だのでなく、純粹に物理的なモノだという造りの差からくるものなのか。

「秋篠さん。悪いがしばらく一人でお留守番しててもらうぞ。もう少ししたら、可愛いリトル・森本を連れてきてやるから楽しみにしてな」

瑠璃子は膝枕させていた飛竜の手を、ぐっと掴んで握りしめ、開いている方の腕で飛竜の頭を抱えるようにした。五百億などという要求をするような連中にこれをあつさり渡しては、歩に申し訳が立たない。そんなに沢山の時間を歩にも飛竜にも費やしたわけではないけれど、この子たちの間にある信頼の絆みたいなものは確かなもので、それを断たせるなんて言語道断だ。

ここでも危害を加えられる恐れがないわけではないけれど、少なくともこの連中が狙っている歩がいるよりは、この連中にとってはどうでもいい飛竜の方がマシな気もする。

「いやあよ。私、ドラゴンちゃんが気に入ってるのよ。吉岡なん

かにあげないわよお」

舌つ足らずな、頭の悪い色ばけの女に相応しいいつもの口調で瑠璃子は言った。彼女はこういうキャラクターを自分自身でも、もしかしたら本性じゃないかと思えるぐらいにずっと演じてきた。男に寄り掛かって生き延びてくるには、賢い女より、足りない女の方が都合がよかった。瑠璃子の今までの既に短くはない人生で、過たずそのことを見抜いたのは、茂さんと、カナタ姐さんだけ。

もしかしたら、三番目にそのことに気付くのは歩かもしれない。ハル力は年下だったけれど、いろいろな意味で頼りになる人だった。あの直感で全ての過程を端折って本質にいきなり到達するような、不思議な感性を持ち、その一種の超越している動じなさにはものすごいものがあつた。

己で一端決めたことは気持ちがいいくらい曲げずに押し通して後悔しないあの茂でさえ、ハル力のそういうセンサーみたいなものを非常に信頼していた。歩はあのハル力が残したたった一人の形見なのだから、あれを受け継いでいても不思議でないと思うのは奇怪しいだろうか。

とにかく、頭が悪い女なら、何でもありなのだ。だめでもともと。現況が気に食わないなら、自分のやり方でいちゃもんを付ける。取りあえず人間にとって頭は大事だ。ハル力姐さんだって、頭を吹き飛ばされたら死んでしまうのだ。手や足はこの際後回しにしよう。瑠璃子はますます深く体全体で飛竜の頭を抱え込んだ。

「秋篠の姐さん、そう我が儘言わずに、その手を離してくれないか」「駄目。ドラゴンちゃんは、あたしのなの。吉岡は、さっきの力ツコいいお兄さんにカマでも掘ってもらってればいいじゃないのお。これはあげない」

飛竜にしてみれば、問答無用の勢いで瑠璃子に庇われるのは不本

意だった。女性上位気味の霧島家ではあるけれど、それでも非常に古典的な『男はこうあれ』的な価値観を性根に叩き込まれて育った。曲がりなりにもこういう局面で、女性のスカートに守ってもらったというのは、頭にダメージを負っていてももしかしたらヤバいかもしれないとはいえ、気性に馴染まない。

「瑠璃子さん、いいから離して……」

そつと口になると、瑠璃子は言い捨てた。

「ああ、ドラゴンちゃん、そんなつれないこと言うと、キスするわよ」

「つれないとか……そういうんじゃないで、とにかく離し……」

猛烈な勢いの瑠璃子の口づけで、飛竜の言葉は後半を飲み込まれた。

「オドシ……じゃないって言ったでしょ。もう一度離せなんて言うてごらんさい、もっとすばらしく本格的なやつ、お見舞いするわよ」

かなり本格的にされたような気がする飛竜は、瑠璃子の本格的なキスというものを知りたいような、遠慮したいようなと、複雑に気分がこんがらかって、次に出すべきセリフが咄嗟とっさには思い浮かばない。頭の中が半分ホワイトアウトしている。一方の瑠璃子は絶句している飛竜が可笑しい。瑠璃子は思った。本当にバカは強いわよね、何やつても、みんな呆れたり驚いたりするぐらいで、怒ったりしない。

「秋篠さんよ、今はガキで遊んでもらってる場合じゃないんだよね」
苛つきをにじませて、吉岡の声が低くなる。

「じゃあ、どんな場合なの。ルリコよく分かんないし。どこ行ってもいいけどさ、私はコレ離さないわよ。一人で待つなんてぜえつたにイヤ」

瑠璃子が高らかに宣言した。

* * *

腕が痛いな……と、斉藤は考える。小型のカーットの狭いトランクには、寝返りもうてない。まあ、アクション映画のヒーローのよ
うな行動は、取れないし取るつもりもないから、しびれがきれて動
きが悪くなったところで問題はないのだけれど、何度も繰り返し
痛いのはとことんキライなのだ。徳永の縛り方はタカとちがってそ
こそこ優しく扱ってくれたけれど、やっぱり縛られるというのは、
うん、好きになれそうもない。

取りあえず、やるべきことは全部やった。手ばかりがあつたとし
ても、ここまできたら成り行きに任せるしかない。今のところ不安
材料の一つは、あの飛竜がおとなしく捕まったままでいてくれるか
どうかだ。銃で撃たれたらちゃんと死ぬということを認識してくれ
て、おとなしくされるがままになつてくれてればいいのだけれど、
自分が人質の身分のまま持ち主が変わるだけと認識していれば、あ
いつのことだから暴走しても不思議ではない。変に責任感が強い男
だから、秋篠に対しての負い目やなんやかやで暴走するにできない
という状況が生まれてくれれば、まあ、それが一番いいのだけれど
……。

不思議と落ち着いている。斉藤が本物を見たことのない海。その
波が限りなく静かな状態のことを凧たぎと言うらしいが、心境を譬える
ならばそんなところだ。人殺しを何とも思わない連中の手に、目算
としては一時的にせよ一応囚われの身になる直前なのに、恐怖がや

つてくる気配はない。

瑠璃子の顔を見たい一心で麻痺しているのか、感情の嵐に襲われた反動としてただごとでないレベルにまで鈍ってしまっているだけなのかはよく分からない。ただ、取りあえず飛竜を取り返せれば、後は全部裏目に出てもまあ、まったく何もなかったよりはベターだろう。そう思い定めた途端、気が楽になってしまったのだから、今更、焦れと言われても難しい。

斉藤は徳永が自分を縛っていたときの、凶悪犯を警棒で叩きのめすことの方がよっぽど楽だという雰囲気顔を思い出すと自然に顔が緩んでくる。徳永ときたら、もう一度自分が縛ると楽しそうに言ったタ力を、「お前なんかの勢いで絞めたら、長丁場になったら手首が腐れ落ちちまうよ」などと窘めつつ、「痛くないか？、苦しくないか？ 動悸はしてこないか？ しんどかったらすぐ言えよ」などとうるさかった。

こなれているのか、全く慣れていないのか判然としないというところが、まるで憧れのお姉さんと、初めてSMプレイでもしようかというティーンズみたいで、思い出すと笑えてくる。

流行のティタンスのメンズスーツをバリツと着こなし（自ら装ったというより、プラムの友達とかいうスタイリストのお兄さんに無理矢理され）て、もともと鍛え込まれていい体型をした徳永は、ジム通いが趣味の羽振りがいい企業の社長という雰囲気のを漂わせていた。下品に仕上げるのが苦手なのか、やはりプロの手にかかって若手起業家といった風情になった和田と二人で並ぶと、目指していた新興ヤクザという雰囲気とは遠いけれど、正体不明感が非常にただよっていて悪くなかった。

プラムと池内コンビに、寝起きを襲われて、ユキブンが手を回して武器の密輸で肥えている直接の黒幕に一件から手を引くように指示が飛ぶまでの時間を目算する。全ての背景を読み違えていたら、

そっちの方から火がついた導火線に水をぶっかける目論見は御破算になる。読みが当たってうまく機能したとしても、現場の連中がすんなりとその意向を受け入れるとは考えられない。ユキブンが手を引いても、自分が火種になって走り出している連中は、もう爆弾目指して駆け抜けるしか道は残っていないと思い定めているだろう。「ヤケにさせたらやばいかもね」と、今更ユキブンにまで手を伸ばしたことが、当たりだったか外れ^{ハズ}だったか気を揉まないでもないけれど、軌道修正は既に不可能、これは上手く転ぶように神様にお願いすべきことがらだろう。

それから警察の特捜本部の指揮者に、三上経由で霧島への脅迫は完全にフェイクであり、レディ・サヤコに爆発物など仕掛けられていないことを説明をしてもらうように頼んでおいた。軍は自分の管理する施設にそんなものが仕掛けられている事をそもそも認めないだろうし、認めたとしても警察の爆発物処理班が事に対処する許可をする訳はない。ただインフレータブル・ドームJ3号を封鎖する作業は進めてくれるように頼んでいる。機動隊が出張るのは、物見高い連中を立ち入らせないためだ。万が一、拉致犯が常識を無視して、インフレータブル・ドーム内で生体にのみ作用する光線タイプの武器でなく、地下のように物理的に破壊をもたらす武器を安直に使った場合に備えて、J4号ドーム内は専用の装備をしている者だけにしてもらえるように、沖経由で岸二佐には伝えてもらった。レディ・サヤコは電力の確保のために、霧島の連中がせっせと発電装置の砂掃除をしている間も二十四時間体勢で動き続けている。

レディの荷役に使われる隣のJ3号に注目が集まれば、J4への注目はいろいろな意味で薄くなる。そして、無事（というのは変かもしれないが）に飛竜との人質交換がうまく運んで、秋篠と合流できたら今度は助けに来てもらわなければならないので、それなりの人数がすぐ隣に集まっているのは合理的だと思う。人質に取られた民間人の救出の目的で、トウバクの岸と特捜の誰かから依頼がいけ

ば、軍としても軍事行動の拠点ならともかく、ただの荷役用施設へ、警察の立ち入りをかたくなに拒む事もないだろうという目算もある。

全ての情報は春花に集まるように頼んできたし、あいつは自分と同じで管制気質が身についている。どこに情報を流してどう動いてもらったら、計画通りにことが運ぶかはちゃんと自分の脳味噌で判断できる奴だ。だから、そっちも任せて問題がない。いろんなところを雑に道を作ってきたので、いろいろなところでトラブルが起こる可能性は十分だけれど、なあと、自分たちは学生時代に何度もトラブル・バーゲンで鍛えられてきている。最終的な目的さえちゃんと分かっているれば、どんな道を通っても問題はないのだ。春花は春花のルールで動けばいい。

斉藤はざざと頭の中でおさらいをして、一つため息をつく。いろいろあったけれど、後はなるようになるしかないか。

こういうの何といったつけ。そうそう、人事を尽くして果報は寝て待て？

擦じれた腕のしびれるような痛みがあっても、目を閉じるやいやなやつてきた睡魔は強烈だった。それに自然と身を任せながら、斉藤はそんなことを考えていた。

飛竜は、頭に衝撃を受けた所為で戻したのとは、全く違う理由でもう一度吐き気を堪えなければならなかった。至近距離で頭を撃ち抜かれるというものは、アニメだの映画だのでこそよく見るものだったが、本当に目の当たりにするのは、もちろん生まれてこの方初めてで、はつきり言つて、最後にしてもらつて十分なほどにえぐいものだった。まがい物でない血の色、脳と混ざると何とも言えない生々しさ、そしてむせ返る様な臭い。部屋じゅうに――床だけでなく、壁と言わず天上にまで――飛び散つた肉々しい赤。

飛竜はとつさに目を逸らして直視を避けようとしたのだけれど、あの瞬間が、網膜にやきついてしまった。

怖いもの見たさという単語が世の中にはあるけれど、とてもじゃないけれど、その方を見ようという気にはなれない。確かめる為だったとしても、御免被るごめんかぶるという感じた。この自分にも恐ろしいほどの量がくつついてきたその赤いものを払いのけようとしたけれど、その触つてしまった瞬間にきた、液体とは程遠い質感に思わず戻しそうになった。かなり気持ち悪い。幼い子供がこんな光景を目の当たりにしたら、そりゃあ、忘れなきややっていけないに違いない。

今まで自分たちに向かつていた銃口が火を噴いたとしたら、自分もこうなつていたのだろうけれど、飛竜はつい直前まで自分たちを脅していた吉岡と、彼にへつらつていたチンピラ二人分の脅威が取り除かれたという安堵感よりも、まるで躊躇うことすらせず二人をあの世送りにした男の理不尽さに対する怒りを強く感じていた。

「助けてやったことになるだろうが、お二人さんともそんなふうに睨むなよ」

男——吉岡は小杉と呼んでいた——が、物騒な道具を小脇に抱えて部屋に入ってきたとき、銃器マニアでもない彼には、それが何なのかを判断できなかった。拳銃では明らかに違う大きさ。けれどイメージにあるライフルというところ、途轍もない遠距離から暗殺者^{ヒットマン}が狙いを定めて一発必中みたいなので、室内で構えられるものであるとはとても思えない。

話の流れから、当然その男は、自分を斉藤と交換する場所に向かうように、瑠璃子言うところも受け専の吉岡を促しに来たのだばかり思った。その何だか分からないなりに、物騒さでは吉岡たちが構えていたハンドガン以上の雰囲気^{かも}を醸^かだしている武器に、まずまず逃げ出すチャンスを塞がれたようにも思えたし、それ以上に、人質交換の現場で、斉藤を撃ち殺してしまうつもりなんじゃないかと、恐怖を覚えた。

吉岡もその小杉の道具の大仰さに驚いたようだった。

「小杉、お前なんだその大……」

多分『大袈裟な』と言おうとしたのだと思うけれど、そこまで吉岡が言い終わらないうちに、小杉はそのゴツイ武器を小脇に抱えて構えるやいなや、吉岡目掛けてぶっ放したのだった。そして、飛竜が思い出したくないことに、吉岡の頭部が爆発したように見え、それがあつた場所から粘度がやたらと高そうな液体が四散した。

「……ショットガン……」

傍らの瑠璃子がつぶやいたことで、そういう名前の武器なんだろうとは見当が付いたものの、その意味するところが分かったのは、次の瑠璃子の言葉が紡がれてからだった。

「……コスギだっけ？ 吉岡、アンタのことそう呼んでたよね」

男が瑠璃子につまらなそうな視線を投げる。答えを待つまでもないと、瑠璃子は続けた。

「十年ぐらい前に……月^{ツキ}で女を一人、撃ち殺した覚え、ないかしら

……」

小杉は相変わらず、応えようとしない。

「そいつで頭吹き飛ばすのって、アンタの趣味？」

十年前に頭を吹き飛ばされた女。そこまでキーワードが出揃って初めて、飛竜は瑠璃子が、この眼前にいる男が斉藤の母親を殺した犯人かどうかを問い質^{ただ}しているのだらうと分かった。もし答えがイエスならば、幼かった日の斉藤を痛めつけたのもこの男なんだろう。飛竜は改めてまじまじと、小杉を見つめた。

「……だつたら、どうする？」

瑠璃子がすつと低重力を使いこなしている体捌きで素早く動いた。移動方向からして、例の放射状に飛び散った血の発生源に向かったのが分かったが、飛竜はその方を見ることはできなかった。

「そんなの答えは『殺してやる』……に、決まってるでしょ」

吉岡の手からこぼれ落ちたハンドガン拾うと、瑠璃子はそれを飛竜に向かって放り投げ、素早くもう一つの血溜まりに飛んでチンピラの持ち物の方を奪おうとする。吉岡と違いチンピラの方は銃を握りしめたままだったので、瑠璃子はそれを取り上げるのに手間取った。

「ドラゴンちゃん、それぞれで、そいつ狙って。撃つのは私するか、堅気^{カタギ}さんは、そんなことしないでいいからね」

かなり汚れていたものの、瑠璃子が着ていたのは、もともとは白いスーツなのだから、血溜まりで遺体から銃を奪おうとしている姿はなんとも言えず非現実感がある。手元までたどってきた銃を受け止めてはみたものの、それを構えて人に向けて放つという立場にあるという実感がまるで沸かず、飛竜は呆然と立ち尽くしていた。

「ドラゴンなんて威勢いい呼び名だが、素人^{シロウト}さんには荷が勝ち過ぎるようだぜ、秋篠さんよ」

小杉のバカにし切ったような言い方が勘に触っても、どうしても

それをその男に向けることが飛竜にはできなかった。間抜けのように、その冷たい金属の触感に怯えていた。瑠璃子が叫んだ。

「ドラゴンちゃん、そいつがハルカ姐さんやったんなら、生かして逃せるもんですか。そいつは、歩ちゃんを痛めつけた犯人かもしれないでしょ、あなたに殺っちゃえなんて無茶言わないから、協力ぐらいしてよっ」

この男が、幼い日の斉藤に残酷な暴力を加えた犯人かもしれない。その瑠璃子の言葉に、何とか銃を構える体勢にもっていきかけたところで、小杉が首を振った。

「俺には、ガキをやってイっちゃまうような悪趣味はないぜ」

斉藤が生きている以上、『やる』という言葉に『殺』を当てはめることはナンセンスだろう。ついでに『いく』んだから、その意味するところはかなり狭められる。それに初めて思い至り、飛竜は一瞬で愕然とした。斉藤が男ということもあって、暴行という言葉に殴られたり蹴られたりという意味以上を読んでいなかったのだが、そうであれば、そんなことをした外道には、のうのうと息をしている資格なんぞあるはずもない。

飛竜は自らの意志で銃を構える。撃ち殺してもいいと思えるぐらいに、腸が煮えくり返っているのを感じた。

「だから、俺はそんな趣味はねえって言ってるだろ。まあ、森本的女をやってねえとまではバックレねえけどな……」

面白くもなさそうに、乾いた笑い声をたてる。

「あーっなんで、こいつはこう離さないのよっ」

叫ぶように悪態をついてから、取り上げることを諦めたのか、瑠璃子は膝立ちになって拳銃を握りしめている腕ごと抱え込んで銃口を小杉に向けた。

「ははっ、秋篠の姐さんはおっかねえな」

小杉が茶化すと、瑠璃子はそのままとリガーを思い切り引く。乾いた音が部屋に弾けたが、小杉には掠りもしなかった。狙いをつけるには体勢が悪すぎるということだろう。瑠璃子が舌打ちをするのが聞こえた。

「銃^{チャカ}向けられちゃ、死にてえらしいなつつって撃つのが俺のセオリなんだがなあ、雇い主から秋篠さんを生かして解放しろって言われてるんでな、腕吹っ飛ばすぐらいにしとか、ええ？」

飛竜は本当に腕を吹き飛ばしかねない勢いの小杉に、心底から怖気を震った。こいつらは、自分たちと同じ種類の人間では決してない。

「腕が吹き飛んだら、失血死する確率が高いんじゃないか？ 生かして解放しろっていう命令に背いたことにならないか？」

この言い方が妙に斉藤臭いなど、飛竜は自分でも思う。小杉があとさり同意して、ショットガンの持ちを変え、銃口が天井を向く形で抱え直した。ほっと気が緩み、飛竜も構えていた腕を弛緩させると、銃口は床に向いた。

「まあ、そりゃあそうだ。お前さんたち、運がいいんだか、悪いんだか」

瑠璃子が絞り出すような声で叫んだ。

「ハル力を殺したあんたを目の前にして逃がすぐらいなら、殺された方がましよ」

小杉は床を蹴り、尚も遺体から銃を奪おうとしている瑠璃子の傍まで一瞬で移動すると、遺体を蹴飛ばすようにして瑠璃子からもぎ取り、抵抗することも最早ない遺体の腕を踏みしめて床に押しつけた。瑠璃子はその銃を諦め、飛竜に突進してきた。

「それ、私に寄越しなさいっ」

今の瑠璃子にこれを持たせたら、瑠璃子は無謀にも小杉に向かう

だろうし、小杉もこれ以上発砲されたら、雇い主とやらに正当防衛を主張して撃ち殺しかねない。瑠璃子が死んだら、斉藤は悲しむだろう。飛竜はとっさに体を傾けて銃を小杉に向かって放り投げた。

「何てことするのよっ、ドラゴンちゃんの大間抜けっ」

瑠璃子が怒鳴った。

「……瑠璃子さんが死んだら、斉藤が泣きますから……。こいつは、貴女がこれ以上手を出さなければ、貴女を撃ち殺す口実が持てませんから」

怒っていたはずの瑠璃子の顔が半泣きになった。

「バカなこと言わないでよ。こいつらのしたこと、極道以下の畜生なんだから。息の根止める方が世のため、人のためなんだからあつ。殺せるの、今しかないかもしれないなかつたのに……」

「法に任せましようよ。貴女が手を汚すことはない」

勢いよく飛んできた瑠璃子を受け止めて抱き抱えるようにしながら飛竜が言つと、瑠璃子は間髪を入れずに否定した。

「警察^{マッポ}なんか、何ができるっていうのよ」

少なくともこの男は、今自分たちを殺すつもりはない。それどころか、雇い主の意向によって生かしておくと言っているのだ。目の前で二人も今の今まで生きていた人間が死んでいるのだ。これ以上見たくない。

「それでも……、貴女が殺しちゃ駄目だ」

「それでも男なの？」

拘束から逃れようとするように暴れようとした瑠璃子を、飛竜はもつときつく抱きしめた。

「貴女が殺しちゃ駄目だ」

同じ言葉を繰り返す。

「……もう、これだから素人^{ソウジ}さんはキライなのよっ」

瑠璃子はそう言い捨てると、飛竜の腕の中で啜り泣き始めた。そ

して、そうしたが最後、堪えられなくなつたのか、弱々しい嗚咽おえつだつたものが号泣に変わっていった。飛竜は瑠璃子もまた斉藤と同じで、本当の意味で泣いてきていなかったのではないかと思えてきた。その体を抱きしめていた腕の力を抜いて、柔らかな抱擁にかえたところで、瑠璃子はもう暴れようとはしなかった。

「ふん、つまんねえ。ババあ相手にメロドラマかよ。趣味悪いな」
小杉が吐いて捨てるように言う。

「雇い主つてのは……何をしようとしてたんだ？」
真つ当な疑問を、そのままに飛竜は口にした。

「お前アホか。それいっちゃ守秘義務に違反するでしょうが」
守秘義務などという、常識的な単語を持ち出されて飛竜は苦笑する。こいつらにもそんなものがあつたんだ。

「とにかく、雇い主は、この一件から手を引くそうだ。後腐れのない形で、お前さんたちを解放しろという命令でな」

飛竜は呆れる。

「だからって仲間を殺すのか？」

「吉岡は百合根のメシを食っていた。それが棗の意向を無視して走り出してた。俺が手を引いたところで、あつさり路線変更して秋篠の姐さんを解放するとは思えねえわな。まあ、実行犯の吉岡が死体になりゃ、棗のメンツも立とうつてもんさ。手間を省いてやった分、棗からは礼状の一つも貰つていいよな、秋篠さんよ」

瑠璃子が首を振る。

「小杉とかいったね。次に会うときは、絶対にそのドタマ、吹き飛ばしてやるから、覚悟しとくんだね」

「おお、おっかねえ。退散すつか。そうだ、ドラゴンちゃん」

小杉まで茶化して自分のことをドラゴンと呼んだので、飛竜は憮然とする。

「何ですか？」

小杉が車のキー^{カイト}と思しきものを投げて寄越す。

「ここを出たところに停めてあるやつ^{ナビ}のキーだ。ナビ入ってるから、どこにでも好きなところに逃げればいい。俺はこれでも専門家^{プロ}なんぞでな。金にならねえ殺しはしねえ。吉岡の手下を全部片づけてやるような親切はしてねえんで、頑張つて車まで辿り着いて逃げるんだな。ドラゴンちゃんの好きな警察なんかも近くて悪くねえぞ」

「ありがとう、とでも言えればいいか？　けど、その前に……一つ教えてくれ」

「礼なんぞ要るかよ、阿呆。なんだ？」

「吉岡が俺と斉藤を交換するためにノコノコと出掛けていくつもりだった場所はどこだ？」

「おや、泣かせるね。自分の安全も確保しきれねうちに、お友達の心配かい？」

飛竜は、それには答えなかった。言わなくても分かることじゃないか？　自分をネタに霧島を脅そうとしていた人間が、斉藤を拘束しているというのだ。人を殺すのが平気な人間は、何人殺しても平気なのだというおぞましい事実を、今小杉という男に見せられたばかりなのだ。斉藤の自由を奪った連中がそんな連中でないなどと、誰に言えるのだろうか。すくなくとも自分が行くことで斉藤が解放されるなら、自分がそこにいくことに何を躊躇う必要があるのだ？

答えない飛竜を見て、小杉が肩をすくめた。

「青すぎて笑えてくるな。J4号ドーム……」

飛竜は別の意味でビクッと背中が震えた。インフレーター・ドーム^{ドーム}つつのは、薄壁一枚の向うが真空の、月面への出入り口だ。

「向うは五百億吹っ掛けるような悪党だぜ。持っていくか？」

「からかうように、小杉がショットガンを振り回す。」

「ドラゴンちゃん」

腕の中にいた瑠璃子が凄む。

「受け取りな。あいつ、蜂の巣にしてやる」

飛竜は本当に瑠璃子があの銃を持ったら、即座に小杉を肉片に変えるだろうと思えて、とんでもないと首を振る。今の瑠璃子に武器を持たせるのは絶対に勘弁してもらいたい。

「要りません」

飛竜が即答すると、チツと瑠璃子が舌打ちをするのが聞こえた。奇妙なものでも見るように小杉が確認する。

「誘拐犯なんて、武器持つてるに決まってるぞ。素手でどうにかできる相手じゃねえぞ」

小杉が親切ごかして言うのに、飛竜は返した。

「俺が世界で一番キライなもの……知ってますか？」

「ほぼっ世界で一番キライとききましたか。人殺しの道具だって言うんだろ」

小杉が交ぜつ返すのに、外れというように首をふりつつ答えた。

「防護服なしで真空に行くことです」

瑠璃子が不思議そうな顔になる。

「命令されたって俺はそんなもの……、そんなもの絶対に、インフレ・ダブル・ドームで使いませんからっ」

飛竜は断言した。

* * *

「どこかで下ろします。瑠璃子さん」

ようやくカートを走らせ始めた飛竜が言つと、瑠璃子が無然とした表情になった。

「あのね、歩ちゃん助けに行くんでしょ。なんで私が待つてなきやいけないのよ」

「危険ですよ」

飛竜が言つと瑠璃子がちよつとむくれたような表情になった。

「分かつてる。で、ドラゴンちゃんどうするつもり？」

「分かりません」

カートのナビを起こして、オートクルーズに設定した所為で、飛竜はハンドル操作から解放される。一難去つたに過ぎず、まだひと山前にでかいのが聳^{そび}えているのだけれど、一応の緊張がとれたのか、復活してきた頭痛と吐き気に思考力を奪われているのを実感していた。

「ドラゴンちゃんって、めっちゃくちや頼りなあい」

瑠璃子が文句を言う。

「頭……痛いし……」

飛竜の言葉は本当にしんどそうなものだった。そういえば昨晚には頭を強打してかなりの出血をしていたのだ。頭に深刻なダメージがいつていたら、本来は動くべきではないのだ。

「あ、そうだった。随分動いちゃったし……大丈夫？」

「……ダメかもしれないです。気持ち悪いし……」

瑠璃子はあまり得意ではないものの、一応運転はできるので口にした。

「運転、変わろうか？」

「オートですから」

「やっぱり警察か病院行こうか？」

瑠璃子が言うのに、飛竜はへらつと笑って首を振った。

「取りあえず、あいつらにシャトルで突っ込むと約束したんで……」

「……ドラゴンちゃん、これカートだけど」

「まあ、よく考えたら、シャトルはインフレーターブルドームを飛べないし」

思わず瑠璃子はぷつと噴き出した。

「何それ」

飛竜はガンガンしてくる頭痛と戦いながら、考えた。J4ドームはいつも月面への出口にしているJ3の隣だろうから、基本的な構造は似ているはずだ。入り口になる一本道の通路には、エアロック形式で封鎖できる扉が五枚。IDを表示して開けてもらう必要があるのだが、そんなものは今は斉藤を拘束している連中が解放してくれているはずだ。もし、通れなければ通れないで、そこで待つしかないのかもしれないが、行ってみなければ何とも判断できない。

『目的地周辺です。新たに目的地を設定するか、手動に切り換えるか選択してください』と、機械音の雰囲気たつぷりのボイスがしゃべる。マンライクに徹するのが好きな人間も多いけれど、今はない吉岡はこういうものが好きだったのだろうか。

飛竜はあれを思い出すとやってくる別の吐き気に耐えるために唇を強くかみしめた。そして、ドームゲートを睨む。誘うように、その厚い扉が左右に広がっていく。穴。真空の世界と、その扉一つをくぐるたびに近くなる。はらわたがギュウツと別の恐怖に握まれるけれど、こんなところで、今更ひけない。

オートのスイッチをオフにすると、深呼吸を一つ追加。飛竜はアクセルを踏み込んだ。

——来たみたいですよ、徳永さん。一台、関係者じゃないカートが近付いてきます。

カートの運転席には和田が陣取り、助手席には徳永が乗っている。登載してある無線機のスピーカーから、三上の助手をさせられている金田の声が聞こえる。

——どうします？ 徳永さん。

「そのまま進行させてくれ」

せつつかれて徳永が指示する。

——了解しました。気をつけてくださいよ。

「引き込んだら、J3の連中に指令。J4を封鎖」

——了解、徳ちゃん。可能な限り、殺すなよ。

今度は三上だ。

「当たり前だ」

徳永が短く答えた。

目の前で分厚いゲートが開いていく。

「ドラゴンちゃん。歩ちゃんを攫った連中って、どういうツテもってるんだろうね。軍の施設だったよね、インフレータブル・ドームって」

「軍……でも、荷役の施設ですから……。買収される奴も一人や二人はいる……のかな」

金属の壁がチューブ状になっている。背後の扉が完全にしまってから、ゆっくりと進行方向の扉の合わせ目が緩んでいく。

「ドラゴン……ちゃ……。スピードはや……。すぎない？」

「瑠璃子さん、おります？」

「降らないっ」

瑠璃子のその子供っぽさを笑いたかったけれど、助手席に瑠璃子

を乗せたままなのは、判断として最低じゃないかと思ったりした飛竜は、奇妙な形に眉を歪ませただけで前に再び視線をやった。

「あのさ」

瑠璃子が再び問いかける。

「突っ込むって言うてたっけ。……マジ？」

「……まあ、大丈夫、正面にある程度の衝撃があれば、バブルバツグが作動するはずだから。シートベルトしてればダメージはくらないはず」

瑠璃子は黒目だけでカートの天井を仰ぐ。どこまでホンキで言うてるんだろつか、この子は。一応していたシートベルトを、もう一度確認してみる。確かに正面衝突すれば、瞬時にカート内は弾力性に富んだ泡で満たされて衝撃はそこそこ吸収されるだろうけれども、頭にダメージを受けている飛竜にとっては、あまりいいことではないような気もするのだけれど、今更止めたところで止まるんだろうか、この男は。

——徳永さん。カートの速度落ちません。突っ込んで来るかもしれない。

「人質がいるのか？」

——逆に速度上がってるんですけど。

「キチガイかよ。勘弁してくれ」

カートの扉を開けて、和田が片足を地面に付ける。彼はいかにも手に馴染んでいるという形で狙撃銃を構える。もちろん、軍人ではないので、無力化することが第一である。致命傷となる部分に向け

て発砲することは基本的に余程のことがない限りしないが、まあ、それも成り行きによる。

「一般タイプのカートか？　だったら、後部座席にいてくれたらバブル作動させてもいいけどな」

徳永がぼつとりとつぶやく。霧島飛竜が斉藤が今そうしているようにトランクに積まれているなら、トランク内はバブル充填対象ではないから、衝撃によって深刻なダメージを受けてしまう可能性もある。霧島飛竜がシートにいるなら、最悪運転手を射殺して、カートを高速のままぶつけるのもありかとソロバンを弾く。

「徳永さん、頼みます」

徳永が助手席を降りて和田の横に湧いて出ている。手には彼の今の得物であるスコープを構える。長年狙撃手として鍛えた徳永も、今は肉体労働は若手の狙撃手に任せて観測手としてサポートする立場だ。

「悪いが、最悪、運転手を狙うぞ」

人質の安全の為とはいえ、人殺しをするということは、やはり普通の人間にとっては負担が大きい。

和田が素直に小さく頷く。警官の資質として、徳永に敬意をこれっぽっちも抱いていない和田だけれど、観測手の的確な指示があった初めて自分たちの狙撃は精度を増す。観測手としての徳永には、和田は少しの文句もない。

——もうすぐ最終ゲート開きます。

金田の声が響く。徳永はスコープを構えた。

（霧島……飛竜？）

最終ゲートに隙間が空いた瞬間から、スコープの観測が始まる。逆光で見にくいけれど、速度を保ったまま突進してくるカートの運

転席にいるのは、どう見ても霧島飛竜その人で、徳永は啞然とする。
しかも、隣に……

（秋篠……瑠璃子……じゃねえかつ）

「和田っ発砲中止。取りあえず、安全確保っ」

徳永は和田のスーツの襟を掴むと、強引にカートから引っ張って建物の影に移動を開始した。

「ねえ、速度上がってるけど」

ますます加速するカートの助手席で瑠璃子の声がうわずっていた。

「突っ込むんで……」

何事もないというような飛竜の声。

「直前でよけるとかするよ……ねえ、ドラゴンちゃ……」

「男は曲がったことは、大嫌いなんですよ……」

「忘れないで、これ、シャトルじゃないよっ」

瑠璃子の泣き言を聞いて飛竜はちよつとだけ笑った。

「バブルタイム行きます。恐かったら膝に頭突っ込んで安全姿勢ど
うぞっ」

目の前で銃（多分これはライフル）を構えている男たちは、誰が
どう見ても高そうなスーツを粋にまとって、金には不自由してない
感にあふれている。霧島から五百億ぼったくろうなんざ、しかも斉
藤をぶん殴って苛めたやつなんか、粉碎してやる。

冷静な徳永と違って、飛竜には衝撃吸収装置のバブルバッグがト
ランクに仕掛けられていないことなぞ、まるで配慮がなく、カート
に突っ込む気十分だったのだが、銃を構えていた男たちが素早く逃
げ出したのを視認すると、カートではなく男たちに突っ込む方を

選んだ。

「ドラゴンちゃんっ！　あなた、曲がったことクライじゃなかったのっ」

急にハンドルを切った飛竜に、膝の間に頭を突っ込むという安全姿勢のまま大きくふられた瑠璃子が文句を言う。

「目標に対しては真っ直ぐなんですっ。行きますっ」

和田を引きずった徳永が建物に飛び込むのと、建物の入り口に飛竜のカーツが突っ込んだのと、さて、どちらが早かったのか。

——徳永あつ、一体どうした？　答える。

トランクの中ですやすやと眠り姫状態になっている斉藤には、スピーカーから盛れてくる、悲愴がにじむほどに徳永を呼ぶ三上の声は、全く聞こえていなかった。

終章みたいなもの　くモグラ叩き回答　斉藤版く

ごくごく小さなころ。

世の中には、余りにも馬鹿ばかりが溢れていると思っていた。

鬱陶しいと、思っていた。

そして今も、世の中には馬鹿ばかりが溢れていると思っている。
あのころと違うのは、自分もその中の一人だと分かっていること。

馬鹿だという許しがあれば、それが賢い選択ではないと分かっているてもやるのだ。必要だと信じれば、どんなに愚かなことでもやってみようと思える。だから、愚かであるというのは、言い訳じみて聞こえるかもしれないけれど、今を変えていく力なのだと思う。

過去に味わった痛みを覚えていることができないから、懲りもせずに挑戦しようと思える、向かっていける。

もしも完全に忘れることができなくても――、耐え難いと思われた痛みすら、思い出という花に彩られた風景になる。だから、どんなに辛く思えても大丈夫なのだ。時間がゆっくりと傷みを癒してくれる。

紅い花、紅い花。咲き誇る紅い花。ずっと微笑んでいる優しい思い出……。

みんなも自分も、ここに……大切なのは……、多分それだけ。

* * *

飛竜が次に目を開けたとき、一番最初に飛び込んできたのは、三雲の顔だった。それと隣にはタカの顔。

「分かるか？ キリーちゃん」

手を三雲に握りしめられているのが分かる。

「骨折はしてるみたいだけど、脳味噌は無事だよ。お前の頭、頑丈だよなあ」

三雲が何となく泣いているような気がしたけれど、それでも状況を把握できない。霧島を脅そうとしていた連中目掛けて突っ込もうとカートのアクセルを踏み込んだところまでは記憶にあるけれど、あとは予測通りバブルバッグに包まれて行動の自由を制限され、後はさっぱりはつきりしない。病院らしいところを見ると、自分はどうやら普通に治療してもらえるところにいるらしい。

「瑠璃……さんは？」

助手席に乗っていたはずの瑠璃子のことがまず気にかかる。

「外傷はないみたい。一応、大事とって入院してるし、カートが大破してるんで、一応検査ぐらいするみたいだけど、意識も失ってなかったし、大丈夫じゃないかな……」

タカが短く説明する。こっちの顔は別に涙っぽくもない。冷たいんだか、なんだか。それでも、微笑んでいる顔に落ち着く。

「斉藤……は？」

「あれも一応怪我人だから、ちゃんと手当て受けさせてる」

「一応って、どういうことだよ」

「まあ、鼻骨骨折だけなんで、お前の頭蓋骨骨折よか、軽傷だろ、

多分」

しれつと高柳^{タカ}は言う。が、こまかい成り行きが全く分かっていない飛竜には、その高柳がなんで視線を逸らすのかがよく分らない。「無事なのか？」

「もともと無事だよ」

高柳は説明するのが苦手なので、簡単に済ませようとする。かすかに飛竜の神経に、『もともと』という響きが触る。

「……どういう意味だ？」

「別に斉藤は攫われてなんかいないし。というか、飛竜をネタに霧島にオドシかけて、人質交換させようなんてめちゃくちゃなアイデア考えたのあいつだし……」

そのめちゃくちゃ考えたのが、そもそも自分であることをすっかり忘れてタカがそんなふうの説明したので、飛竜はがっとな身を起こそうとした。が、三雲の断固とした手が優しく肩を押し、仕方なくおとなしくベッドに戻される。

「一応内出血もしてる。ざっと検査の所見で、嘔吐もめまいも脳震盪^{とう}性だろうつて医者は言っとったけど、まあ経過観察をかねて四、五日は安静だそうだ……。一応、姫が来るって言ってたぞ。おふくろさんと竹ちゃん、大気圏外に出るのは無理だからだつてな」

「げ……、松姉も仕事忙しいだろうに……」

長姉が来てくれるのはありがたいけれど、瀕死だったりしたらともかく、軽傷なんかだった暁には、どうせ時間をとらされて迷惑だとか何とか、たっぷりと厭味を言われるに決まっているのだ。ちいねえのプラムは葬式でもないかぎり仕事を優先だから、いつそのことと楽なのだけれど、あとの二人は中途半端に鬱陶しいから困る。正直にそんなことをいったら、傷口に塩でも塗りかねない連中だから、黙って愚痴を聞くぐらいしかすることがないのだけれど。大気圏外で、地球大好きな竹ねえまで来ないのが、唯一の救いというやつだろうか。

「徳永さんが、呆れてたよ。幾らこつちが武器をかまえてたからって、突っ込んでくるなんて元気すぎるって」

高柳が言うので、飛竜はあのしゃれたなりの二人組について思い出す。

「徳永さんって……誰？」

「お巡りさん。一応、斉藤の読みだと、飛竜は誘拐犯に連れられてくる予定だったんで、いざってときは犯人を狙撃するつもりだったみたいけど、よりによって救出するはずの飛竜がハンドル握って突っ込んできたんだもん、ビックリだよねえ」

他人事という勢いで高柳が笑った。自分が突っ込んだのが、斉藤を攫った犯人でもなんでもなく、救出に来てくれた警察官だと聞かされては、飛竜は落ち着かない。

「その人、何てか、……無事？」

「ぴんぴんしてる。さすが腐ってもホウキって感じかな」

ホウキという言葉に、^{めいじ}箒を当然思い出し、飛竜はげっそりくる。

三雲に今なら謝ってしまえるだろうか。三雲は握っている手を離そうとしない。触れ合った掌から温もりが伝わってくる。

「おっちゃん……」

「なんだ？」

「俺……」

コワイノの四文字ぐらい、ちゃんとさえなくてどうする？ 飛竜は口から絞り出そうとする。今がチャンスだ。

「……レディーのこと……なんだけど」

とたん、三雲がゲラゲラと豪快に笑った。飛竜は面食らう。

「聞いた。お前、船外作業怖いんだってえ？ で、目エ瞑って耐えてたんだって。ド阿呆だな。だれでも苦手はあらあな。言ってくれりゃ、掃除機操作にまわしてやったのに」

（聞いたって……まさか……タカ？）

飛竜が睨んだのに気付いて、高柳は慌てて違うというように首を短いサイクルで振って否定した。

「……じゃあ誰だよ」

「そりゃ、データーマン……」

* * *

「うん、御免。いろいろありがとう」

斉藤は再び戻ってきた病院のベッドの上で、取り戻した自分の携帯端末で春花と話していた。暢気に眠っていた間に、飛竜も瑠璃子も安全な場所に帰って来ていた。

春花からことの成り行きを聞いた。斉藤が人質交換の場所として設定したJ4号ドームにカートに乗ってやってきたのは、飛竜と瑠璃子だけ。瑠璃子の説明によると、誘拐を実行した犯人の一人が、ほかの実行犯を射殺したという。ユキブンから手を回したことが、極道とはいえ何人かの人間の命を断ち切ったという結果を導いたなら、やりすぎたと言うべきかもしれないが、結果、飛竜と瑠璃子が助かったなら、気にするのは止そうと思う。

自由になった二人がそのまま逃げもせず、何者かに拉致されているはずの自分を助けようと、現場にやってきたらしいのは完全に想定外。犯人を狙撃しようとしていた徳永が（警察官としては、自分を素直に犯人にくれてやるつもりはなかったということだろうか）運転者が飛竜ということに気付いて、狙撃を取りやめて近場の建物に逃げ込もうとしたところに、飛竜はカートごと突っ込んだらしい。まったく、現場にいながら見逃したのは惜しいことだった。それに

しても本当に飛竜らしい。

——まったく。本当にあんまり心配させないでよ、斉藤。

春花のちよつと怒ったような声が、聞き慣れていて心地いい。

——こっちは頑張って女の武器総動員でさあ、泣き落としまでして五日も休暇確保したのに、あっさり片づいちゃったわよねえ。でも、何か…… すつきりしないわよね。まったく、飛竜の自爆落ちじゃあ、解決しましたって気分には浸れないじゃない。

「落ちつつ笑い話じゃないんだから……。ところで、ねえ、春花、仕事にすぐ戻りたい？」

——別に、あれだけ大騒ぎして確保した休暇だから、今更切り上げるのも、何か腹立つから寝てようかなと思ってるけど。

「寝てる間に、ちよつと考えついたことあるんだけど、ついでの協力しない？」

——悪巧み？

春花の声が嬉しそうに、ちよつと艶を帯びる。

「うん、12時間耐久モグラ叩きについてなんだけど」

——何それ。最初っから説明しなさいよ。

「ちよつとやつつけなきゃいけない課題なんだけどさ、一人でそんなことできるわけないじゃん。この非力な俺にさ……」

——あなたは脳味噌マッチョなんだからさ、それで体までイカしてたら、全然かわいげ無いじゃない。その位で斉藤は丁度いいと思うよ。

「俺だつて一応男なんだからさ、それ全然ほめ言葉じゃないよ……春花」

斉藤が文句を言う。くすくすという春花の笑い声が、携帯端末から洩れてきた。

* * *

あのね、歩。私思っただけど。

——なあに、ハルカ？

あなたねえ……目的を果たす為なら手段を選ばないところってるじゃない？

——そうかな。

うん、だからね。あなたは真っ直ぐな人を友達にするといいと思うわよ。

——真っ直ぐって？ カバさんみたいなアホってこと？

そんなこと言うから、樺崎に嫌われるのよ。

——僕はカバさん好きだけどなあ。

知ってる。だけど、あなたの好きって、伝わるの難しいよねえ。
誰に似たんだか。

——あいつじゃないよね。

また、茂さんにそんなこと言うんだから。とにかく、約束。あなたは真っ直ぐな人を友達に見つけるの。そしたら、あなたは間違ったことしなくて済むと思う。

——メンドクサイこと言うよな。ハル力は。

約束して。ね。あなたが自分の欲のために突っ走ったり、樺崎みたいに茂さんのような極道に惚れちゃったら、ホント手におえないわ、きつと。

——やっぱりあいつは極道なんだあ。

嬉しそうに言わないの……。歩、本当に困った子ね……。

いい、約束よ。あなたは自分の為に、自分の頭を使っちゃ絶対だめよ。あなたは大好きになった大切な人のためだけに、そのおつむ、使うのよ。

それでね……真っ直ぐにしか生きられない、無器用な人を好きにな
りなさい……。ね。

＊ ＊ ＊

「何か、非常に楽しそうだねえ……お前」

ギャラリース席の一番前に座っている斉藤は、休暇を取れなかった高柳^{タカ}の為に確保したハイパーウェーブ回線を使い、携帯端末のカメラを、よく舞台が見えるような位置に調整した。携帯端末のスピーカーから高柳の声がする。

はい、楽しいですよ。何か文句があるでしょうか。心の中で斉藤はうそぶいた。

殆ど水着と変わらないデザインの服を、年に似合わず見事に着こなしたプラムが舞台の中央にマイクをもって立つ。

『準備はいい？ 十二時間は長いよお』

プラムが叫ぶと、それぞれの科の制服を着たN e x G a s sの学生たちが雄叫びをあげた。

『若者は元気だわねえ。で、ロートルなんて言ったら失礼ですよね。キリシマの皆さんは、十二時間って長丁場ですけど、秘策はありますか？』

『日々の訓練の質が違いますよ。それに、集中力には自信ありますから』

向けられたマイクに嬉々としてしゃべっているのは飛竜だ。霧島

の面々は当然のことながらシャトルライダーを中心に構成されているらしく、主立ったメンバーは如何にもという形のライダースーツをバリツと身につけている。

ステージ中央に設置されたモグラ叩きのエレメカは、タイプは岸の私物とは違って対戦式のものだ。音楽も派手になっていて、ギャラリーには当然学生が多く、もうお祭りと殆ど変わらない。

胸に星のエンブレムを付けた青ジャケがストーンと傍らに座る。

「斉藤さんが、こんなアホな遊びを仕掛けてくるような人だとは思っていませんでしたよ。ホントに青ジャケ着てたときの斉藤さんって、マジでバリ恐かったんですけど」

斉藤がCFDをしていた一昨年に、総合訓練デビューしたヒヨっ子が、もう一人前の顔をしてCFD席に君臨しているのだと思うと、卒業してから一年も経っていないのに、自分が随分老けた感じがしてくる。

「遊びは中途半端にアホよりは、徹底的にアホな方が楽しいと思うからね」

「斉藤さんらしいや」

快活な青年の笑いに、斉藤もつられて微笑む。

「あ、斉藤さんの笑顔って初めて見た気がするな」

「いくらなんでもそれはないだろ。失礼なやつだな」

斉藤がいつもの口調でにこりともせずと言った。現役青ジャケがうへっというように首をすくめた。

あの後、病院に駆けつけてきた霧島松姫に向かっていきなり、斉藤は飛竜を助けたご褒美に半分の二百五十億出す気はないかと、言い出して周囲を仰け反らせた。

上手くいったら、二百五十億は払わなくていいけれど、その勢いでスカしたものだ。

「お前何考えてるの？」

飛竜があきれ顔で言う。

「あのレディー・サヤコのメンテナンス、霧島さんとしてはどう思ってます？ 嬉しいですか？ やっかいですか？」

斉藤が何を言い出すのか、飛竜には毎度のことながら見当もつかなかった。

「それは正直やっかいだけれど。裁判にも負けてるし、もうどうしようも無いというか」

松姫の歯切れが珍しく悪いのは、斉藤が何を言い出すか飛竜と同じように見当もついてないからだろう。

「Next Gassのウィンスレイ教官に打診したんですけどね、微細重力作業の訓練に、レディーの上での軽作業は有効だと思うけどどうかと聞いたたら、当然ですが、悪くないってことでして」

飛竜が身を乗り出す。

「レディーのお尻ナデナデは、もちろん、学生にはいい訓練になると思う。月まで来るっていうのがちょっとフットワーク的に難点だけど。それいいじゃん」

飛竜は斉藤に何とかしてレディー・サヤコのメンテナンスを逃れる方法を考えてもらおうと思っていただけけれど、まさか、霧島本体からレディーの厄災を取り除こうとそこまでのことを考えてくれるとは思わなかった。

「だけどね、そのまま押しつけるには無理があるじゃないですか。やっぱり移動も面倒だし。なんで、ここは連中の大好きな力ケで行きたいと」

「賭？」

飛竜がちよつと警戒する。

「霧島にとつてはサヤコを手放せば非常にメリットがありますけど、Next G a s sには距離的に嬉しくないから、手放して嬉しいってこともないですよ。それで、あそこのシャトルちよい老朽化してるじゃないですか。ですから、ちよつとうま味を加味しないと乗ってこないと思ひまして……」

「具体的には？」

松姫が促す。

「だから、霧島が勝てばサヤコのメンテナンス業務をNext G a s sに押しつけるけれど、Next G a s sが勝てば、新品のシャトル一台ゲットって、これどうですか？ 学校は別にレディのメンテナンスを是が非でもやりたいわけじゃないけれど、万が一負けても、別に学生の訓練という名目で少し移動費用がかかるけれど使えないわけじゃない仕掛けが手に入る。ついでに、ゼロG専攻してる連中の輸送も、運転手の修行してる学生の訓練のサイクルに入れることができますから、まあ、メンドクサイだけでお荷物でもない。だからシャトルが一台くるなら、全然苦じゃないし、むしろオイシイ話です。ついでに、霧島さんとしても、もしレディのメンテナンスが押しつけられたら非常にオイシイですし、まあ駄目だったとしても、シャトル一台分ぐらい、大切な家族がお世話になった母校に寄附しても、税金対策としたら悪くないでしょ？」

「まあ……そうね」

何となく斉藤に踊らされているような気がしたけれど、松姫は何となく納得してしまいかけていた。

「でも、賭とか対戦って、何でするのが」

「思いつきりバカらしく、耐久モグラ叩きなんて、どうですか？」

斉藤が言ったとき、丁度いいタイミングでやってきた一人の女がノウテンキな口調で賛同した。

「それ、面白そうっ。ウチの独占放送ってことで、スタッフに企画持ち込んでいい？」

飛竜は決して月の病院まで来ることがないと思っていたプラムの姿がそこにあることに驚いた。姉というものを理解しきるほどには、飛竜はまだまだ練れていないということだろうか。こういうネタをプラムに嗅ぎつけられてしまえば、当然として、お祭騒ぎに発展してしまうのではないか。

プラムの登場には、もちろん、彼女を？ませればそういう成り行きになるだろうという予測に基づいて、黒幕よろしく背後での斉藤の暗躍がある。この話がでたタイミングで、彼女が登場したのはけっして偶然なんかではない。……けれども。

そんな周到に張られた罠などとは、人がいい飛竜に察する術とて
すべ
ない。

テレビのスタッフの悪のりが入って、入念に宣伝戦略を張られた所為で、一大イベントのように盛り上げられた今回のモグラ叩きはチャンネルを持ちすぎたせいで万年ネタ不足に悩まされているらしいEXK放送の系列で、ぶち抜きで生中継されるそうだ。

——それにしても、耐久モグラ叩きなんて、よくそこまで下らない

こと思いついたよな。歩ちゃん。

「だから言ってるだろ、オレはアユムだってば、優美ちゃん」

これが斉藤にとっては避けることができない課題なのだと知っているのは、もちろん、斉藤のリトルスター、春花だけだったりする。八割がキープできるかどうかについては、最終的に予断を許さないけれど、そうになったらそうだったで、別のイベントを仕掛ければいい。プラムとスタッフは抱き込んだし、今回のモグラ叩きで視聴率さえキープできれば、リベンジ可能だ。敗者復活戦だって、二回ぐらいまでなら楽勝だろう。学生の家族が最低見るから、ローカルなケーブルテレビの視聴率としては、そこそこを確保できるはずだし。

『レディ？ チャレンジ・スタートっ』

プラムの声が響きわたる。モグラ叩きだけでは、絶対に間が持たないので、その間に流行りの歌手のチャリコン（チャリティー・コンサート）だの、会場に来た人だけの楽しみビンゴ・ゲームだの、勝利者予想、賞品付きトトカルチョだの、半日たっぷりイベント企画が盛り沢山だ。

実施までの数週間、斉藤は仕事の合間、合間の打ち合わせに参加していた。ここ数日は、追い込みに向けての最終調整で、結構睡眠時間を削られていた。できる範囲のやることはやったし、後は例によって寝る気十分で浅く腰掛け直して目を閉じる。喧騒が遠くなる。

（突っ込み野郎の飛竜くん、後はよろしく。まあ、上手くいったらレディのお尻とおさらばできるとあっちゃ、霧島チームはカタイかもだけど、まあ頑張ってください。どっちにしろこんな下らないこ

と、自分で何とかしようなんて思わないけどな……）

ふつと斉藤は意識して肩の力を抜き、観戦すらも高柳に丸投げして、一仕事済ませた後の心地よい眠りにおちていった。

終章みたいなもの　ゝモグラ叩き回答、斉藤版ゝ（後書き）

長々とおつきあいありがとうございました。

感想などありましたら、是非お願いします。

では、飛竜が主役のこのシリーズ次作をお楽しみに。

おまけ（本編ラストシーンから洩れた迷場面集↓）

<http://blog.google.ne.jp/jomondo-kusyo/e/2580630a14f48a4feb3899c976e85f80>

【お知らせ】

読者様のリクエストにより、加筆修正の予定があります。

更新しましたら、活動報告とツイッター（[jomondokusyo](https://twitter.com/jomondokusyo)）で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6044k/>

モグラ叩き（三） ～ 課題提出編 ～

2011年1月25日00時28分発行